

# 川柳塔

昭和六十年一月二日発行 毎月一日発行  
創刊大正十三年 通卷六九二号



日川協加盟

No. 692

同人特集・私の一句

一月号

1985年

# 新春おめでとう会

日時 昭和60年1月15日(祝)午後一時開会  
会場 大成閣

大阪市南区大宝寺町中之町二六  
(心齋橋大丸とそごうの間を東へ約100m)  
電話(06)271・5230

挨拶  
兼題  
西尾 栞  
西尾 栞

「牛」 西田 柳宏子 選  
「晴着」 小出 智子 選  
各題三句

懇親宴  
会費 五千円

◆同人・誌友の皆さんのご参加をお待ちして  
います。

川柳塔社

## 西尾 栞 喜寿・金婚 句碑建立五周年記念川柳大会

日時 昭和60年9月29日(日)  
会場 新阪急ホテル2階紫の間

大阪市北区芝田1丁目1-35  
TEL 06 (372) 5101

☆ 川柳大会

☆ 祝宴

主催 西尾 栞 喜寿・金婚・句碑  
建立五周年を祝う会

■詳細は逐次発表致します。

# 祝乙丑新春

## 西尾 栞

謹んで丑の新年をおよろこび申し上げます。

今年も八〇〇枚に垂んとする賀状を楽しみにしている、と言えば誠に目出度いが、その整理に追われて、折角の元日二日三日が何にも出来ない。年賀状は不思議なもので、出したところから来ないで出さんところから来るものである。然し柳友の賀状に、余り上手でないが一句載

っているのが楽しみである。

それで、先般私の教室の人達に、牛(丑)という題を出して、その一句を賀状に書くことを勧めた。

牛馬の労をいとわぬ妻で有難し 公子  
一年生、二年生の生徒ながら、作れば作れるものである。

寝正月丑年という寝正月

喜美代

牛は天神さんの使いや、牛にひかれて善光寺詣りや、牽牛星等と牛に関することが多いが、昔から、牛の涎とか牛の歩

丑年の辛抱の良さ妻の良さ

シマ子

みとかの言葉で粘り強く辛抱強い動物である。

乳牛の寝そべる高原觀光地

千年

新年の牧場乳牛と太陽と

幸子

預け牛迎えの主にもうと鳴き

その

今年も牛の歩みの遅くとも、辛抱強く頑張つてゆきましょう。

松坂肉今日の驕りは誕生日

春子

私事ながら私の今年の賀状は

牛井に幸せがある鼻の汗

章

有難や喜寿金婚のお元日

山動くように牛の背起き上り

重善

を用意している。私も遂に喜寿を迎えるようになりまして。今一息の頑張りで。

紅白をかけたる牛のネックレス

トシエ

牛涎牛歩金婚丑の春

美与子

牛尾となるなど父の口癖に

友一

御後援をお願い致します。

座右の句

柏手のみな善人の音でなる

(操子)

私の句

金婚へ同じ歩幅で暮そうよ

芳地 狸村

# 川柳塔 一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

祝乙丑新春

西尾 栞 (1)

夢

橘高 薫風 (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 (4)

自選集

(31)

■川柳太平記(80) 川柳の群像 岸本水府

東野 大八 (34)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(十八丁〜十九丁)

(36)

上方前句付集の雄編「明石人丸大明神三万句集」(4)

阿達 義雄 (38)

同人特集「私の一句」

(40)

水煙抄

黒川 紫香選 (52)

秀句鑑賞

西田 柳宏子 (51)

同人吟

河内 天笑 (69)

水煙抄

## 夢

橘高 薫風

夢は、先ずはたのしいものだ。その実現への道は険しくもある。それに、夢は儂い。虹に似ている。

麻生路郎の句集「旅人」の自序に、「エスベラントのために一生を捧げたザメンホフ博士は偉かった。ロシヤ文学の英訳に一生を捧げたマーガレット夫人は偉かった。くそ虫の研究に一生を捧げたアンリー・ファブルは偉かった。何れも自分の夢を実現させた人達である。そして川柳に一生を捧げた私は？ 私は言うべき言葉知らない。川柳の社会化運動と一冊のこの句集。私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに、歩き続けよう。」とある。

路郎の夢の続きに私の夢があり、私の夢の続きを、また若い人達が引き継いでくれる。

旧臘二日のこと、定金冬二作品集「無双」出版記念句会の謝辞で、当の冬二氏が、

「皆さんも、私も、魂を掌にとり出して、よくよく見つめながら句作する、そういう心掛けて川柳の道を歩き続けましょう」と言われたのに、私は、初心時代の仲間、林夢虹さんを思い出した。姓が林なので、林のむこうに



愛染帖

橋高薰風選 …… (70)

滝井孝作(折柴)先生を偲ぶ

東野大八 …… (73)

続 斐伊川暮色

小砂白汀 …… (74)

「米」

時末一灯選 …… (82)

一路集「けじめ」

垂井千寿子選 …… (82)

「言い訳」

内海幸生選 …… (83)

初歩教室

本田恵二朗 …… (84)

柳界展望

…… (86)

本社十二月句会

…… (88)

各地柳壇(佳句地10選/植村客遊子選)

…… (100)

編集後記

薰風・鬼遊・史好 …… (113)

座右の句

国と国結べば子等も手を繋ぐ

(操子)

私の句

出店の灯消えて目刺の香が残る

吉水照江

夢と虹があるとの意味で、夢虹と命名したのは私で、まだ三十歳そこそこ、夢虹さんは、十五六の少年で耕りの着物がよく似合っていた。以後、私の家などで研究会を持ち、時美新子、窪田久美子(今は俳誌「青玄」の編集を担当)、前田美巳代ら、現在の実力者も常連で、それぞれに夢を抱いていた。以下は林夢虹作品、二十歳頃のものだ。

魂を掌にとればじゃがいも土にまみれて  
踏絵ふたたび青年の振る赤い旗

異教徒の猛き犬飼うキリシタン村  
朝が来たよと雀が鳴くがふたりは死んでい

た

仲間にはまた、徳永貴美さんという人がいて、寄せ書をしたとき、「川柳の鬼とならん」と書いて鬼美と改号されたが、この人も数年を経ずして作句をされなくなった。

欲がある楽に死にたい欲がある  
見ておれば蛙小さく坐りかえ

結核療養者らしい句が多かった。

このように夢を抱いた優れた仲間も去ったが、続けてこそ夢の実現に近づけるのだ。

「魂を掌に」の一言が思い出させた二十五年前の種種である。

川柳塔二十年記念の年、元日の床に掛けようとして、藤沢恒夫先生に書いて頂いた「夢」の一字の半截を取り出したが、母のみまかった時にも掛けた覚えがあつて、少なからず淋しい。

やはり、夢は儂いものか。



西尾 栞 選

堺市 高橋 千万子

自分だけ善玉になるはかりごと  
興奮の意見に入れ歯だとわかる  
催促するのに三日もする思案  
当然の催促ながら溝が出来  
祭からがたつと落ちた夕食費  
国道を無事に渡って来た毛虫  
日溜りで赤いダイヤの莢を割る  
貧しくも秋はころを飢えさせぬ  
出稼ぎを笑う富農の鬼瓦  
埋れ火は明日の風が掘り起こす  
ライバルに手向ける塩も少し持ち  
受給日の近い財布は覗かせぬ

平田市 久家 代仕男

竹原市 小島 蘭 幸

少年の絵の明るさはなんだろう

赤いべべ着た子を抱き上げて月へはやらぬ

虱一匹我が家が揺らぐはずがない

七五三吾子の唇の小さきこと

開けないで欲しい小箱が置いてある

逃避するための椅子ならひとつある

島根県 榊原 秀子

人にどう話したとてもすむでなし

演出のうまい女が渡る虹

乱れ髪女を捨てたわけでなし

年嫌隣りの柿が三つなり

毅然たる態度くずさぬ人で好き

女系家族でもうは生まぬという夫婦

倉敷市 小野 克枝

新しい暦の前の深呼吸

体重のことには触れず女かな

飽きもせずルールの中のかくれんぼ

ただ笑う母にやさしい冬の虹  
団欒の柱時計は同じ音

よく怒鳴る夫へ耳を捨てました

松江市 恒松町 紅

傍系の中に不倫が一人居た

カレンダーめくると冬の音がする

時に惚け時に確かな話しぶり

木守柿二階の窓は受験生

木守柿こころ旧家のたたずまい

木守柿子供は塾へ忙しい

松原市 谷垣史好

雨乞いをしたし琵琶湖も脳味噌も

ダイエツトするならどうぞアフリカに

鉛パンにへソあり女愛すべし

有難い法話鳥がカアと啼く

うるさ型がいるから五十音順に

馬齢六十信仰未だ薄きまま

大阪市 小出智子

ペン皿のどれもが個性もちはじめ

来年の話で心臓試される

故あって毬の空気は抜いておく

切り口上に言わねば崩れてしまいそう

どんでん返しが来そうな橋にさしかかる

風の音風の便りもとぎれがち

和歌山市 西山幸

忍従の亡母に及ばぬかぞえ母

私とわたしよい友達でいたいのに

清姫になる自信なら持っている

天辺の柿さむかろう辛かろう

敵を愛せよああバイブルが重すぎる

いつからかばら色がない絵具箱

米子市 八木千代

三面鏡三つ許せるまで磨く

美しい壘に満たしてある菓

半分は諦めている果物屋

原色が濃くなつてゆく或る日の絵

泣きながら立つてる塔もあるでしょう

塔が大好きで銀杏も秋に立つ

岸和田市 高橋操子

親離れ何の未練もないつばさ

子供とは何だと親のなげきみる

子へ期待かけた時代はそのむかし

師の影を踏まぬどころか矢を向ける

アテランスすすめたげるに要る勇氣

角栄さんがえらい母さんの政治論

八尾市 高杉鬼遊

読初の夢は方舟さくら丸

年賀状どさり縁のありがたし

今更に覚悟のほどもない日記

行くところも来る人もなく三ヶ日

新年のすずめはパンの屑を食べ

生涯の一日なれど何もなし

子離れの心のすき間は何んだらう  
熟れている女に長い舌がある

桜井市 岩本雀踊子

老婆の顔が狸に見える日も  
平凡だが妻を信じる外がない

後向く女の記憶がつながらぬ  
自問自答善人でなさそうな私

炊飯器の説明も読み妻の留守  
理路整然星の距離ならそれでよし

兵庫県 遠山可住

一善を残す悟りで寺降りる  
医者の子でめつたに薬飲まされず

義理という見えすいている負け戦  
絨緞の価格差居間と奥座敷

初日の出続々編の幕をあけ  
兎小屋でよしこの朝のこの空気

呉市 横田英詩

団欒のどの子もみんな非売品  
大根処刑貴方を許す身代りに

安心をさせると老母が頓死する  
附録つきの親切だから恐くなる

地球自転冬には冬の花が咲く  
月欠けて満ちてドラマをくり返す

岡山県 嘉数兆代賀

焦ってもどうにもならぬカタツムリ  
一人角力で負けたなどとは言うまいぞ

愛憎の絆の中でみかんむく  
言訳はしないと決めた博多帯

商業主義に侵されてきた秋祭  
祭礼の幟にもいるスボンサー

倉敷市 野田素身郎

夫婦仲今も見ている置時計  
脳手術前からひどい物忘れ

スキ焼へ明治の母は目刺し焼く  
菊花展意外な人の名を見つけ

此の母が居らずばこの世にないわたし  
子を生んで一生の荷を背負い込み

男の子生んで子宝口にする  
女の子生んで分身意識する

大阪市 川口弘生

母の闇自分の生んだ子を信じ  
結局はすべてを許す母の愛

聖牛に反芻の癖抜けきれず  
初日の出幾度聞いた今年こそ

八尾市 内海幸生

初詣同じ願いの延々と  
山門で仁王に待ったをかけられる

のろいのは牛歩ではない怠けぐせ  
真白な日記が手許に置いてある

指きりの別れもみじにまた会える  
先に酔う男と約束などしない

八尾市 宮西弥生

指きりの別れもみじにまた会える  
先に酔う男と約束などしない

指きりの別れもみじにまた会える  
先に酔う男と約束などしない



生きる日の白い旗は強く振る  
指きりの約束がありうまし酒

あなたもわたしも酔うてる高瀬川

モーニングサーピスを出てゆく一兵士

米子市 林 端 枝

祈る子の手から翺びたつ千羽鶴

七彩で足りぬ帽子が夢を追う

小咄をその真ん中に手巻き寿司

好きな人と一気に豆の木に登る

殻を剥ぐ卵にもらう哲学よ

婦人雑誌が旧家の蔵で喋り合う

和歌山市 浦野和子

愛憎の谷間で深爪切る女

彩づいてさてこれからを惟う樹々

曲折の愛に実ざくろ弾けます

深海魚陽のさす場所を嫌い抜く

生きざまの付けが余生へどつとくる

山門の無路地へ続く石畳  
和歌山市 福本英子

善光寺詣りを誓う牛の春

従いてゆく人に出会った福寿草

年賀状増える悲鳴と欲びと

初夢の富士が未だに現れぬ

深謝する日が多くなる物忘れ

深入りをして仲裁がする火傷

和歌山市 松原寿子

愛する人はひとり清しき初春の距離  
的になろうあなたが放つ朱の矢なら  
死ぬほどの想いを伏せて返し針

なお慕うおんなで明日を握りしめ

ときめきのなかで他人の杭を打つ

手鏡からおんなの初春が深くなる

和歌山市 内芝登志代

偉大なるお方中国の養父母様

母さんの後姿が道しるべ

会者定離山の鴉も啼いている

ブレーキを父がかければ母は押し

救急車近所へ止った胸さわぎ  
欠点をズバリ言われたさわやかさ

岸和田市 福浦勝晴

ウサギ小屋待つ者はあり夜の膳

秋深し妻に内緒で読むボルノ

めでたさやめでたくもない年一つ

楽屋裏大根脚にけつまずき

ラクンバルシート聴いて若さ取り戻し

古い無情親しい人の名も忘れ

伊丹市 榎谷寿馬

姉の字で宅急便の柿が着く

父の樹も共に荒地を切り拓く

常緑樹が錦もとめる秋の冷え

追い抜いた子の身長にある怖さ

妻の書くシナリオ通り生きてやる



吸いすぎに注意毒とはよう書かぬ

出雲市

原 独 仙

女性的秋陽にやんわり包まれて

余生みな倅せだとは限らない

平凡の凡はわたしにびたりの字

文化国ああそれなのに使い捨て

組板の訴え庖丁の刃が丸い

欠伸した後へひよっこり来た社長

大阪市

津 守 柳 伸

北風に女の意地を見つめられ

抱かれる予感に震う風の中

独り言空しい風の吹き溜り

一陣の風の辞令に逆らえぬ

バラ色の好意を憎む風の宿

深追いはせぬ風向きが変わるから

島根県

堀 江 芳 子

息災なワンマンカーに乗れる幸

白杖の鋭さに負け勘に負け

ほどほどに見よう眼鏡を拭きながら

ペン皿にあせり見られていませんか

心には闇を持たない夫の顔

その悩みとは愛犬の嫁ぎ先

竹原市

森 井 菁 居

セールの焦りを知ってる腕時計

まだ上のランクがあつて爪を研ぎ

雨の日を自分に勝った棒グラフ

やせ我慢の声が聞こえる霜柱

表彰の楯に鎖がついている

まっすぐに登るほかなき男坂

人並な暮しへ噂のりこえる

貧乏を救う思想は親ゆすり

無為無策生きて重たい義理を下げ

浮き沈み浮ぶことなく歳重ね

誘われることも久しき四面楚歌

セールスへ唇寒きひとばかり

松原市

玉 置 重 人

ロボットのネジ締めなおす休み明け

鳩尾が疼く謀叛はやめておく

老夫婦おかずがどうしても余り

指折って何やら足りぬ年の暮

初春やせて日の丸はためかそ

めでたくもなしさりながら初春を酌む

松江市

舟 木 与 根 一

水襲を並べ列島雨を待ち

来年を笑うて年賀ハガキ買う

味噌汁の香りで起きる果報者

鍵っ子のポケットいつも膨んで

政治屋のバジリ菊とは知らなんだ

旅は好し夜には夜の自由席

松江市

小 林 孤 呂 二

派出所も暢びのびして文化の日

守り札あしたの糧になどならず

三角定規の一辺折り返えず日々で足り

男ざかりルールを犯すときもある

独楽の香に大根煮えあがる

加減乗除だけでも女は職がある

松江市 柳 楽 鶴 丸

翔ぶ女毒蛾に見える夜もある

オフィスラブ単身赴任へ落し穴

裸婦の絵を掛けずにおこうやけるから

ミス着物サングラスもよく似合う

計算音痴で金を貯めている

いずれ崩れる政治屋の積木

藤井寺市 兎 島 与呂志

役人にとがめられたら肚がたち

雑踏にまぎれて老いを捨てて来る

一月の寒さは昔の風で吹く

母の声遠くで叱っているらしい

帳尻を外で合せている噂

気まぐれの心を知っている猫で

寝屋川市 稲 葉 冬 葉

百人一首女の膝が崩れてる

兄ちゃんのポートは前へ進まない

花嫁の父に桜湯は寂しすぎ

背水の矢は背中を的にする

京の寺一日尼僧にあこがれる

六感が冴えぬ紅葉の美しさ

人妻の好意うれしく血が騒ぎ

新しい血にウイルスもまぎれこみ

われながらやんわり言えたのが嬉し

ねばならぬ時のみね打ち皿洗い

ひょうひょうと雲が流れる桔芙蓉

ケースバイケースわたしの椅子がない

灯を消せば遠い記憶が目を醒まし 桜井市 河 合 茂 雄

使い捨てされる男の薄い影

絵の下手な夫婦で青い空を画く

真直ぐに歩けとこぼす影法師

モナリザの微笑は女が持っている

転んでも起つまで父は待っていた

叩かれる頭と杭は覚悟する 羽曳野市 塩 満 敏

新札にあやかりヒゲが流行りだし

いつまでも横綱勝つとは限らない

墨の香も久しぶりだな文化祭

秋の音たててどんぐり落ちてくる

定期券見せるに居合抜き

豊中市 安 藤 寿美子

石路咲いてしようむない石生きてくる

裏にまで刷ってるチラシに用はない

都合悪い日に待望の雨がふる

葬儀屋のペースで焼場にもつてかれ

島根県 小 砂 白 汀

あほらしい話真顔できいてやる  
椅子の足孤独な影を踏んでいる

東京都 増田次章

口きけばみんなやさしい人になり

好かれてはいるが自分の無い暮らし

大きく見せて小心の日がつづく

朝起きた時はやる気の今日が過ぎ

口論はとくに本筋はずれ出し

信じてはいないが相性読みかえす

松原市 北野久子

大切にしていますお舅様だから

夫より忘年会の増えてゆく

だんだんと欲の出てきた貯金帳

和気あいあい聴こえたらなと思う

和服着て女らしさを取り戻す

父ちゃんもいい子で先に寝てくれる

羽曳野市 榎本吐来

頰勢をじっくりと見る煙草の火

無策とは見えず男のふところ手

感謝する言葉素直に出ぬ匹夫

手に負えぬ子とあきらめぬ母ごころ

同じ血と諦めてから楽になり

淀みなくすらすらすらと旅の嘘

吹田市 西川景子

中国の土産の筆で初春を書く

初春の荷を引いているのはこつてん牛

献体を初春の湯煙考える

初春の便り牛にお尻をたたかれる

装いも忘れて初春を動く妻

心静かに聖書を読もう初春の部屋

泣けるだけ泣けば明日が見えて来る  
米子市 政岡日枝子

フラフラと天女についていったまま

人形も嫌いな服は脱いでしよう

不意に来た風に帽子を盗まれた

ピアノ弾き後姿が泣いて見え

片道切符の怖さを君は知ってるか

豊中市 田中正坊

長男留学・長女婚約(三句)

父は父子は子の道を行く別離

巢立ちゆくために育てた二人の子

もともとは一人だったとひとり言

六十年直球ばかり投げつづけ

民謡にしびれ地酒に酔う旅情

本論を言えまえおきが長すぎる

崩れても崩されても積む石の数  
大阪市 藤田頂留子

食物を残したむくい歯が痛む

切絵するそれから絵を見る瞳が変り

良い事の為に使おう牛のつの

牛歩でもバトンは千里の虎へつづく

当り年なのに暦は黒いまる

八尾市 山下みつる

人情の機微にふれてるカウンタ―  
郷土史に残る飲み屋になりたくて

大恩のある校庭で小便し

コロッケを買う列に居るヘルメット

職員の手帳余白の先が見え

約束を本気で聞かぬ妻である

大阪市 神夏磯道子

悪いこと去年へ捨てた初日の出

門灯の退屈朝陽待っている

幸せは嬉しいことで眠られず

人生の最高と思う気楽さよ

一病ずつ持って庇い合う余生

もらわれた子犬を思う冬の月

米子市 林荒介

初詣家族みんなの下駄の音

大鳥居そこで木霊にとつとあう

ぶつ切りの大根を食う故郷は雪

雨やんで時計びつたり夫婦だな

コーヒ―の匂いを残している廊下

合掌のかたちで朽ちる木の根っ子

大阪市 西出楓楽

薔薇と蘭折合うことを知っている

縄電車の縄をのばして人を恋う

かごめの輪広げて飢えの子を入れる

寒牡丹自分を過信せぬように

くりごとはお止しと大根煮えている  
歳末の紙幣は私と知恵くらへ

西宮市 杉浦婦美子

若さよし黒が流行れば黒似合う

割り勘のデートは軽い別れなり

良い事があつて日暮れの早いこと

若気の至りですわと顎を撫で

善人の滑稽さがうら悲し

友の訃へ押入れなどを片づける

尼崎市 春城年代

芝居小屋のひとつはあつた城下町

何を盛っても許してくれる白い皿

赤とんぼやさしい指に来てとまる

辻まで送る老母には母の言い分が

艶ぶきをすれば昔の傷が出る

雑木林の小径は愛の古戦場

米子市 桑原伊都

新年や牛にひかれてゆつくりと

バックミラー私の素顔うつして

道しるべ頼ろう峠からの足

未来図が次第に褪せてゆく誤算

夫の靴今日から休み許される

天までも離さぬ風の糸にぎる

鳥取市 両川洋々

綻びの心見せまい経を読む

子感の中にもあろうに母の癌



青い鳥サラ金までも借りて追

職人の涙ロボット見てしま

判一つ押すと他人になれまし

ヒタリつく影武者叛く日が近

地に還る落ち葉の声をそつと聞

若き日の血を呼び寄せる歌に酔

待つ人のない城を守りて十五

盆裁展楽しいふれあひもろて来

かろうじて渡るひとりの丸木橋

再会にしかと絆を結びあ

戯画ばかり曇りガラスの過去に

木枯やうどんに通う夫婦箸

飛火野の湯をおおらかに包む冬

頭から怒鳴ると空しさだけ残り

ガム噛んでゆとりを探す広辞苑

曲り角こころ残りがついてくる

遠州の祈り島には鶴と亀

牛歩でも子の晩成を信じ切る

蝶々の大阪弁が温かい

美人コンテスト中高年もしません

松緑はんの舞へ手拍子打っている

果てしない道しみじみと墨の香に

唐津市

久保正敏

久保正敏

岸和田市

古野ひで

大阪市

中川滋雀

米子市

野坂なみ

非常灯抱いて女が渡る橋

誤解して結ばれ理解して別

完璧の鎧の女嫁きおくれ

売掛帳抱えてママの十二月

ストレスを靴に詰めてパスポート

大臣にするなら資産見せてやる

物思い廻転ドアで廻るだけ

嘘言うた数だけ入歯殖えて行く

好き合った心中でしたことにされ

ポーナスの四、五枚「坊っちゃん」残ったり

非常口真一文字に走れるか

自費出版別れた妻をほめている

夜の膳に一つ入ってた笑い茸

山門に巣造る雀の打算かも

高座からひよいと昔のひとに会う

こだまする饒舌山は暮れ易し

カルテ見て気休め葉やつておけ

茶舗の前で新茶一服振舞われ

元旦やどちらを向いて拝もうか

過去を皆忘れてしまえアワシ柿

政治家は赤外線て写されぬ

ベレー帽冠って娑婆で孤立する

焼きいもよ国民服を知ってるか

岡山県

土居耕花

熊本市 有働芳仙

名古屋市 越村枯梢

岡山県 土居耕花



老妻の紅一点の時もある

大阪市

河井庸佑

誉めちぎりその気にさせる手を使い

柔らかな言葉でいちばんきつい人

差した釘案外利いていずあわて

手加減をしてくるものと信じ込み

要領で渡る世間で行き詰り

五分五分に打つ手加減のむずかしさ

尼崎市

角野かず子

誤魔化せぬ影どこまでもついでくる

やせる本やっぱり無理とよくわかり

三円九十銭亡兄のサインが残る辞書

手紙の字少し乱れて病める友

握られた手にアドリブが出てこない

夜明けにはすこしまがある肩の冷え

米子市

小西雄々

大切な命へ四季が早すぎる

欲のない男へ脳細胞うずく

国鉄の赤字駅前まで響き

オーブンがすみ酸欠の風が吹く

エンゼルの羽根で飛んできたロビー

兄嫁に甘えてならず乾く喉

吹田市

藤村 女

この窓も入試の子が居る灯が消えず

嵯峨の秋霜も早目な柿の色

クリスマス母娘にダンロの火が温い

美しく光る涙にそむかれる

元旦だけは折目正しい膳につき

生き抜いた起伏の命お元日

鳥取県

森田布堂

駅前拡張駅前の反対旗

パチンコで親父と倅顔が合い

心中の車海から引き上げる

新館に軍歌が響く戦友会

新田札やたら欠陥見つけられ

コマーシャルドラマの途中歯を磨く

西宮市

奥田みつ子

屠蘇機嫌牛の歩みの第一歩

無駄少し入れて息づく設計図

お手合わせいつも女房が白い石

石つぶて罪なき人が並びおり

大空を舞台に星のギリシャ劇

毯一つ傍に置きたい時もあり

岡山市

時末一灯

役どころ一歩さがったとき光る

意気込んでやがて寂しくなって役

禁煙車脱線をした夢を見た

月明り歩くしかない肩がゆく

満月よ嘘でなかった便り読む

倉敷市

藤井春日

牛歩よし心豊かに歩まんか

初詣で母の願いが目に沁みる

ふる里の自然にすがって父母は生き  
ママさんテニスみんな笑顔の美しい  
枯葉舞う老人ホームの忘年会

下関市 国弘 半休門

草千里枯れて牛舎へ寝に帰る  
九州場所正月餅を搗いて去に  
藁を着てぼたんしゃくやく春を待つ  
熟年の男やもめが靴磨く  
ゲートボール青春気分を呼び戻し

美祿市 安平次 弘道

愛社心踏絵はさりげなく踏もう  
自在鉤杓子定規になじまない  
花ことば女は花にだまされる  
付和雷同赤信号を渡ってた  
人形も一緒に眠る子守唄

守口市 羽原 静歩

マンションに日の丸明治が生きている  
夫婦箸揃えて遠い坂がある  
幼稚園制作展

歯を磨く百面相の顔がよし  
自画像のギックリ腰にうろたえる  
約束はしたが檜山が近くなる

呉市 林野 甦光

窓の陽へ威張らせてやるシクラメン  
うぐいすの録音を取る露天風呂  
積ん読の机に重く秋が過ぎ

海辺よりたたみ鯛の香が届き  
四股を踏む男にチャンスまだ来ぬか

堺市 藤井 一二三

秋が好きで秋が嫌いで散りもみじ  
炎えつきて落ちるもみじの潔し  
落ち葉しきり悲しいことの余りにも  
かさこそと秋深む音落ち葉踏む

従弟西尾忠和氏逝く

親を残し逝く悲しさに天も哭く

大田市 藤田 軒太楼

診察を待つ苛立に秋陽落ち  
夢見よい朝味噌汁の香に目覚め  
冗談にしては気になる棘をもち  
利に聡い男流れにうまく乗り  
新聞のカナ字に惑う老眼鏡

柳井市 弘津 柳慶

下車してもまだお喋りが続いている  
猫抱いた女男をよせつけず  
減反をよそに黄金の波となり  
表彰状父が残した貴重品  
見栄はって正札通りに買って去に

諫早市 原田 明春

ローカルは満員特急列車は空でいき  
女房に定年がない苦労  
老いてなおエロ本にある魅力  
泥鰌に似て新興団地には住めず

役もつて女房の首にネックレス

玉野市 小谷 仙山

白い息明日の糧のペダル踏む

天の声ガラスの中で聞きもらす

作るより買うのが安いなすかぼちや

夕時雨不意のお客を連れて来る

医療費がいらぬ風邪がさびしがる

弘前市 波多野 五楽庵

透き通るナミダの重いつけまつげ

その指の先に駆け込み寺がある

鈍痛を脅かしている聴診器

自動ドアだったと泣いて帰る瘤

来年の花まで噴水ねむらせる

笠岡市 松本 忠三

真実は一つ表も裏もない

真実を吐いて空しさだけのこり

出る杭になって打たれてやるもよし

作戦をのらりくらりの中におき

前おきの私ごとで恐縮し

桜井市 河合 茂雄

絵の下手な夫婦で青い空を画く

理屈なら一人前に言う若さ

職安でパチンコ情報入れてくる

汗出しているも口ポットには負ける

妻と子に見せる微笑に嘘がない

奈良市 宮口 笛生

小豆島の旅

すばらしい収穫晴れた寒霞浜

太陽が遠く離れた冬の窓

何不自由なくて娘が嫁がない

お祈りの長い女の魔性めく

一ぺんで蹴り足らぬ石二つ持つ

奈良市 森田 カズエ

猛犬に注意犬小屋どこにある

徹のつく家宝もなくて無事な日々

ネクタイを解くとやさしい父の顔

後のことおもって包むお饅頭

何やかや言うて田舎は餅をつき

京都市 松川 杜的

カルテの裏にも何やら書いてある

絵画展和服の二人よくしゃべり

赤い実が一つ水浴びの鳥へ落ち

ラジオ体操の順番さえもう忘れ

酒少し吞んで良寛さんになる

京都市 都倉 求芽

夕膳を囲んで縦の糸横の糸

地味と派手の間に迷うウインドウ

シャボン玉手近な虹にめまいする

ほんの少しからさが足りぬ敵の塩

どんなええ料理も地下なら嫌な母

暗剣殺かも知れぬ眩暈するデート  
京都市 山本 規不風

知らぬ女とあなたが一緒の夢を見る

真相は姑のこと伏せ別居する

十一月の花束新郎新婦が嫌になる

肥え過ぎてすぐ狙われる冬の蠅

大阪市 西 森 花 村

物思う秋焼芋のうまい秋

老眼が霞む涙かもしれぬ

寒くとも犬は片足ちやんと上げ

好い夢は消えても消えぬ請求書

産院と葬儀社遠い距離で無し

大阪市 天 正 千 梢

古風と言うそのひとことでかたづけろ

「住みたいな」はだして海へ行けるとこ

敵か味方か？カメラ持っている

万物の推移公孫樹散りはじめ

今年の秋も私の前を通りすぎ

大阪市 本 間 満 津 子

病人に気合かけられてきた白髪

襖開け家族が同じ空気吸う

爪切ってへそくりすこし持っている

間違つてボタンを押すと墓が出る

馴れすぎたどんぶり勘定から揉める

大阪市 黒 田 真 砂

迷わずに許すと定めた星明り

結局は独りと知った萩の道

想い出はいつもばら色日記くる

すて切れぬ愛の想い出曼珠沙華

コスモスがゆれて独りの座が和む

右左机に火花散っている

ライバルの返事の一つ空ざらし

雨を待つひとにすまぬがもみじ狩り

大みそか夜の十時は閑古鳥

乙丑のんびり行くか新こよみ

誕生日菊の花今真つ盛り

落葉踏む心明るき老い之路

阿弥陀様背なに凡夫のにぎりめし

姑になるのも骨が折れるらし

難民の話聴いてるパンの耳

牛歩でも確かな未来見えている

喜びをすこうしもらう藍の古布

お忍びの女優と会うた紅松庵

唐草の模様だみんな手を繋ごう

お年頃だんだん親が煙とうなり

秋吉台すすきの白さを恋う

おい出ませ開放感に満たされる

鐘乳洞で修学旅行に勞られ

孫が来て今夜は泊るといふ内緒

しばらくは雑音捨てて秋想う

大阪市 鈴 木 節 子

大阪府 柳 原 静 香

大阪府 北 勝 美



大阪市 鍛原千里

両面の実赤くなる頃嫁に行く  
新春へ亀の動き早くなる

焼きいものうまさをすっかり忘れてた  
とろろ汁亡母の味にはまだ遠い

中年の見栄は悲しい風の音

大阪市 西村 芙佐女

初日の出飢えたる民にもあたたかく

賑やかな年始女系家族なり

正月も生業が頭の隅にある

生活のにおいを消せぬ小正月

端座して昨日も明日も捨てている

大阪市 長谷川 春蘭

爪弾きの独り居月が愛想する

逆風にさかろう男の身勝手さ

晩年を先ず健康の拾いもの

深みゆく秋七変化黄葉紅葉

押花にしたい紅葉を二三片

大阪市 大野 武太

いくつもの病い忘れて除夜の鐘

おだやかな年であるよう鈴ならす

ナムアミダそこだけ僧と唱和する

金貸してそれから寝付悪くなる

グリコ犯もし核兵器手にしたら

大阪市 山根 いつを

子は鏡一生叱るまいとも思ひ

言づけの丸は四角になりやすい  
ご破算で願えぬ齢をまた加え  
だしぬけに襲うのでなし年の暮  
足向けて寝られぬ人が八方に

大阪府 坂口 公子

澄んでいる井戸の深さにある安堵

あの言葉頂戴しました秋の夜

どん欲に生きて夢盛る赤い靴

こども又お大師様のお成り水

もみくちやになって箕面の紅葉狩

東大阪市 斉藤 三十四

信用をされて鍵束重くなり

勇気ある男は小さな義理を知る

運動会走るのだけが自慢の子

お名前は知らぬ神様だけど挿んどく

ベレー帽毛はえ葉はもっている

東大阪市 桑原 喜風

臍繰りのまた年玉の貨幣価値

気丈夫も寄る年波に痛む腰

年寄りの癖間に合わぬ物を蓄め

食べて寝て太陽に詫び癒え祈る

使い捨て祖国平和に屑の山

東大阪市 森下 愛論

初詣墨絵のような道を行く

隙間風寒い寒いと玉子酒

晩さんという楽しみのネギ刻む



庭先に住みつく鳩の夫婦も  
小雀の樂ではないぞ今朝の雪

兵庫県 辻 文平

母の胸借りてあふれる涙盡  
木枯しへ男独りでいたい夜

掘炬燵亡母の影絵が逢いにくる  
馬鹿になることが上手な母の箸  
忍従に馴らされて来た母の腰

兵庫県 河原 みのる

ニッポンの秋どん栗の多すぎて  
年功と派割でおとどの首をかえ

どん詰めは金が丸めた自民劇  
大臣がどないかわろと霜の朝  
来年はどない作ろと種だけは

西宮市 林 はつ絵

生きる日の不得手なお世辞言うている

いつからか触れぬ黙約できている  
老母が逝きポケットにある懺悔録

風化するだろメダルを奪い合う  
福の神信じるとこへやつてくる

西宮市 野呂 鶴汀

滝つぼで妻も子供も手話になり

冬知らぬ蟬よ鳴くだけ鳴くがよい  
停年で妻も夫の顔に飽き

喋るだけ喋れば女食べ続け  
窓を背に社長の椅子は六十度

時雨から情けをもらう湯治やど  
短日のにわか旅に出たくなる  
西宮市 藤村 宏子

大根のぬくさうまさに秋暮れる  
一笑に付されその夜の長いこと  
信じきる子猫の目にも冬日さす

西宮市 西口 いわゑ

松林抜けると風の音が消え  
秋桜少女はものを思うなり

鮮やかな夕焼亡父と見た記憶  
コスモスが揺れてやさしい亡母思ふ  
好き事があつて寝るのが惜しい夜

西宮市 妹尾 春江

乳牛のどれも豊かな乳房抱く  
強がり可言えども遠き冬の虹

安らぎはつかず離れず友の居て  
旅の町洗濯をする川流る

人の世や裏切られても人が好き  
西宮市 草刈 墮駄

朝帰り呪文に似たる独り言  
温泉につかれば猿も哲学者

優勝劣敗僕がいるのに進化論  
円周率ただそうなるだけ理外の理

西宮市 津山 冬子

仏の無天地に満ちて無碍自在  
とまり木に浅い眠りの老夫婦

陽の恵み知らずに終る水中花  
元且も作業衣がいる父の背  
老い二人温い流れの中にいる  
ポーナスヘミンクが欲しい夢を追

鳥根県

堀江正朗

欲言えば欲を尋ねる目が欲しい  
刻む音煮える匂いが胃に聞え  
横車はけたくないから押してみ  
欲はまだ捨てず聞き耳立てている  
叫んでももう青空は振り向かぬ

鳥根県

梅みどり

やせ我慢してから歩幅くるい出す  
十年も涙がかれぬ墓参り  
食進む夕餉の膳も秋に入る  
切り札を出せぬ女でいとおしい  
果せない夢おしつける親のエゴ

鳥根県

松本文子

老父と老母合わぬ歩調を孫合わせ  
泣いて泣いて又化粧する女  
憎しみをこめて一本の白髪抜く  
ひげのびた小言はうさんくさくなり  
菊の香よ妹の死を清めたり

鳥根県

木村はじめ

又今日も社会の隙間風が吹く  
耐えている時の辛さを鞭にする  
老い二人献立のない膳に向く

愚痴言わぬ母が大きく見えてくる  
長男に欲しい連れ子の胆っ玉

鳥取市

森田熊生

女の子腹立てているまた食べる  
世をすねている足音に四季がない  
缶ビール気楽な旅をひきうける  
立志伝僕には遠い日記帳  
父に似たがんで金に遠くいる

鳥取県

川崎秋女

アロエ酒今年も一本造りましょ  
曲がり角曲がろう明日が見えるから  
一枚の切符がくれたある出会い  
意地という二字で走ってきた貨車で  
カマキリのウロウロと死をさがす

鳥取県

林露杖

蓬莱峡神の造形風は秋  
バス快走ビデオ見る人眠る人  
欲捨てた日から世間が広く見え  
骨壺に涙は容れて欲しくない  
父権また低下国際婦人年

鳥取県

新家まさる

潮風とレモンひとつでなおる傷  
魚にも鳥にもなれず海に佇つ  
旅人のある日目覚めぬ朝が来る  
ペンギンも時には空をなつかしむ  
だまし船仕掛は知っているけれど

鳥取県 福田保子

枕木の自負なる男の腰太い  
退職金持参二度目の職に就き

血の通う対話腹の子知っている  
産気づく日まで柳誌を読み続け

胎教へ悪い話は伏せておく

鳥取県 中原諷人

どんぐりの山に恩返しに溢れ

白髪チラチラ男を占めて男にす

凍み豆腐やがて菩薩へやわらかに

図書カード書いて諭吉へ遇いに行く

牛の背中できどきは振り向こう

唐津市 仁部四郎

世は情柿栗蜜柑到来す

犯人もどこかで見てる秋の月

挨拶の順序を笑う鱗雲

決意ではあろう二階へ音を立て

虹は虹花は花だと書く童話

唐津市 浜本義美

しみじみといのちを想うお元日

春光悠々牛が長閑に欠伸する

神様はよっぽど酒が好きとみえ

頑なに主張のあとの孤独感

仲人へほんとの齢を言いそびれ

唐津市 浜本久仁於

元旦の物音ひかえひかえめに

聖寿万歳小旗を振りに初参賀

めでたくも昭和還暦迎えたり

元旦の決意今年もおなじこと

元旦のいつとはなしに妻の音

唐津市 田口虹汀

新春に酔うて候三の糸

紅刷いて女遮断機潜る時

犬は鼻猫は両手で戸を開ける

他所見して居る間に喜寿の宴が待ち

狸々の謡しみじみ喜寿の顔

米子市 石垣花子

秋の天蟻は道草しなくなり

天へ向け雑言などは吐かぬもの

天の神ステンドグラスの中に住み

寶石がとっても似合う丸い耳

伊勢曆まだ吉凶を信じさせ

米子市 雑賀美代

相部屋で同じ願いの鶴を折る

百本の点滴耐えた父の腕

病棟の六階で見る秋の雲

心の疼き受けてはくれぬ聴診器

病灯の芯まで揺れる秋の夜

米子市 菅井とも子

行き先を知ってる父の帽子掛

旅終えてこぼれ話も二つ三つ

取材され明日の新聞気ももめる

牛歩でも今年は波に乗る覚悟  
単身赴任炎抱いてるかも知れず

米子市 田中 亜弥

空箱の中でカラクリ見つけたよ

鏡台へ恩を返したやすらぎよ

丸かくとへのへのもへの笑い出す

評された日の青い空忘れまい

鈴振って離れの老母の願いごと

米子市 青戸 田鶴

橋の手前で亡母の迷いにたどりつく

歳月よ背なの丸みは言わないで

八十八廻ると鈴も澄んでくる

許しあい水も流れを深くする

天にだけ忠誠誓う葱坊主

米子市 寺 沢 みどり

いちじくの位置へあぶない箱を積む

湯豆腐の揺れを昆布がたしなめる

じみじみと見ればやさしい達磨の目

夕暮れの鏡に今朝の貌がない

追いかける余力残していたベダル

倉吉市 奥谷 弘朗

人柄が町内役にもってこい

はちきれる裸婦に老眼うろたえる

名目の墓参やっぱり票稼ぎ

了見の狭さを叱る海がある

オーブンにオッチョコチョイが顔を出し

倉吉市 渡辺 独歩

保健婦も主治医を真似たことをいう

ジャズダンス嫁が洗濯しておるぞ

赤旗の竿には金鶏止らない

カタカナの英語辞典が要る柳誌

エンゼルを泣かすとギロチン待つてるで

倉吉市 野中 御前

乗りかえた木馬が仲々走らない

妻が振る鈴が重荷の五十坂

手折らぬを承知で燃える曼珠沙華

鼻の形しみじみ見れば母娘だな

湯豆腐に意見が合った老夫婦

寝屋川市 宮尾 あいき

おだてられておせち五軒分作らされ

お隣さん風鈴寒いと泣いてるよ

帰り待つ子へ湯とうふの湯が溜れる

谷町のビルの谷間に地藏尊

問屋筋いちよう一葉ひろて来る

寝屋川市 柴田 英壬子

妻たちの時間はじける笑い声

有卦の年まで減らず口抱いておく

換気扇もう汚れてる十二月

チューハイに顔を出させぬ三カ日

米びつを満たして丑の初春のどか

逃げを打つつもりはないが旅に出る

寝屋川市 堀江 光子



旅人の気軽さで見る村祭り

地図にないコーヒー店で「枯葉」聞く

気が付けばもう虫鳴かぬ夜となり

青空を映す夢見る地下の川

岸和田市

原 さよ子

夢足してくらしを少し引き締める

ぼろぼろの辞書は私の知恵袋

美しく老いたい願ひへ法話聞く

譲られた席うれしさと淋しさと

縁談を頼み合うてる同窓会

岸和田市

島 崎 富志子

人なつこい牛へお愛想言うて春

七癖の一つ二つが娘に継がれ

電化時代女の腕が錆びてゆく

よく当る第六感を持って余し

お人好しそんな女が居てもよし

尼崎市

春 城 武庫坊

四面楚歌ちよつと一服してみるか

国訛りきらって爪をかじってる

着飾った女は風をつれて来る

無駄ごとの違いが姑と嫁にある

故郷を沈めた水で生きている

尼崎市

奥 山 美智子

初鏡なにはともあれ華やけり

永遠のテーマに愛の字を選ぶ

反省へきれいに水が澄んでいる

引退の影がむなしほど淡い  
真つ白い紙に心を覗かれる

尼崎市 角野 かず子

手袋のまま不透明な握手する

後ろ姿ばかり見せてるモデルさん

白旗になるハンカチを握りしめ

皺くちやのハンカチが知る感情論

物さしが違つただけの罪ゆるす

和歌山市 若宮 武雄

寒菊へ余生の今を見届ける

どんぐりを百個集めてみたものの

和尚さんの左様さようの滑らかさ

旗色を読む蝙蝠になりきれず

寄附帳に褒められちゃつた兎小屋

和歌山市 堀 端 三 男

あつさりと水に流せぬ義理がある

ふところの深いあなたに従いてゆく

夢の街描く兎は緑ありつたけ

風当たり避ける小さな嘘ひとつ

サンダルの音せかせかと路地に住み

和歌山市 坂 部 紀久子

新札の出た日に入り出て行つた

結局は何用だったか長電話

真直ぐな寝相で嘘のつけぬ夫

先頭は嫌い狡い性でいる

シヤリシヤリとリングつがるの語り部で



和歌山市 富上光代

誓うことあり今は黙って聞いて置く

傷ついた夜の枕はよく動く

味わいの深さ土鍋が煮えている

舞台裏知ってる拍手気が乗らず

心にも少し遊びがあつて無事

富田林市 岩田美代

でたらめに喋って秋をぬくうする

三度目の奇跡待ってる鼻の汗

即答をさけるための笑いです

闘病の湯に飽いて来た宿のめし

過去の花ふれずに秋の夫婦いる

富田林市 藤田泰子

天国と地獄三面記事の裏表

貝殻の中で虚しい風が吹く

背景は秋に変わった家庭劇

友達の後を歩く安堵感

蒼い月夜間飛行の窓の中

今治市 越智一水

秋風の足跡を追うひとり旅

落ちついて見れば仏に見える石

海に出たこがらしそれからどこへ行く

豊作というのに百姓よろこべず

ちちははが悪いのでない貧しさよ

今治市 矢野佳雲

お世辞とはいいいものやはり気がなごみ

菊が好き少し平凡すぎるかな

妻と子は返り血浴びぬとこへ置く

来世も添おうと余程いかれてる

やれとやめ一字違いだから悩み

高知県 松岡三吉

上品なお口で食えぬいなり寿司

三角な目でほんとうの話です

うなだれて返事に迷う膝小僧

すんなりとコアラは億の家に棲み

潮どきを知らぬ男の負けいくさ

高知県 赤川菊野

プチックの鏡はみんな嘘つきで

一期一会蘇州の風も秋のもの

かごめかごめ仲間はずれの子が一人

元日も家族は私一人だけ

その舌で墓穴掘ってるとも知らず

綾瀬市 大山と金

老夫婦世事いつまでも八つの差

過去になるその瞬間がつかまらぬ

千姫になりきっている姫舞う

姫舞うて娘心になりぬべし

平和なり平和唱えずとも平和

新宮市 川上溪水

酒の席自慢したがるのも交り

背伸びした話題へ入って重い口

正確な時計を持って遅刻癖

死なれては困るが夫の保険料

願ひ事努力しだいと言うみくじ

宇部市 平田実男

忠告の勇氣ないから見ないふり

せめてもの裏切り移り香抱いて寝る

良心があるから言わねばならぬ嘘

アデランス補聴器入歯コンタクト

大臣の椅子から曲った主義主張

高石市 牛尾緑良

幸せが薬指から深くなる

妻の誕生日に贈るのは笑顔

手料理へ食べ残さない夫婦愛

宝クジまだ手に染めぬ壮年期

ちっぽけな平和を税にしぼられる

神戸市 山口美穂

湖に錦を写し賤ヶ岳

さしかかる五十路へ迷うことばかり

なぜか五十を五十を待っていたわたし

五十路まだ夢を抱いて越す峠

人恋し恋しい夜が静かすぎ

羽曳野市 中村優

花の性替える鉄を女もち

白旗や隠忍自重に策があり

愛憎の隠し味かな美辞麗句

ペン先の魔術にかかるベストセラ―

いい夫婦狐と狸のままで良い

羽咋市 三宅ろ亭

一陣の風をおこして鶉群

山茶花の庭を歩いて配達員

霞叩く雨戸は明治にできたもの

宮詣り寺詣り忙しい元旦

老夫婦お芽でとうとうお元日

免許こそ無いが糠漬旨い妻

沢庵を噛む幸せな朝の音

外務員だけ僕の菊ほめて去に

老いの日々淋しくないに嘘がある

履歴書も辞表も書けぬ余生かな

芦屋市 竹中綾珠

鶴が来たしらせに日本冬に入る

散歩道お馴染も出来立ち話

出港の汽笛が消える秋の空

栗御飯今年も無事な秋に会う

ポ―ト部員揃えた権の天高し

河内長野市 井上喜醉

倅せな道を信じて夫婦牛

裏口へ大きな声で来る出前

緑側の猫が気になるシャボン玉

街角の小さな善意さつと去る

気まぐれで余白の多い日記帳

福岡県 横地雅風

月煌々私の寝顔を盗りに来る

闘病もただではしない株の本  
停退の指太くなる趣味の畑  
停退の夢承らえて画廊展  
違和感は女柔道の金メダル

枚方市 稲葉 星斗

萩の寺(新西国霊場第十二番)

萩叢をくぐりて札所東光寺  
萩の寺句碑を讀えて筆を買  
興奮の人馬も揺ぐ菊花賞  
秋深し独身寮で針を借る  
柿一つ残して終る冬仕度

浜田市 中川 幸一

兵隊の位のまままで老い耄れる  
教科書のような愚妻の言うことにや  
外から見るとあんな立派な屋根も漏る  
負け惜しみ貧乏しても足るを知る  
凡くらの孫が合格した報せ

八尾市 宮崎 シマ子

初髪の娘母似の笑顔持ち  
お年玉孫の願いと一致して  
回覧板届けてくれて菊をほめ  
後から声かける程の仲でなし  
約束は来世も貴方と添うという

倉敷市 小幡 里風

札入れの小型商魂逞しい  
父さんも一目置いた子の主張

中庸を歩いて勝抜く肚ができ  
自分でも大分呆けた独り言

寝屋川市 江口 度

気まぐれな矢もあるだろう宝くじ  
田んぼ売る話を案山子聞いている  
野仏の膝あたたかい草紅葉  
成長がとまるとひげが伸びてくる

八尾市 飯田 悦郎

ブライバシー守って生きる寡婦の城  
花言葉ロマンティックにして捨てる  
偶然にしよう珍しいランデブー  
センチメンタル風に木の葉の音ばかり

仙台市 川村 映輝

元日や八十一と七十二  
脳軟化夢の中に居る瞳  
菊薫る来年の堆肥落葉追う  
愛妻の留守愛猫を足蹴にし

橿原市 岩井 本蔭棒

善人に必要はない黙秘権  
夢じゃないかと確かめる夢の中  
心底の夜叉をかくしている化粧  
花道の顔が一番美しい

大阪市 欄 蘭

面接へ給料休日逆に問い  
遺憾と言う二字でけりのつく政治  
貧乏慣れ集金人にびくつかず

食い溜めも寝溜めも出来ぬ三ヶ日

大阪市 中西兼治郎

気味悪いものに玩具でも銃口

前列のまん中空けて待つカメラ

素晴らしい知恵で生きてる蟻地獄

白バイが追越して行きホツとする

大阪市 坂本仙吉郎

結婚式に招かれて

仲人の言葉はいつも型通り

門までも送ってくれる人が出来

月並みの祝詞にしては長すぎる

親<sup>ウケテ</sup>族<sup>ウケテ</sup>家族見守る中をケーキ剪る

大阪市 吐田公一

豊かさの中で心の飢えを抱き

両脇から覗く新聞ままならず

故郷訛りきつい男の独り言

嫁ぐ娘へけじめをつけておく敷居

島根県 大森孝華

秋深し過去をしので旅の私語

振り向かぬ言葉沈黙にある重味

もつれ糸結局わが手でときほぐし

久しぶり故郷のムードへ酔うて見る

島根県 石田清泉

コアラにも名前をつける余裕もち

漱石も馴染めないのかわが財布

自画像の鬼の棲家をのぞきこみ

自画像に皺一本を添えてあり

島根県 岸本輝水

火葬場でつながる縁を聞かされる

洗剤で洗った皿を嗅いで見る

長い夜を妻の寝息で助けられ

仕舞い風呂呂今日も無事な肌をなで

島根県 松本はるみ

そこまでは言わずにおこう花の種

シグナルの青一瞬の罪を見る

紫の靴がはきたいだけのこと

人恋うて垣を越えたい秋ざくら

島根県 藤原鈴江

死にざまをきれいにしたい庭を掃く

どれだけの事ができるかこの指で

割り切れば淋しくなるから割り切らぬ

ダイヤより尊いものを陽にもらい

島根県 北川民子

おとなりの鐘に驚き柿が落ち

歯が痛み八つ手に頬を撫でられる

碁仇が内助の笑顔に気をとられ

魚焼く家のともしび安らぐよ

姫路市 大原葉香

冬近しビルの雨には色がない

先生のデート生徒に見つけられ

野良仕事にも停年の欲しい秋

市場籠秋買い足して荷が溢れ



姫路市 松浦輝月

日傭の中にあの人見た痛み

石女が指切り無にした人を恋う

子の破談夕餉無口に夫は立つ

ヌードショーあんなお方がかぶりつき

姫路市 丁坪サワ子

秋深み兄逝き姉も来なくなり

十回忌未だ亡夫待たす趣味の道

小さな嘘一日たてば町泳ぐ

さりげない笑顔で妬心隠し合い

尼崎市 伊藤春子

面接のくだけた問いへつい本音

脳死線絆の声にははまれる

上げ底のなさけへ秋の風が吹く

信念を捨てて虚飾にふみ迷う

尼崎市 西村かすみ

七人の敵にも出した年賀状

頃合を黙って妻の茶の香り

緞帳へまだため息の母娘連れ

退屈をさせぬ女がいる炬燵

出雲市 園山多賀子

坊っちゃんのお札一番馴染めそう

出来過ぎた子に老夫婦残される

ロボットの汗も涙もない退け目

総裁の椅子座り直して眉太く

出雲市 吉岡きみえ

すこしだけケチツた中味に悔いのこる

鈴つける役目で男もめている

泣けるだけ泣いて笑いたくなるこの世

血の絆遠くに病んで胸痛む

出雲市 石倉美佐子

鳥追いに母恋塚は遠くなる

満たされぬまんま水引飾られる

空箱を重ねて未練をまだ残す

女には甘いヒントと思う風

出雲市 落合正江

聞き様ですべて楽しい風となる

拝復と書けば秋が深くなる

洗濯機廻し疑心を泡にする

善人の夫と歩幅よく揃い

鳥取県 清水一保

顔洗う度に脱皮もしたくなる

北海道の旅中にて

阿寒湖の湖底にアイヌの声かすか

摩周湖にて

澄み切った湖水人間まで洗い

故河村日満をしのんで

人間を卒業立派に逝つた人

鳥取県 福田あや子

倦怠期すぎて無口な二人住む

表札に小さな命又添える

スムーズに行く筈だった組閣ゆれ

登攀訓練勇む男に紅葉散る

岸和田市

清野 こう

他人には焦点ぼかす夫婦仲

岡山市

行吉 照路

義理からむ保証で負うている憂き目

裏切りへ心閉ざしたままの友

木犀が其処ここ匂う裏通り

娘が一人近くにいたらと寡婦の愚痴

岸和田市

芳地 狸村

極楽へ渡る切符を買った夢

月に矢を向けて童話の夢破る

顔見世が勘亭流で幕が開き

偶然に出逢った女今は妻

岸和田市

吉水 照江

誰よりも真実味方は亡夫だけ

明治びと昔むかしは忘れましよう

ストレスも高く付きますパチンコ屋

背のびして背のびの人生ながかった

岡山市

川端 柳子

石段の一段毎の風景画

飢えていた頃に与えていた母乳

中年を過ぎれば誰もが古狸

知られざる地に知られざる花匂い

岡山市

井上 柳五郎

大輪の末裔なのにちさく咲き

ぬる爛でよし水焚き煮えたぎり

ピンボケのような答で話題避け

丸腰で毬をついてる敵味方

縄飛びは三百回の六十路

メモ魔かも何んでも書いてる六十路

鬼火かも燃えて燃えてる六十路

岡山市

直原 七面山

胎動へ弾む胸

妻居らぬ酒の席

仏力を説く尼僧

仕合わせを知る枕

岡山市

岩道 博友

年金の独楽も時には脱線か

予感まだ当らず忍耐して続け

傷口を縫うて先輩顔をする

その時の都合で頼んだ神詣で

和歌山県

天満 三千代

聞き上手話上手をもりたてる

義理一つ過ぎて二の義理待っていた

くしゃみ二つ朝の喧嘩を思いだす

思いきり蹴った小石にさからわれ

七尾市

松高 秀峰

椅子取りに負けてからの反対派

食事より三度の薬が高くつき

フリーパス大きな門の前で止め

人生のB面という二度の職

境港市 細木 歳 栄

秘めている本音あなたになら吐ける

意地張って生きる姿勢を崩さない

幸せと思う正月茶三昧

山鳩も生きねばならぬ冬の畑

神戸市 仲 どんたく

文化の日律義に高い天となり

人生を封じこめてる舞扇

くりごとを聞いてあげてる爛冷まし

モノクロをカラーに変えて秋の山

町田市 竹 内 紫 鏑

横書きの字幕に毎度逃げ切られ

アンコール受け父母に似る目鼻立

カラー写真はなく溶鋼の職場去る

六十路の芸で先生と呼ばれ出し

和泉市 西 岡 洛 醉

背伸びする足許空しい風が抜け

うずくまる猫にもあつた思案ごと

つま先の感触にある地球儀よ

爪染めて明日の暮らしへ立向かう

東大阪市 崎 山 美 子

不合理をつくペン先の武者ぶるい

ある時は自分の心あばくペン

片すみの善行しらせる投書欄

ほどほどに引くのも勇気のうちと知り

羽曳野市 佐野 白水

文化祭教師も踊る阿波踊り

文化祭僕はタコ焼き造る人

おらが春孫の嫁入りまで生きん

姪の結婚を祝して

一と時のコンパが結ぶ今日の幸

唐津市 木塚 素石

海女たちの声高となる霧の朝

新しか着物うれしい祭の日

つん読もまた良しとして玉子酒

色良くば味もよしとす海苔値ぶみ

貝塚市 行 天 千 代

友見舞う(二句)

見舞つても顔も覚えぬ虚ろな瞳

泣いて居るボケて居るのが解るのか

気持ちだけ若いつもりで身繕い

年賀ハガキ買う列にある役目

西条市 片 上 明 水

十二月いま来た道をまた戻り

十二月羽根の傷みが目立ちかけ

小指にも用事を頼む十二月

友の手を引くなら回り道もよし

浜田市 佐々木 裕

向こうみずトンネル出ても向こう見ず

上手下手あつても趣味に値が付けぬ  
秋を盛る皿は大きい程が良い  
逆転へのるかそるかのカント攻め

倉吉市 渡辺 菩 句

カメラ向けられると花になる私  
外国の美女に食指動き出す  
自分という患者の顔みるある日  
ある日ある刻秋風にソナタ聴く

和泉市 岡 井 やすお

向米と北方領土二兎無理か  
考古学うしろへうしろへと進む  
お役目がすんで案山子は大の字に  
運動会も遠足もすんだ雨よ降れ

兵庫県 藤 後 実 男

病院の部屋まで退職すすめに來  
人情がこの町にある水車小屋  
人妻と逢わぬ日もある終電車  
わらべ唄昔の道が消えてゆく

交野市 山 本 テルミ

孫去んで三輪車がある秋の雨  
焼芋の値段庶民を遠ざける  
末っ娘もおしめ干す手が母である  
大正にはまだ親しめぬアイシヤドウ

松江市 竹 内 寿美子

母の塔真すぐに竹つ風の中

北風がすこし気になる塔の先  
亦一つ夢失つて樹が育つ  
母の描く線はすこし曲っている

豊中市 上 田 登志実

ポーナスもマアーマアですの年の暮  
去年今年つながら夜の置炬燵  
手をあげた男だソツとして置こう  
戦時下の苦勞いまだに夢で見る

高槻市 竹 内 花代子

夾竹桃クレーン車で倒される  
蚊を殺すこともためらう仏の日  
寂しさは一膳になった夫婦箸  
右左迷う心に亡夫が居す

加賀市 細呂木 魯 木

子育てを終えて女を二分する  
無造作に捨てた種子にもある命  
マラソンの駆け引き人生を真似てみる

出雲市 板 垣 夢 醉

宵待草が聞くから照れる片想い  
蟹無念爪立てたままゆである  
税金が払いたいのに職が無い

奈良県 宮 川 古都路

鈍行に合縁奇縁の里なまり  
モデルコース街を散歩に食い倒れ  
七難は地獄浄土の座にねむる



# 自選集

新年の誓い初心に詩日記

地球の未来は人間ロボットになる

無欲者と知つてくだます人も来ぬ

人生の縮図へ朱筆用意する

年忘れ酔うて見たいと酌ぐ女

藤井明朗

秋の彩さがし疲れてありがとう

報いたき願いを咲いて花のいろ

通じ合うところを乗せて雲流る

確率はゼロ青空がゴーサイン

誠実に勝る手段が外にない

新人の人氣が敵をもう作り

美しさは瞳に可愛さは鼻にある

ちよつとつままれただけでも鰻には急所

金井文秋

後輩に越されて今は生き字引

コーヒー一杯仕事の句読点にす

年金の新春も日の丸ちゃんと立て

元旦の霜に寒さを感じない

寝たきりへ初日拝ます戸をあける

米沢暁明

丑年の春も目出度い七回目

こぜわしない暮れ信号を無視しかけ

元日は飯粒抜き腹で寝る

新紙幣指紋の外に折目つけ

ポケットで剩りの小銭が年を越し

市場没食子

踏み直す登音春の扉を開ける

ふり向いて見まわすすばらしき凡夫

水粉千翁

新紙幣指紋の外に折目つけ

ポケットで剩りの小銭が年を越し

ポケットで剩りの小銭が年を越し

月原宵明

耳打ちへゴクリ動いた喉仏  
倅せになつて峠から下りる

本当の握手は左手添えてくる

蝸牛殻があるから嫌われぬ

日々好日茶碗の上に箸を置き

黒川紫香

ひとり行くどこか寂しい冬の影

沈むたび夕陽は赫く赫くなる

女子寮にテルテル坊主晒される

落城の石は掟を刻みこむ

犬だけが聞き耳をする口笛で

本田恵二郎

腹芸でまんまと腰をくだかれる

真四角に折りたたまねば気がすまず

よそゆきをかなぐり捨てた気楽さよ

今日一日やじろべえになつてみる

神かけて嘘は言わぬと嘘をつき

正本水客

嘘ひとつ隠すに鼻を突き合わせ

みそ汁へ母のマナーは変らない

貧富の差いちよう並木を歩くとき

失敗を隠す大きな顔をする

犬つなぐ鎖を長くしてみても

工藤甲吉

壮大な緞帳となる初日の出

丑年の生まれと言えばうなずかれ

仏さまをおいしい水で喜ばせ

ふるさとへ一恩を返せる人になり

新札でなくとも多い方がよし

大矢十郎

メイどインジャパン孫の手にある人気

上げ底で祝えば返る落とし蓋

鉄兜あれから被らぬヘルメット

貧乏国の頃は役所に情があり

美しい毘には落ちて思案する

野村太茂津

年賀状やんわり生死慥かめに

定年を決めてた今年古稀となる

木刀を百振り古稀を死語にする

自分史を綴ると模索の章ばかり

結果だけ捉えて過程見過ごされ

長野文庫

一年中空を掴んで往きもどり  
一年余病んで情眠の癖がつき  
冬の蠅生きる権利を主張する  
欲ぼけて居るなあ後生まで頼み  
根性も忘れてしもた八十二

山内静水

趣味多忙出かけるたびに若返る  
インスタントコーヒかきませ落ちつく家がある  
観音の鼻高からず低からず  
生かされて未完のままの安らぎよ  
残り火を燃やして豊かに終らんか

橘高薫風

寒山寺鐘声耳にありて除夜  
飛ぶ鳥へ飛ばざる鳥へ初光  
但馬牛美し百獣の王よりも  
東京の娘の着くを待つ祝膳  
祝膳孫の正座はままならぬ

第5回

ときせん賞作品募集

雑詠2句（未発表句）

選者 大野風柳・去来川巨城・橘高薫風・寺尾俊平・小松原爽介

投句締切 昭和60年1月末日着便

発表表 昭和60年時の川柳4月号誌上

賞 ときせん賞 一名

準ときせん賞 二名

佳作 五名

投句料 五百円（定額小為替）

▼誌友外で発表誌希望の方は

三百五十円追加のこと

投句先 〒692神戸市兵庫区大同町2丁目3-18

卜部晴美方

時の川柳社編集室宛

選句方法

無記名清記の上、選句一句ごとにその合計点で順位を決め、上位8句を入賞とする。

（平拔2点・佳作3点・三才4点）

時の川柳社

川柳太平記 (80)

川柳の群像

岸本水府

東野 大八

— 恋せよと薄桃いろの花がさく 水府

と詠んだのは明治41年のことでした。この句は川柳を初めた学生時代を思い出させます。

この頃学生間に流行った黒朱子の風呂敷包みの中には、教科書とともに雑誌ハガキ文学が入っておりまして。この誌上には窪田而笑子選の川柳欄が載っていたのです。この入門当時の私（水府）の日記を見てみましょう。

明治42年10月30日 いよいよ俳句を捨て新しく川柳界に入る。この事は関西川柳社の句会が、その気持にさせたことは確かだ。川柳を熱心に行いたい。

同年12月2日 ハガキ文学に十八句出た。うち三句は秀逸、うれしい、うれしい。

同年6月15日 「川柳なんかやめて家に落

ちつけ」と父から叱られた。泣いた。

以上まことにお恥しい一節ですが、十七、八歳の青年川柳家の純情をお嗤い下さい。かくて大正2年に「番傘」を出しました。西田当百氏にはわが子のようにして頂きました。私の大恩人であります。（以上は昭和27年1月25日に催された岸本水府還暦祝賀全国大会の席上読みあげた挨拶文の抄録）

岸本水府は本名龍郎。明治25年2月29日閏年に三重県鳥羽市で生れた。柳号の水府は広辞苑に拠ると竜宮のことだ。

「番傘」の創刊は大正2年1月関西川柳社（西田当百主宰）を母胎に創刊された。（前稿西田当百の稿参照）創刊号は四六判横綴で

不定期刊、非売品、非同人制で発足した。創刊した翌年、劇作家食満南北が加盟したことは21歳の発行兼編集人だった水府を大いに喜ばせた。

大正6年当百が柳界から引退し、関西川柳社を水府居におき、定価も十銭、このころには同人制を敷き、同人数約50人。このあと大正13年小田夢路主宰の「はこやなぎ」が「番傘」に合併したことにより月刊誌となり、これを機に各地に番傘の系列誌が出はじめ、「番傘」は上昇気流に乗った。水府が晩年まで番傘の恩人として終世敬慕した人物は、当百、南北、夢路の三人であった。

大正8年水府27歳の折、画家小田富弥の妹勝栄と結婚し、翌年長男吟一をもつけたが、産後の日だち悪く十九歳の若さで死去。吟一は小田家に引きとられた。そして三年後の大正11年暮、水府は夷信江（実弟近江砂人）と再婚。この信江夫人が川柳人水府の賢夫人として終世またとない伴侶となりよく夫を支えた。小田家から吟一を引取ったのも彼女だ。昭和14年水府の実母タケが死去。水府は「母百句」を発表。同時に昭和10年設立した岸本広告研究所を廃棄し、「川柳つくり方問答」を著し「番傘」一筋に打ち込み「川柳手引」



〔昭18〕「岸本水府川柳集」〔昭23〕「川柳読本」〔昭28〕「人間手帖」〔昭30〕と著書多数。水府の川柳生活にとって、また「番傘」誌の作品の性格づけとして画期的な宣言を行ったのは「本格川柳」の表明であった。

▽本格川柳△伝統川柳―実にはイヤな言葉である。誰がこんな名をつけた。伝統川柳に近代のおもひも加えた一句をモノする一党―それがどうして伝統だ。本格川柳 本格川柳―僕たちは本格川柳と呼ぼう。(昭和5年11月号「番傘」誌の巻頭)

これが本格川柳宣言の全文である。筆者は右の宣言に画期的とつけたが、実をいえばこれは24歳の水府自身の川柳認識の心証表明であるとともに、番傘川柳そのものの格付け、冷たくいえば番傘誌経営のための専称に過ぎないようである。この本格宣言は社内外の批判を呼んだが、もともとこの宣言には理論的にも川柳なる体質の拡散をとめない、いわば伝統川柳墨守の衣替えに過ぎない点が指摘された。この宣言当時の水府の句

―ことさらに雪は女の髪へ来る 水府  
―一握り握った雪に音がする 〃

青壮年期の水府は、大阪朝報、大阪新報の社会部記者を体験したあと、桃谷順天堂、福

助足袋、寿屋サントリ、江崎グリコのコピライターを歴任、この経歴を生かし岸本広告研究所を設立し、四年後の昭和14年それを廃業し実質的なプロ川柳家としてたつた。

コピライターとは今日の電波・活字のマスコミのCMにみられる商品宣伝のイメージアップの為の文案担当者を謂う。たとえば水府のその時代には「カルピスは初恋の味」とか「グリコは一粒三百歳」(この方は水府の作ともいう)といった例がそれだ。

こうした水府にみられる職歴の体験が、作品的にはコピライターの感触による水府一流の抒情川柳を生み、事業的には本格川柳宣言で表明されたと筆者は想定する。さらにまたこの水府の番傘誌におけるもう一つの大きな柱は、川柳第四運動の展開がある。この運動の提唱の骨子は「川柳は娯楽に非ず、文学なり」にあり、この観点からする具体的提唱としては三才五客軸制度の廃止とともに懸賞川柳の揚棄、ふざけた柳号の廃止等がある。

水府はこの川柳第四運動の展開に当り、俳誌「ホトトギス」を例にとり、講演の壇上同誌をさし示しつつ、虚子は「大正8年天地人制を廃止し、月並臭を排撃し子規の俳壇革新の精神に還れと呼びかけた事を明らかにしてい

る。「ホトトギス」の月並臭の排除運動は、すでに明治32年4月にさかのぼるのだが、図らずもこの水府の第四運動は「番傘」内部に一つの大きな矛盾を露呈する事になった。

すなわち本格川柳宣言を行った番傘川柳イコール水府川柳が、それ故に同人八百人という柳界最大手の殷盛を誇った反面、第四運動の展開という柳界革新の烽火をあげ、作句の月並臭の揚棄を叫ばねばならないこと。これは番傘内部にも明らかに露呈しはじめた新川柳派の台頭とあわせ、体質的にも矛盾する。

この二律背反のジレンマも、避け難い時の流れというべきだが、水府はこうした番傘内部のすう勢に抗し得ず、昭和34年春、彼自らが番傘を脱退し「番傘新社」の設立を意図したが、強固な番傘路線の抵抗もあってその志し成らず、結局二七会の設立で事は終わった。

―電柱は都へつづくなつかしき 水府  
大正期に作られたこの水府川柳の新鮮な文芸性はまさに「伝統川柳に近代のおもいを」という本格川柳の意に副ったものであったが。昭和40年8月6日死去。享年七十三。

★次回は「食満南北」

# 誹風柳多留廿六篇研究（十八丁〜十九丁）

鈴木 黄・石田晋一・南 得二

小野真孝・本多正範・石田成佳

大屋六郎・八木敬一・多田 光

故岡田 甫

301 こみかしやせうと紙屋へ鮎屋い

鈴木 紙屋、鮎屋は共に美濃人、近江人の異称、本句は江洲寝物語りの里の句。

「こみ」は、ちりあくたの意か。

寝物語の里で近江人が畳替えをした処、その埃が国境を越えて美濃まで飛んで行った。

そこで近江人が隣りの美濃人の家へ行き、「今日はゴミが仰山立ちまして迷惑様でした」と挨拶した句ではないかと思ふ。

〔再考〕美濃人を紙屋と異称するのは美濃紙の特産地でもあるからである。そこで美濃

人は美濃紙を仰山持っているのでホコリが沢山出る。「こんな紙があるのでホコリやこ

みが沢山出ましようねと美濃人へ近江人が話をした」位の意味かも知れない。

八木 近江の鮎屋が、となりの美濃の紙屋に

「こみが出ましような」とか「こみの始末を手伝いましょう」とかいうあいさつ言葉であらう。

多田 十二月十三日の大掃除に限定しなくてもよいと思ふが、要するに江戸市中の隣り合った店同士と考えたい。

岡田 大掃除の常套的挨拶言葉です。

302 呉服屋で反古張を出す俄雨

鈴木 江戸時代の呉服屋は、俄雨や降雨の際には広告を兼ねて貸傘を行った。本句も一連の貸傘の句。反古張の傘を貸す位だから、余り上等のお客様ではない。

多田 大きく越後屋の紋とか番号が書いてあるので、何も書いてない番傘とくらべると、まるで反古張りのようにも見える———というのがだと思つていた。

岡田 多田説面白し。しかし、返さぬ奴あり、どうしても不足になる。新品をそつそつ補つ

わけにも行かぬ。どうせ宣伝のため無料で貸すのだから、戻って来た分は点検し、破れた個所は反故張りする。それでも俄雨に傘のあるとないとは大変な相違だ。見つともなくとも反故張りの傘を借りてゆくのである。

303 寒が入りんしたとさ三文もなし

鈴木『川柳吉原志』に、「寒の紅の代」となっている。要するに寒紅も買うことの出来ない遊女の悲哀である。

多田『全くの駄労働、確証などないのだが、「寒が入る」ということがあって、全くの不景気になったというような意味だったのではないか、——だから手持ちの銭もほとんどないともいふのか。

岡田『寒紅』が入荷したとき、だがそれを買いたくも金がない、説に賛。

十九丁

304 真白な耳づくをよけ四ツ手かけ

石田晋『雪の日の四手駕籠』先に「黒犬をきやんといわせて四ツ手かけ」(12万六)の句が

あつたが、この句はその雪の日でもいいうものか。

まっ白なやみを四まいでかけさせる

一〇・八

御先きまっ白と四ツ手で息子かけ

二四・34

しかし、木菟をよけるといふ状況がはつきりしない。

小野『真白なみみずくとは、蓑に雪が積っているさまを想像している。在郷の衆と遊里に通う粋客との対比。

本多『雪の日の四手は動かぬところ。「真白な耳づく」は四手とすれ違つた人の形容。大屋『広重の描く雪中の蓑笠の人など白い耳づくという感じです。

駕かきの声斗して真ツ白し 五・32

八木『余り深く考えず、雪の中を歩く人ではないと思ふ。頭巾や笠をかぶっている人など、特にみみずくのように見えよう。

鈴木『八木説のように、この句は深く考えないでいいでしょう。

多田『同右。

岡田『同。

305 人だかり角木瓜の障子也

石田晋『角木瓜』は中津木瓜とも称する紋で、常盤津文字大夫の紋である。諸書の解は常盤津の師匠の家での稽古を多勢の人が立聞きしているというのである。

張りての多イ稽古所の腰障子

二二・16

八木『角木瓜』は「カクモッコウ」と読む。

多田『賛。ついでにその中にいる粋な人も一目見られたらとも思ふのか。

岡田『同。

306 雪で見る書籍へ落る水ツばな

石田晋『螢雪の功の中、孫康。

貧学の灯りにたらぬ春の雪

二六・37

孫康が燈し吹き消ス春南 九八・50  
雪明りをとるなら窓でも開けたか。開けたら寒かろう。水洩も出るといふもの。

小野『窓をあける云々は関係なく、底冷えがしての水ツ洩も落ちようといふもの。

鈴木『賛。寒い雪の夜は「ハナカゼ」もひくだろう。

多田『賛。

岡田『同。



『明石人丸大明神三万句集』

(四)

阿達義雄

② 李坡点の自然吟（短句）

瓦竹堂李坡点の前句には、普通の前句附の前句とは異なつて、或る気分・雰囲気・環境を設定して、句附的に前句を形象化させる契機となつている前句も見られるが、その反面には殆んど形式化して了つて、吟者から無視されていた前句もあつたように思われる。

従つて、正体的な前句に心附としてつけられた前句とは異なつて、前句だけでも独立して句意を成しているものが多い。この点は川柳点に似ていると言つてよからう。

次に自然美を主として詠んだ短句を、その前句と併せて示してみると、

〔前句〕ひよくくと鶯のひよくくと

○蝶のうつりし草つみの櫛（下七）

○ふりそでだかへ手折ル水草（# #）

○内も真黄に春の一ツ家（下二三）

これ等三句の前句は情景を野外に設定すると共に、快晴の気分を传达ませよつとして

ているのであろう。

〔前句〕きら／＼とふすまの引手きら／＼

と

○畳へもれし日を取りに這ふ（上三）

○風のかほりも蘭で知る内（上三）

これらの句に対する前句の制約は屋内であり、「襖の引手きら／＼と」は、この家の品位・格式などを措定したものであろう。

〔前句〕こん／＼とかねのこん／＼と

○わが蔓くはへしほむ朝顔（上二）

○星をくはへて眠りたる蓮（上六）

〔前句〕ちん／＼と風鈴ちん／＼ちん／＼

と

○螢の飛びし庵の生花（下二三）

以上の三句は鐘の音や鈴の音を背景として据えて、その雰囲気に見合うものを形象

化したとも考えられるが、この種の前句が

大阪系の万句合の中に、享保中期以降、定



石的に提出されて来ていることを想起してみると、吟作に際しては、これ等の前句に余り拘泥しなかったこともあったのであろうが、全然無視していたとも考えられない。いずれにせよ、これ等の句からは雑俳的というよりは俳諧的な美、それも若々しい浪漫的な美が感じられ、滑稽的なものではない。

〔前句〕青〜と松の青〜と

○雲で撞くかとあをむけば寺（上三）

### ③ 李坡点の自然吟（長句）

それでは、次に、川柳点などと同じ形の五七五の句はどうかと見るに、

〔前句〕よい日和かな〜

(1) 鶯の音にくつさめも手を当てる

（上八）

(2) 吸物の外に蓋とる窓の梅

（下四）

(3) 花盛おもたき柚のたばこ盆

（下四）

(4) 我留守を見れば桃ちる遠目鏡

（下九）

これ等の(1)には事態からくる可笑味が感じられ、(2)の句には、窓外の梅花の香を嗅ごうとして、窓の戸を明けたことを、上の吸物に絡めて「蓋とる」とした表現からく

る面白さが見られる。又、(3)は心も浮き浮きする花盛りに重たい柚の煙草盆を取り合わせた点が面白く、(4)は近辺の山に遊びに行き、其処から遠眼鏡で我が家の庭を見て、今迄気づかなかった風流さを発見したというのである。

〔前句〕もりしん〜ともるる玉垣

○折〜は鹿も来て吞む手水鉢

（下二〇）

〔前句〕心いそ〜

○姿見へ隣の梅は咲きにけり

〔前句〕ついと床几にす、む夕がほ

○なつかしき虹の荷ひし親の里

（下二二）

〔前句〕ほんにはんぼに〜

○翌日<sup>あ</sup>拝む塔の九輪は船に見え

（下二一）

○けふも又きのふに成ると暮か、る

（上二二）

〔前句〕かねのこん〜

○鹿の飛跡にこぼる、萩の月

○月隠す懐のない冬の森

これ等は俳諧（連句）の平句ではなく、川柳評句合と同性質の大衆の前句附の附句に過ぎない。

しかし、此処には自然を強いてゆがめて見ようとする眼は感じられない。

尤も擬人又は見立に類する句や、表現的に面白い句としては、

〔前句〕秋は来にけり〜

○名月に腰かけられて一葉散る

〔前句〕行きつ戻りつ〜

○戸袋へ一枚づ、の夜が明ける

右の最後の句などになると、面白さは前句に対する附味にある。

要するに、李坡点の自然句の良さは、全体として見るならば、擬人や表現などよりも、通俗的にせよ、素直に自然の美を探ろうとしていた処にあるように思われる。

〔注〕『明石人丸大明神三万句集』には、計九二一句（内、発句二〇句）が収められており、その中の三〇〇句が上巻、第三〇一番以下は下巻として区別されている。それで、

○鶯の音にくつさめも手を当てる

（上八）

のように句の下の括弧の中に（上八）とあるのは、上巻の八枚目の意味である。



同人特集

私の一句

軟座車のコンパは楽しジャスマン茶

罰金を払う印紙に角が立ち

究極の戦さにルールなど要らぬ

生きざまへ見果てぬ夢の長さかな

仏壇も墓地もローンでまだ死ねず

追憶の小道に純真な僕がいる

足腰にただ酒立てぬほど吞ませ

その先の運命線を信じよう

誘ったのも男はなれたのも男

掌にのせる白さに惑う寒玉子

結界へおぼろおぼろの落椿

愛の道一人で悩むものでない

藤井寺市	米子市	出雲市	堺市	高石市	出雲市	倉敷市	新宮市	倉敷市	榎原市	桜井市	八尾市
児島	八木	園山	高橋	牛尾	板垣	藤井	川上	水粉	岩井	河合	西尾
与呂志	千代	多賀子	千万子	緑良	夢醉	春日	溪水	千翁	本蔭棒	茂雄	栗

(到着順)



本音聞くコーヒに砂糖入れてやり

野天の湯かるい嘘なら許される

道一つ自分をためしつつ生きる

背伸びしたぶんだけ耐える水中花

妻がいる空気みたいにいってくれる

インテリもぼろぼろになる母の膝

遺伝子へ神にそむいてメス入れる

作品で語り言葉などいらぬ

余生とは過去を封じた玉手箱

かたつむり決心などはせずじまい

国私鉄値上げお布施もほっとけず

大空をキャンパスとして描く雲

運不運背中合わせをしかと見る

流れ星あれも星座の村八分

ひよっとこの苦手は鏡かも知れぬ

世事疎く反省をする老いの日々

自惚れの心白髪を染めさせる

八重桜モラルが少し足りませぬ

残照に思いが映える誕生日

尼崎市

大阪市

大阪市

大阪市

大阪市

大阪府

米子市

大阪市

島根県

大阪市

東大阪市

豊中市

大阪市

名古屋市

米子市

西宮市

貝塚市

守口市

尼崎市

黒川 紫香

正本 水客

神谷 凡九郎

津守 柳伸

西田 柳宏子

坂口 公子

小西 雄々

天正 千梢

大森 孝華

山根 いつを

市場 没食子

上田 登志実

河井 庸佑

越村 枯梢

田中 亜弥

津山 冬子

行天 千代

羽原 静歩

春城 年代



腰抜けの風が好かれるしゃぼん玉

友信じきると握手がしたくなる

お天気と喧嘩もできず肘枕

夢煽る夢二の絵

椅子をすこしずらして視野を広げよう

いい祭りでしたと露店荷をしまい

曇る日も疑いもたぬ向日葵よ

音の無い耳にも響く銀の鈴

花日和みんな背すじがのびている

還暦の女がもろう月の暈

議事進行後の宴席が待っている

人並みと思う女が少なすぎ

御時世は長寿日本築きあげ

粥ひとつにも病院の味妻の味

親の愛つつかい棒をみな外す

近ごろは眼鏡を外すほど泣かず

丹精を競い合ってる菊花展

自我没却阿呆か仏になれと言う

定刻に明るい笑顔と合うホーム

尼崎市 春城 武庫坊

呉市 榎田 英詩

綾瀬市 大山 と金

岡山県 直原 七面山

奈良市 森田 カズエ

今治市 矢野 佳雲

羽曳野市 中村 優

米子市 石垣 花子

西条市 片上 明水

出雲市 吉岡 きみえ

柳井市 弘津 柳慶

大洲市 米澤 暁明

大阪市 欄田 素身郎

倉敷市 野田 素身郎

寝屋川市 江口 度

寝屋川市 堀江 光子

倉敷市 小幡 里風

羽曳野市 佐野 白水

東大阪市 崎山 美子





雪月花夫の記憶を埋めよ画布

いまの良き昔の良きの差し向い

湯上りの鏡の中からねだられる

アンカーの吾が子へ母の力こぶ

孫生きる限りは核よ静かなれ

からくりの外は陽炎生きている

謝ってすむ話なら謝らぬ

過去を捨て今日という日の陽に向い

エプロンにそつと不満を包みこみ

風なぶる髪一すじの想いかな

レモン切る窓にかかりし春の虹

女郎蜘蛛に巻かれてみたい春の宵

赤とんぼ空地に飛べる日の命

信じ合う二人で渡る丸木橋

百姓が愚痴言う時は天を向き

平和だな妊婦が目立つ初詣

許すとは言わずお祝い送る母

やがて還暦まだ六十と答えます

新築へ鬼籍の夫の額を掛け

島根県

島根県

神戸市

岸和田市

新宮市

島根県

島根県

島根県

島根県

島根県

島根県

高槻市

岡山県

今治市

大阪市

七尾市

高知県

芦屋市

堀

堀

仲

清

大

松

岸

石

細

藤

北

小

田

岩

月

川

松

松

竹

江

江

野

矢

本

本

本

田

木

原

川

砂

崎

道

原

口

高

岡

中

どんたく

こ

十

は

輝

清

歳

鈴

民

白

あ

き

博

宵

弘

秀

綾

子

朗

う

郎

み

水

泉

榮

江

子

汀

子

子

友

明

生

峰

吉

珠



野の花は野にありてこそ愛でたけれ  
 年順でこぼれる水になつておく  
 懺悔などしないでおこつて蝸牛  
 結論が出てそれぞれ顔になり  
 金婚へ同じ歩幅でくらすうよ  
 折返し点また新しい数え唄  
 誉めているちよつぱり妬みもちながら  
 ひたすらに蜜柑みかんと生きた父  
 輪の中で焚火に解けてゆく掟  
 感傷のつまずき片道切符だけの旅  
 書き損ね丸めた紙に詫びている  
 父と子に表情の無い朝の膳  
 信用は実印一つあれば良い  
 やわらかに聴けば頷くことばかり  
 七転び再起の砂を握りしめ  
 切られても動く愛想のいい尻尾  
 子に貰うこの嬉しさと口惜しさと  
 ポケットのピラから冷戦続いている  
 火と水の二人で二人の思いやり

岸和田市	京都市	出雲市	松江市	岸和田市	米子市	岸和田市	和歌山市	倉吉市	和泉市	加賀市	和歌山市	西宮市	大阪市	大阪市	松原市	和歌山市	和歌山市	大阪市
古	都	石	竹	芳	桑	島	内	渡	西	細	福	妹	本	北	谷	若	堀	西
野	倉	倉	内	地	原	崎	芝	辺	岡	木	本	尾	間	勝	垣	宮	端	森
ひ	求	芙	寿	狸	伊	富	登	独	洛	魯	英	春	満	史	武	三	花	花
で	芽	佐	美	村	都	志	志	歩	醉	木	子	江	津	好	雄	男	村	村



一の矢を放ちながらもまだ迷い  
 高く高く考えないで積む積木  
 昨日今日年寄りになつたわけやない  
 神様の機嫌よい日に逢いにいく  
 自身との対決答出ないまま  
 もつたいなやありがたやはずかしや余生  
 半分は内助の賞を妻がほめ  
 六兵衛と聞かされてからの猪口の味  
 山はロマン山は歴史の緑燃ゆ  
 別れ道女はきつと右へ行く  
 天上天下人差指は天を指す  
 夕顔の女星から抜けられぬ  
 美しい仮説少女は鶴を折る  
 生きている限り真赤なバラを抱く  
 お喋りがしたい茶房のクリスタル  
 カラシレンコン忘れものの中にある  
 蝶でさえ移り気のする花の彩  
 生き方が下手か風邪さえ長引かず  
 老いの荷を下ろし鶴亀謡い初め

和歌山県	今治市	高知市	豊中市	呉市	大阪市	美祿市	米子市	大阪市	大阪市	寝屋川市	京都市	宇部市	寝屋川市	大阪市	米子市	大阪市	大阪市	豊中市
中根勇太	越智一水	川竹松風	安藤寿美子	林野甦光	西出楓楽	安平次弘道	林瑞枝	杉本智慧子	鍛原千里	柴田英壬子	松川杜的	平田実男	宮尾あいき	黒田真砂	政岡日枝子	藤田頂留子	神夏磯道子	田中正坊



弓持つと大将が狙いたくなる  
 天才の私を夢の中に残す  
 灯を消して誰にも見せぬ顔をする  
 けとばされ石ころは見る隣街  
 薄緑似合う女将が挨拶し  
 人生はよいしょこらしよにとっこいしょ  
 ラーメンの伸びかげんまで愚痴になる  
 権力の座で本業の腕にぶる  
 電話口誰かそばから知恵を貸し  
 日々好日菊の白さが極まれり  
 暖房の部屋で苺の嘘を聞く  
 夢にだけ残しておこう古い地図  
 末吉も満更でない七十二  
 美人論少々妻とくい違い  
 余生猶花ある道を選つてゆく  
 ロボットの合図で人が使われる  
 現実に戻ると虹が消えている  
 人を指す誤解の責めは誰が負う  
 老いの背も北風用捨なく叩く

出雲市	尼崎市	尼崎市	鳥取県	京都市	岡山県	和泉市	米子市	尼崎市	大阪市	西宮市	河内長野市	寝屋川市	青森市	大阪市	鳥取県	高知県	倉吉市	米子市
原	伊	西	森	山	白	岡	青	角	中	野	井	稲	工	小	新	赤	渡	野
	藤	村	田	本	岩	井	戸	野	川	呂	上	葉	藤	林	家	川	辺	坂
独	春	か	布	規	文	やす	田	か	滋	鶉	喜	冬	甲	ト	ま	菊	菩	な
仙	子	すみ	堂	不	衛	お	鶴	ず	雀	汀	醉	葉	吉	メ	さ	野	句	み





もみじ散るくるくる舞うて地にかえり

明日からは職安靴もいやだろ

数え唄終つてからの幕があく

生きる汗何か足りない世に疲れ

としよりが洗えば汚ながら食器

エトランゼ前もうしろも風が吹く

薬草の花へ小さな蝶がくる

継ぎ足したお伽噺は大切に

逆転の出来ぬ巨人へ腰を上げ

妥協点心の隙を開けて待ち

妻は古稀僕まだ喜寿の丑の春

子よたまにや笑えるニュース聞かせぬか

油断して法事の酒に火が点いた

夕立の山添いばかり寄りたがる

兎小舎飽食窮民中意識

スランプの度に私は縄をなう

週末を指折り数え島暮し

負けそうになるから化粧するのです

でこぼこの石の上にも座りなれ

奈良県 宮川 古都路

福岡県 横地 雅風

尼崎市 奥山 美智子

大阪市 江城 修史

大阪市 金井 文秋

西宮市 林井 文秋

西宮市 寺沢 みどり

米子市 菅井 とも子

米子市 菅井 とも子

大阪府 中井 兼治郎

兵庫県 藤後 実男

唐津市 田口 虹汀

唐津市 浜本 義美

唐津市 仁部 四郎

唐津市 木塚 素石

唐津市 久保 正敏

米子市 澤田 千春

竹原市 古谷 節夫

松原市 佐藤 藤子

宝塚市 吉田 笑女



傲慢な女にもあるアレルギー

西宮市

杉浦

婦美子

むかしむかしこんなにあくせくしなかった

八尾市

大野

美幸

手相には出てる女難にまだ逢えず

弘前市

波多

五楽庵

風まかせまわる本音の風車

和歌山県

天満

三千代

一と足に飛び越せそうで母の堰

寝屋川市

里居

小路

お上りの二度目は独り法善寺

岡山県

土居

耕花

おない年の友の訃をきく蟬しぐれ

岡山市

井上

柳五郎

ふり向くとやさしい人の鬼の面

岡山市

川端

柳子

美しい距離を宿して背を送る

和歌山県

松原

寿子

何人のわたしを消せば無になれる

和歌山県

西山

幸子

長城をその眼にとどむ武官備

西宮市

奥田

みつ子

流れつく海で最後は許し合う

米子市

雑賀

美世

ぼろくそに言える妻あり有難く

奈良市

宮口

笛生

肩の荷を男の顔に書いてない

岡山県

行吉

照路

かくれんぼ避けて風ぐるまを廻す

鳥取県

中原

諷人

変節を許さぬ長い爪を研ぐ

姫路市

松浦

輝月

秋の実が長い昔ばなしする

八尾市

宮西

弥生

主婦の座が戻ってしんどい嫁の留守

姫路市

丁坪

サワ子

母似だと後姿を他人が言う

姫路市

越田

みつ子



それぞれに個性が出て来た兄弟  
 生国は播州姫路俺らが城  
 風船の情へ吊るす花の種  
 行末は大海に和す岩清水  
 美しく老いたき心新刊書  
 心配の相槌ばかり打っている  
 倅せのけじめ今日から妊婦服  
 まわり道をしたのは秋の風のせい  
 ギャルみこし外人も入り若い顔  
 小さな出口蟻には青い空がある  
 熟年の昔話に艶も出る  
 すごろくの上り年金裁定書  
 喜寿近し煩惱いまだ断ち切れず  
 道だけは貧乏県でないみたい  
 傘からの願いを地蔵濡れて聞く  
 潮騒のなかで葉書を待っている  
 糸電話楽しい事はよく聞こえ  
 上見たり下見たりして暮しの灯  
 革新も保守も大事なお客様

大阪市	守口市	出雲市	米子市	八尾市	倉吉市	島根県	町田市	大田市	富田林市	寝屋川市	松原市	交野市	西宮市	姫路市	鳥取県	桜井市	姫路市	姫路市
大坂	野呂	落合	林	内海	奥谷	木村	竹内	藤田	和田	北田	本多	山本	西口	人見	清水	岩本	植村	増田
形水	右近	正江	荒介	幸生	弘朗	はじめ	紫鏞	軒太楼	維久子	綾子	洋子	テルミ	いわゑ	翠記	一保	雀踊子	客遊子	とし



頼杖をこっそり猫が覗きこみ  
 忘れられてゆく焙烙もゆきひらも  
 友達が増えて聴きたい話したい  
 凡夫婦春には春の風に逢う  
 冬雲や数奇の人生幕下りず  
 山鳩がクククと啼いて旅昏れる  
 潔く散るすべもなく造花あせ  
 家計簿の枠でシナリオ書いている  
 ふる里がだんだん遠くなる値上げ  
 すり鉢の深さをしらぬ日本髪  
 人生はいろいろ七味唐がらし  
 庭石にすえると見える裏表  
 砂文字の上で蟹も思案する  
 大望の脈打つ音を聞く枕  
 泣くことも計算にある女の背  
 自由とはこれだとメダカ網抜ける  
 低い次元に合わして個性確かめる  
 万燈で埋めると遠い河となる  
 妻病んで不義理の先の二つ三つ  
 路郎の忌これも魂金魚の朱

豊中市	藤井寺市	近江八幡市	和歌山市	伊丹市	富田林市	富田林市	松江市	松江市	八尾市	富田林市	岸和田市	松原市	大阪市	岸和田市	西宮市	大阪市	松原市	大阪市	大阪市
橋	笠	前	野	櫻	田	藤	舟	恒	高	板	高須	玉	長谷	福	朝	鈴	北	小	柳
高	原	川	村	谷	形	田	木	松	杉	尾	賀	置	川	浦	山	木	野	出	原
薫	吸	千	太	寿	美	泰	与	叮	鬼	岳	金	重	春	勝	千	節	久	智	静
風	江	賀	茂	馬	緒	子	根	紅	遊	人	太	人	蘭	晴	世	子	子	子	香



— 同人吟 —

# 秀句鑑賞

— 前月号から —

西田 柳宏子

どん底が思い出となる日を信じ

江城 修史

目標を見失うことなく、現在に挫けることなく、甘んじることなき生き様が心を打つ佳句である。

言いつ分を通して負けたナと思う

嘉数 兆代賀

言い勝っていながら虚しい思い、敗北とは言えぬまでも、のしかかってくる圧迫感。誠実と真面目で話進まない

玉置 重人

余り真正直に真正面から取組んで、ニツチもサツチもゆかぬことがよくあります。花活ける妻でも母でもない私

西村 芙佐女

花活けている女性の気持がよくでていてと思うが、この気持になれるのも、妻であり、母である安定感から生れるのでは……。

昼の月あれば親爺の忘れもの

林 荒介

なかなか面白い見付けと思ひ微笑ましく拝見した。親爺は親父かと思つたが原句の方がやはり意味広く職場、グループ等で親爺と呼ばれ親しまれた人が浮び上つて面白い。

矢印の方へは行かぬ現代っ子

花田 たけ志

現代には現代の矢印に添って行く時代感覚があるのではないだろうか。自分のつけた矢印がずれては大変だ……。

気がつけば小言幸兵衛になつていた

岡井 やすお

苦笑を伴う句。私にもよくある姿だと自戒しなくては……。然し時には大事なことです。正直な鏡に妥協せぬ女

横田 英詩

世の中の進歩に、美しく見える不正直な鏡が出来てもよさそうですが。ツイチエン（再見）誓う別れの暖かさ

宮口 笛生

日中友好……再見、再見……川柳の輪の広がり嬉しいですネ。思いきり鈴を鳴らして神を呼ぶ

寺沢 みどり

兎に角神様にこつち向いてもらわなくてはネ。面白い見付け。朝顔の大きな種に夏終る

行天 千代

繰り返えず自然の摂理、あくせくした都会生活の中では中々思いつかず、見つけからぬ。読書好きばかりではない紀伊国屋

春城 年代

店内許りではなく外までいつも混雑して、紀伊国屋の地の利。読書好き、時間潰し、待ち合せ……作者は？

アイロンの裏が錆びてる倦怠期

河合 茂雄

ベテラン作家の見付けの巧さ。うまいと思わず声を上げました。そしてこうした時期を乗り越えて次の句

ユニフォーム揃えて走る老夫婦

上田 登志実

若い二人にベアルックは普通だが、ジョギングにお揃いのスポーツウエアで走る老夫婦ほんとうに微笑ましいですネ。

盗まれるもの何んにもないという強味

藤田 頂留子

開き直つた心境。強味というより安心感ですか……。許しあう中で絆が太くなる

青戸 田鶴

川柳は心、川柳は人、人と人を結ぶ絆を太くする。故すとは本当に大事なことです。許す、宥す、赦す、ゆるしあうことの難しさ。

日本の霧笛ばかりがなぜ叫ぶ

舟木 与根一

日本の霧笛を無視する相手へのいらだち、北方領土復帰への道は峻しく、遠い……。靖国も皇居も外人さえ押む

申訳ないとは陛下おつしやらず

原 独仙

谷垣 史好

水煙抄

黒川紫香選

八尾市 高杉千歩

長岡京市 木本如洲

三人三様三賀日を入入らず

朝食のメニュー豪華に凡夫婦

数知れぬ針に頼った子守唄

片方の耳で世間とおつき合い

花の種千の想いを裏返す

和歌山市 福井桂香

新しい畳にひびく除夜の鐘

めでたさは上下変わらぬ鏡餅

悔いひとつ抱いてるように冬の蝶

また逢えるだろう今宵も十三夜

網の目をみごと抜けます雑魚だって

尼崎市 福田礼子

菊一輪飾り尼僧は満ち足りる

苦勞知らずの爪が一人になりたがる

正攻法でくるので勝った事がない

小心でちぎり絵ばかり上手くなり

気のきかぬ妻で手酌に馴らされる

札東の畏良心を見失う

竹トンボすこしゆがんだ風に逢う

雑草のいのち見習う万歩計

頼りにはならぬ味方が手を叩く

メモ帳に手形の期日十二月

熊本市 永田俊子

うなずいてそれから女が負う重荷

手話ひらひら結んで開いた恋の文字

反旗おろして会社の部品となる

選果機のみかんが歌う落ちこぼれ

老いらくの孤独を芯に毛糸巻く

藤井寺市 赤木和子

そこまでは友達だった橋の上

パーモントカレーもそろそろ反抗期

振り向けば半端なままの足跡よ

セザンヌの少女と過す雨の午後

三十になっても子供よりこども

大阪市 清水康恵

花屋から小さな秋を買ってくる  
秋空に風船があり少女の忌

たとう紙に包み込んでるおんなの炎  
ユーモアも忘れてしまったビルの窓  
嘘ひとつ見抜けなかったレモンテイ

尼崎市 田中晴子

年毎に増える賀状の輪がうれし

新しい塵は気にせぬ三が日

わけありの嘘に黙って目をつぶる  
指切りに飾る言葉のみこんで  
信用がロマンスグレーを引立てる

富山市 舟渡杏花

一つ手前の角を曲ってつつがなし  
招かざる客もチラシは連れてくる

友達でいましょうやんわりかわされる  
名石展気軽に掛ける石がない

尺取虫が焦れた花の下で逝き

和歌山市 後藤正子

サラダボールに私語が幾つも盛ってある

決心が粉々になる待ちぼうけ

ことごとく反対をして引き止める  
フィクションに感動もする人間味  
予備知識あると楽しい旅景色

近江八幡市 前川千賀子

ポケットへ紅葉あなたの知らぬ間に

出がらしの今朝コーヒーとわたくしと

ハミングを忘れた秋の十姉妹  
角砂糖懺悔の塔のように積む  
エリートを一匹落とす穴を掘る

熊本県 大川幸子

何げない言葉が悔いを残してる

都々逸へ心ゆくまで酔って見る

ハンディを捨てた時から強くなる

二人きり女の声で妻が呼ぶ

新札になっても懐中変らない

尼崎市 丹下玉子

お隣と同じ時間の終い風呂

達筆をほめて便利に使われる

千の鐘ついて逆縁から逃げる

しお時に出口を探す処世術

続き柄妻と書かれたうれしい日

熊本市 宇野昭代

物言わぬ花にも朝は朝の顔

しゃべるだけしゃべらせ機嫌よく帰し

好々爺だから造反したい妻

山茶花が咲いたを亡母と話し居り

朝のリズム狂って読経つい忘れ

今治市 野村京子

矛先を向ければ風になぶられる

感情の起伏へ女の赤い爪

裏かいたその又裏にだまされた

熟年の恋で火傷をする予感  
涙顔かくすおかめの面を買う

和歌山市 神平 狂虎

独り言増えて心の雪囲い

ありふれた哀しみを抱く冬苺

冗談をとばす淋しいひとと会う

北向きの窓から届く果し状

冬の夜壊れた壺がある夫婦

豊中市 満仲 きく子

初日の出今年も海の見える宿

とっておきの洋酒を出してくる機嫌

初旅はこの服この靴この帽子

裏方の苦勞を知らぬ菊人形

年賀状人さまざまのウシになり

滋賀県 安田 志津

音痴にも好きな歌あり二つ三つ

番号をつけたい程の飲み菓

秋の空こぼれた絵の具にじむ様

古寺で人持ち顔の秋桜

尼崎市 児玉 歌子

満更でないのが一人澄ましてる

鍵っ子へせてメモ紙に母の声

何食べていようと旨い差し向い

切り出した話へ爪を噛む女

東子市 小山 悠泉

ピッチャー強襲急所ねろうた訳でなし

鏡台へ仕上げの紅を引く小指  
人情にふれて左遷の地に馴染み

仕組まれた見合と知らず娘の帰省

和歌山県 寺田 裕美

先頭が転んで運が向いてくる

天辺の柿の主張は空に描く

靴のひも結ぶ背中にある決意

姑さんが来る気づかれを皿に盛る

京都市 松川 芳子

秋風が吹けば和服に衣替え

大銀杏落葉掃く人拾う人

口先のお世辞に軽くのせられる

京言葉本音は奥に伏せてある

米子市 茂理 高代

駅員が律義な貌で出勤す

皮財布心貧しい音がする

三つ編みの可愛さに雪も少し舞う

音楽会の余韻へ月が追って来る

名古屋市 藤井 高子

威風堂々冬の姿もそれは大樹

ノールな鼻の角度で敵を持ち

残照へしがらみ絶えず佇つ女影

冬されど焚火の温み輪の温み

今治市 月原 つくし

巻いたネジだけをきっちりオルゴール

かくれんぼ母が探しに来てくれる



わくら葉が遊びつかれた吹き溜り  
物差して測れぬ愛のセーター編む

和歌山市 山川 克子

ワンステップワンステップずつマイペース  
なごやかなムード障子から漏れてくる  
陽のあたる部屋に全員揃う朝  
気にしなくてもよい旅の湯の溢れ

寝屋川市 平松 かすみ

神様へ眠気さましの鈴を振る  
落書を曇りガラスへしたくなり  
青春のシンボルふたつ出た傘寿  
一羽二羽千羽の鶴にせかされる

伊丹市 山崎 君子

釘一つ打てぬ男に賭けてみる  
つめたさをかくして女花を生け  
耳許でささやく声が熱くなり  
走り書届いた花に添えてある

尼崎市 野瀬 昌子

この堀の向うが見たいカタツムリ  
名物の柿ぶらさげて古都の宮  
線香の灰ポトリと落ち静か  
献立表忍ばせ歩く市場籠

宝塚市 丸山 よし津

カレンダーに書き込みふえる十二月  
家計簿の数字がびたりきょうを閉ず  
親戚の顔ぶれ替り孫育つ

小さい罪日記へ符号で埋めて置く

高槻市 笠嶋 恵美子

秋深し炎えているのはななかまど

これしきのお酒に揺れる歩道橋

このお顔善人らしくない羅漢

がさつさを取れば魅力の無い女

和歌山市 森 敏子

ごきげんに背伸びしている出し昆布

隅っここの嘘を見つけた老眼鏡

陽がさして押し合いながら小雨降る

失業の事実には秋が深くなる

熊本県 高野 宵草

お隣の庭で満足させる窓

新聞をためてアパート里帰り

モナ・リザが笑って見ている資金繰り

音楽が好きと演歌の中にいる

大阪市 松本 ただし

川砂利は流転の履歴語らない

錦着て帰ればダムの青い空

悪友もあり人生の裏表

おしっこがしたく出て来たかくれんぼ

大阪市 稲本 凡子

いつからか花壇になつて非常口

仕事着の汚れ今日も満ち足りる

方向音痴小銭を余分に持つて出る

同窓会から帰る独りの寒い室

敵という言葉はきらい丸く生き  
西宮市 松本一郎

人は来ず電話も鳴らず老夫婦  
六十の私に妻は派手を着せ

O B会ここにも序列生きている

尼崎市 吉永伊三郎

噴水のしぶきに遠く二人

不満はあるが妻には負けておこ

白髪 of 刑事にすつかり吐いている

うしろから男一匹操られ

西宮市 山片紀雄

老骨の体操きしむ音がする

老いて未だ文句の多い若さあり

おかしうて少し哀しい老いの芸

松茸の季節が来たと他人が言う

京都市 森川春子

とび箱が跳べて母親握手する

リーダーの声ばかりする草野球

いたずらなだけ縄とびを軽々と

気ぜわしい時南天の実を見つけ

弘前市 田中叶

ある記憶鶏がいて母がいる

枕辺にみな居て風に鳴るトタン

その嘘に妻は安心して眠り

それなりの地位尋ねたき人あり

尼崎市 鈴木良征

二十一世紀へ今日から始まるカレンダー  
北の窓締めると冬が押し寄せる  
秋が逝くはかない恋をふりすてて  
あかねさす女だましの秋の空

大阪市 上田柳影

都市砂漠隣の名字わからない

妬心めらめらまだまだ死ねぬなど思う

満ち足りているが渴いてくる心

次の世でも会おうと言えば妻ご免

伊丹市 榎谷郁子

岩場さえ秋を忘れず紅葉する

人それぞれ紅葉の中に冬想う

さかろうて紅葉を着ない松に杉

いろは坂紅葉にライト見えかくれ

吹田市 茂見よ志子

リサイクル軒が後ろより聞こえ

婚礼の祝詞頼まれ気が重し

お茶だけは間に合っている不意の客

棘のある花も触れねば可憐なり

寝屋川市 岸野あやめ

その椅子に払う敬意と思うけど

何のはずみか道化師の役まわり

落葉焼く枯葉の様な髪をして

地下街は花屋の花も造花めき

守口市 結城君子

眼を病んでむなしく詩集閉じたまま

落葉のリズムに酔っている林  
高速の下を歩いて不安  
三回忌十五人呼ぶ予習する

大阪市 藤 森 小雅子

地獄耳いつしか己の影を踏む  
減らず口男が肴にされている  
独り呑むグラスに溶ける秋の彩  
マニキュアに嫉妬が募る夜の彩

羽曳野市 麻 野 幽 玄

趣味なども聞く友達になれそうで  
パジャマぐらいと思えど柄に好き嫌い  
二科展に来て先ず身内の絵をさがし  
初詣鎮守の森の明けきらず

川西市 野 村 静 雄

裏切りへ畏かも知れぬいい話  
流れ矢に当って一人飛ばされる  
一言が語るにおちた酒の席  
まだ生きていたかと思う顔に会う

羽曳野市 吉 川 寿 美

憂きことを聞いてしまった耳が病む  
柿の皮剥いて夫のいぬ夜長  
思い違いのボタンがずれたままで秋  
何時の日か芽を出す種を蒔いておく

大阪市 山 田 妙 子

伴せそうな人ばかりいる碧い空  
良い事がふたつもあつた空の碧

老母の愚痴秋の夜長に聞いてやる  
なじめずに新札先に使つてる

高石市 浅 野 房 子

頭数揃えて祝いの膳になる  
マネキ揚げ今年も京に春が来る  
賀状書く相手も少しずつ変り  
初春の一人の膳もすでに馴れ

守口市 森 川 まさお

日だまりに駐めて産地の蜜柑売る  
山門の近くになつて萩が咲き  
引き汐につぶやいてる砂があり  
ポケットに聴診器差し喫茶店

竹原市 佐 藤 令 子

大波小波故郷遠くなるばかり  
もうひとりの私が着たいマタニティ  
アメリカンコーヒー二人のノート青いまま  
いまここで逃げてはただの女になる

兵庫県 森 脇 和 子

背伸びして嫌われているキリン草  
一日を病んで絆が深くなる  
遠吠えの犬の尻尾が虚勢張る  
一泊の旅へ預けて仮面とる

竹原市 石 原 淑 子

木枯しにうどんを煮こむ子が戻る  
カタカタと風の鳴る夜は老母思ふ  
子離れでふつと淋しい風がぬけ

欲ばりな主婦で冬の陽一人占め

鳥取県

羽津川 公 乃

初夢はせめてジェットでハワイまで

豆腐好き個性ないのが一人居る

したたかに税金値切る夢を見る

値切ってる妻に夫は知らんぶり

尼崎市

山 田 保 蔵

何事か女が大ぜい覗いてる

夜の美女暗い路地からあらわれる

揺れてから学者が語る地震学

戦死した友と別れた故郷の坂

和歌山市

桜 井 千 秀

休日のブランヘスタミナ蓄える

快晴に五センチ明けとくサンルーム

買い被りされて再会躊躇する

風避けるだけに寄り添う小さな幸

倉吉市

淡 路 ゆり子

泣き虫の子が放さない風の糸

くたびれた二枚のシャツが乾してある

望郷の風をたどればセピア彩

すり抜けたかすがい火の章水の章

大阪市

古 川 美津枝

園遊会競輪選手格を上げ

休刊日酒も休もう休肝日

重そうな足のせて行くハイヒール

ごちゃごちゃとうるさい方が先に酔い

吹田市 井 上 照 子

地獄絵に過ぎ来し方をふりかえる

コーヒートの二杯目になり話つく

風船の少ししなびて祭り過ぎ

石一つ金魚を埋めた上に置き

鳥取県

中 原 汲 香

欲望を満たし文化の魔女となり

コスモスのあまりに平和朝を掃く

秋深く豆腐の味の悲しい日

柿熟れて幼い時を語り合う

鳥取県

中 原 みさ子

やんわりと浪花女で添うておき

八方美人議員バツジがよく歩く

石焼イモにぬくもりがあり夜の蝶

ドレミファソ ハモニカ吹いて籠に居る

桜井市

前 山 美恵子

おしくらまんじゅうする子もない過疎の村

善人の顔で善人だまされる

厄年がいよいよ来たか戦うぞ

島根県

堀 江 百代

毎日のよくも話の種がある

秋深しあひるも子供連れている

一人居る二階の箱にねぎ植える

寝屋川市

立 床 晴 風

遅いのを伝言板に叩かれる

歩行器が八つ当りして家具の疵



口数が少ない中に棘がある

姫路市 人見翠記

カレンダー後一枚の寒い朝

竹久の生家は宵待草の路を行く

豊作でゴルフの賞は米俵

吹田市 山田里子

エレクトーン流れる庭に犬が吠え

木犀のこぼれ花より匂う道

父よりも息子の茶碗大きくて

岡山県 山本玉恵

虚勢張って登れば坂の七曲り

恋風にのってしまった長電話

抜け殻が骨まで沁みる酒を呑む

田辺市 染道佳明

フィルムを何度も替える京の秋

すんなりと土産買わされ京ことば

何事もなかった様に休み明け

羽曳野市 田中隆二

大安も仏滅もない秋日和

蓮根の穴に女の愚痴を詰め

あの人の声かと思う風の音

米子市 足立由美子

自信ある帽子はうしろ振り向かぬ

雨の日は朝から電話鳴りやまぬ

冬の陽を背中に読書するも幸

山口県 高崎雀声

足音を気にせぬ鈴虫合唱団

無人駅車掌がおりに乗っただけ

エプロンの汚れが目立つ料理好き

カラフルな傘がラッシュの駅急ぐ

百姓の好きな子供が一人居り

平凡な愛でよかった共白髪

岡山県 伏見すみれ

とんちあり勉強せずに優秀児

理髪代ストもないまま値上げする

ありったけの力で書いた母の筆

豊中市 小畑よし子

真ん中に何時も座って口達者

気詰まりな人とふたりの帰り道

病院もポストも近き佗住居

吹田市 栗谷春子

短か日や白菜の味ほんものに

駅の名にもひとつ旅が好きになり

線路わきゆるる土にも小菊咲く

唐津市 浜本ちよ

独り言猫がウーーンと返事する

冷やかな女と見られ妻不服

欲出さぬ息子に不安抱くも親

岸和田市 奥礼子

一列に並べばみんな胸を張る

くたびれたコート of 衿を立てて冬

三途まで行って人間らしくなり

羽曳野市

天崎 只士

ありがとう言わぬ頑固な店がある

誤解とく鍵を女が持って逃げ

顔だけが父に似ていて物足らず

高槻市

梁川 吉子

みちのくの紅葉かなしい悔み旅

国なまりなつかしく聞く亡夫の里

留守勝ちに菊満開でむかえくれ

大阪市

今西 静子

流行を追うてセンスのない女

レモンティー職場の話なつかしい

三味線も琴も半端のまま嫁ぎ

泉南市

坂根 流水

小錦に相撲協会泣き笑い

長生きのあたりを見ればわれひとり

妻は亡し又正月も旅に出る

大阪市

堀口 欣一

明治大正昭和と生きておもしろし

午前二時わが人生の一ページ

駅の名を呼ぶたのしさの湖西線

大和高田市

岸本 豊平次

玉砂利に帯が重たい七五三

鼻筋が通ってつめたい人にされ

太陽の味も吸い込む柿すだれ

貝塚市

池田 寿美子

南天の房赤々と気ぜわしく

山茶花のちらほら見えて娘に便り

赤とんぼ赤穂城跡は静かなり

岡山市

千原理 恵

本当の涙ひとりになって出る

素直には見えないらしい色メガネ

この秋も柿は同んなじ色で熟れ

和歌山県

山田 久子

よそゆきの顔を持たない私です

何色のクスリが効いたか気分良く

女女 女ばかりのひと時よ

熊本市

黒田 緑

脱皮せぬまま老醜のささくれる

何となく納得をして眠りこけ

揺れる日は臉の奥にささえられ

米子市

堀江 純子

数え唄歌うと亡母を思い出す

満ち足りて運動不足の老夫婦

母さんの弾む指から朝が明け

竹原市

岩本 笑子

秋色に心を染めて旅人よ

もう鳴かぬ虫を木枯し吹き寄せる

群れること知ってか稚魚の大打進

和歌山県

森 三枝子

トンボ眼鏡かけて世間へ翔んでいる

野良帽子つけて案山子も妻に似る

売り言葉買うて夫婦の口喧嘩

愛媛県 八塚 三五島

特選のパパは画用紙からあふれ

反主流そんな言葉が今も好き

丸腰で中天にいる木守り柿

熊本市 北川 一進

サヨナラの声が夕日にみえかくれ

荷造りのひもを大事に祖母の知恵

思い出を包むこけしの可愛い目

大阪市 布施 サチコ

プライドの隙をねらった口車

忠勤をそしられている風見鶏

饒舌になる場と無言に過ごす場と

新潟県 高野 不二

一票を貰ったつもりです握手

正論を通して仲間にはなれず

耐ハイを注文してるのが女

竹原市 信本 博子

不用意な言葉が切った心の輪

真剣になれば言葉も出なくなり

白さぎの目に公害の黒い川

枚方市 二宮 山久

石仏だけが知ってる過疎の村

記念樹へふる里父は元気です

子の寝息聞いて幸せかみしめる

和歌山市 玉井 豊太

冬が来て木枯しの音詩になる

人目には深くはないが飛ぶ噂

浅墓な芝居を打った金工面

高槻市 河瀬 芳子

干柿の甘さ渋さよ亡母想う

パレットの中も日まじに冬の色

自画像は心ならずも若く描き

西宮市 秋元 てる

さい果の旅で小石を拾う女

暮れて行く伊良湖岬の椰子の歌

駄目にする為に見合いに付いて行き

米子市 光井 玲子

孫去んであちこち障子張り替える

定退の夫少しづつ丸くなる

若い娘の素顔に少し妬いている

鳥取県 灘尾 民子

束の間の出会いを阻む秋しぐれ

美しい花にも限りある命

立ち読みが多い本屋も秋になる

岡山県 後安 ふさえ

病む人に千羽がとんでほしい鶴

駄犬でも飼えば可愛い一家族

萩の坂デートの二人見えかくれ

大阪市 渡部 さと美

初日の出生駒に出てもすばらしい

地藏さまそれぞれ持ち場のある役目

両親へかしい嫁は甘えかけ

兵庫県 奥野 テル

涼風に手さげ袋も秋の彩

心にも栄養欲しく旅に出る

引き出しに匂い袋の亡母と会う

高槻市 芦田 静江

月心寺にて

味もよし迫力冴える舌の妙

走井の雫が溜まる集印帳

濃い茶出て山の香りの菓子を知る

尼崎市 佐藤 美代子

前売を買って当日忘れてる

水不足太平洋に雨が降る

お茶席にジーパンも座る京の秋

箕面市 坪田 紅葉

困った時亡夫にすがり灯をともす

不自由な程にもないが痛い足

菊の秋五十年目のクラス会

八尾市 鷺見 章

ポックリ寺の仏と約束して帰り

路地抜けた芋屋の笛が細くなる

夕時雨朴歯がひびく法善寺

指宿市 渡辺 伊津志

鬱病の仮面かぶっているふて寝

人生の勝負を下りた愚痴が寄り

棟梁の無口匏をいつも研ぎ

衣食住足りても条件つけて来る

留守番の母へ注文きいてやり

勉強のつかれを漫画本で取り

唐津市 相葉 あき

進化とは別に頭禿げて来る

気に食わぬ話片方だけで聴く

ポケットに嬉しい話も詰めておく

青森県 波 ただお

お互いに仮面をつけて知らん顔

老母の背小さく見えた発車ベル

演技派の涙にまんまと騙される

長崎県 岩崎 和子

コスモスに少女心を聞いてみる

入選の電話弾む娘の声母の倅

ロープウエーから紅葉の谿絵のようで

西宮市 朝山 千世子

レストラン一寸すまして食事する

終いには涙も出て来る願回事

裏山に登れば墓地に萩こぼれ

出雲市 小玉 満江

あぶりだし写し出された過去の傷

本心を百八十度替えた世辞

いがみ合う夫婦が一つ屋根に住む

大阪府 横山 為子

風乾くカサコソ落葉の私語乾く

岡山県 松本 元江



きつと良い年のめぐりを待つ晦日  
その人の顔を浮かべて賀状書く

豊中市 奥田満女

どの人も美男美女です通動車  
口惜しさに月もゆがんでいるような  
屋上のお稲荷さんに森があり

倉吉市 田中八太郎

小卒の父に漢字を教えられ  
弟を叱れば兄が肩をもつ

同級会やっぱり肩書き意識する

出雲市 小白金房子

張り替えた障子に秋の陽が急ぐ  
立久恵峽もみじ色どる金屏風  
張り替えた障子にうつる柿のれん

大阪市 日阪秋子

秋日和つとめ果した晴着干す  
女には所詮なれない市場籠  
花の水隣へ嬉しい借りが出来

大阪市 松尾柳右子

カラフルな賀状が財布の紐ほどく  
振り袖に言葉づかひも変ってる

大家族一律となるお年玉

弘前市 真喜内 實

踊子の葎が子等を外に呼ぶ

おらが妻健在雪よ降らば降れ

天高く若き二人の幸みのれ(甥結婚)

大阪市 長岡周太  
年金者赤旗どこへ振ればよい  
来る人も行くあてもない髭を剃る

散髪屋の鏡に老いが丸写り

大阪市 大塚節子

嬉しいか辛いかわるの目に涙

散りはてた中に一本色紅葉

しばらくは他人の様な福沢さん

八尾市 松下蕉露

いきいきとゲートボールのこつを説く  
怒鳴りたい相手が医者で辛抱し

逢わせたい人をカンフル打って待ち

大阪市 高橋八重

帯止めのヒスイの色に母想う

口べたの言いわけ聞く方肩がこり

言いわけも板についてる古女房

青森県 福士トキ

一日の疲れを癒す孫の顔

口直しする梅干を噛んでみる

南から柿が届いてりんご発つ

出雲市 河原恵美子

来る来ない花うらないも秋でした

ため息を猫に聞かれる秋の暮

エプロンと大根の白秋最中

島根県 深田ふさえ

てんでんとはずむ手毬の数え唄

風車小さな風にもおどり出す  
繰言をききつつ廻る糸車

大阪市 板東倫子

指ほどの松茸を病む人へ買う  
貧乏性抜けぬ女の二人旅  
貧乏の桁が違った戦前派

島根県 森山英子

残業の汗ガツポリと吸い取られ

空港で電話わが家とはずむ声  
聴く耳は持たぬ女の腕がたち

鳥取県 門脇晶子

風ぐるま喜寿までよくもまわったね  
ゆつくりとあけよう夜の玉手箱  
背負い籠今日のくらしの荷が重い

岡山県 小林妻子

停退の今日一日を守りぬく  
精一杯の言葉並べてみる無学  
水枯れて仲人話盛り上がる

静岡県 渥美弧舟

ラジオ体操朝から妻と気をそろえ  
月明かり影を踏み合おうわらべ唄  
ウツついた孫の瞳がよごれてる

大阪市 塩田新一郎

どちらのパンツでも良いと老夫婦  
甘い菓子狙う智能は蟻クラス

井と竿とえさあり磯の茶屋

島根県 岩佐富子

今日は立冬やがて空から雪が舞う  
大根の煮たのがおいし頃となり  
幸せな老夫婦またもめている

豊中市 小林一夫

薄幸の絵描き故郷を描きたがり  
恋してる二人は笑う狐雨

大阪市 田中節子

柚子風呂に昼を浸って主婦の宴  
川下る人橋の人手を振りぬ

岸和田市 藪野けい子

メモに書いても見落していた忘れ物  
男の子やっぱり父の味方する

島根県 岩田三和

つる亀も静かな村で三ヶ日  
おんなの子産れて桐の苗を植え

兵庫県 脇田米朝

コーヒーが冷めても話が煮詰まらぬ  
出しやばって下手な芝居を見すかさぬ

高知市 北川竹萌

肩叩く小さい拳に気がほぐれ  
仲介の話すんなり酒になる

守口市 長谷川司

ロボットも怒れば顔に赤ランプ

高知県 中内 朱坊

健やかな天寿としたい万歩計

真心の熨斗は下手でも墨で書く

大和郡山市 岡田 すみれ

九十歳川のり取りに糧を出し

紅バラは乙女のようにもえている

唐津市 山口 高明

何の日ぞ右へ習って旗を立て

革命の旗はお子様ランチから

大阪市 内田 まり

毛糸の山完成品を夢みてる

言訳を言えずに帰る道遠し

愛媛県 石手 武

お見舞のベッドにメロン鉢合わせ

電池不足音痴になつてきた読経

和歌山県 北山 凡太

君が代の歌詞忘れても済む時勢

残り物食べて母さん肥つてる

橿原市 中島 正次

包装に年期を見せる女店員

眉墨の薄さは明治の母らしく

岡山県 池田 半仙

ライバルと握手交している打算

肩書が落ちて老化の度も進む

オイ婆や吾輩何と千円也

すご腕のママは素人らしく着る

大阪市 吉田 豊子

アイデアが浮かび途中で立ちどまり

ジョギングをして三文の得をする

岡山県 二宗 吟平

子にかけし夢はしばんで孫にかけ

衣食住たればたりたで欲を出し

高知県 山下 登舟

ひとときを昔に返す同窓会

同窓会昔の癖も抜けぬまま

泉佐野市 真崎 浪速子

真ん中に居ると気づいたこのポーズ

不本意の中で話題に巻きこまれ

橿原市 西本 保夫

釣人に混じりチビツ子竿を垂れ

一流を買いに行く一流を着て

田辺市 染道 佳明

こだわりを捨てて秋風すみわたり

子の願いかのうて軽い朝の靴

岡山県 福原 悦子

秋の空雲の行方を一人言

ゆらく菊添え木で風に耐えつづけ

高槻市 大池 好古

吹田市 西岡 豊

どんぐりがぶつぶつ言うて自己主張  
耳元へ大声あげて内緒ごと

河内長野市 植村喜代

流行を何んでも会得する若さ  
どの家も岩湧山が見えている

兵庫県 円増貞子

膝に来る猫に内職の手を休め  
誘われてことわり切れず無駄を買う

広島市 望月晴彦

昂奮しているとわかる若い鼻  
箱入りに育てた旅の子を思う

新宮市 山田平和

逆立ちがしんどい年になりました  
嫁舅男と女で仲がよい

大阪市 橋本悦子

意地悪のくせに仕返しされて泣く  
老人の生甲斐みたりゲートボール

大阪市 町田達子

四十八滝数は定かで無いと聞く  
金属音出して落葉が駆け抜ける

島根県 園山世似

菊作る人晴々と菊花展  
子が孫が八十路の誕生祝くれ

八尾市 椎尾公子

添い寝してどこかで昼の虫が鳴く

しばらくは籠に入れたら鳴かぬ虫

大阪市 松岡久留美

お人好しけじめ無いのがたまにきず  
幸せな米の良し悪し言える人

大阪市 北田秀月

駅弁は旅の楽しみどこまでも  
言訳で相手をだます悪い癖

鳥取市 若林一止

知恵だけは遺産相続いたし兼ね  
女房の何処で習うか変化球

米子市 大田みさと

朝の掌にとうふをのせて日々の幸  
畳替えやつと二人の秋が来る

兵庫県 野々口ゆう也

送り出す妻は鎖を確と持ち  
十二月夫婦の茶碗が重くなり

泉佐野市 大工静子

久し振りの手紙辞典引く夜中  
リハビリの人へダリア一輪残しおく

大阪市 北山悟郎

セールスが近所の話題置いて去ぬ  
総入歯固い物ほど有る未練

大阪市 権安達一郎

一分でもタイムレコーダーは遅刻です  
言訳をしたばかりに本心を



日記にはトイレ流したこと書かず  
曇り空注射で逝った妹の忌  
鳴門市 八木芳水

くたびれた靴と扶養の家族数  
声かぎり鳴いては蟬の喉仏  
大阪市 大倉圭介

食欲を見せて二人目生む気なり  
言訳もマンネリとなる倦怠期  
岡山市 牧野秀香

鉢植えの紅葉私に秋をくれ  
万山が精いっぱい錦織る  
大阪市 山脇正之

始めからする意志のないなま返事  
ラーメンも受験地獄の友となり  
大阪市 川原章久

サイクリング案山子も見てるギャルの脚  
吉日はまむしドリンク良く売れる  
高知県 小沢幸泉

梅酒用妻は残さず梅も喰い  
雑草に語ってみたい秋深し  
大阪市 喜多佐津乃

子供ミコシにキン肉マンも仲間入り  
手仕事の進む夜には帰らぬ子  
鳥取市 武田帆雀

自他共に認めぬ奴の喉仏  
よく冴えた声の電話だ儲けとる  
新宮市 船越正

クジ売り場大きな夢と書いてあり  
歳の暮知人の離婚知る床屋  
岡山市 後安江山

それぞれに秋を彩る文化祭  
父さんの湯かげんよろし名調子  
岡山市 矢野山人

初恋の或日を語る古畳  
舞扇びたり笑顔のこの舞台  
広島市 花田繁子

尊くて又恋人の太子様  
言いわけの長演説に酔わされる  
倉敷市 赤沢の藤

愛情の深さ女の濃ゆい眉  
書き初めに幸せと書く太い筆  
西宮市 待田麻黄

言訳をすればする程疑われ  
旧軍人父は言訳などしない  
新宮市 田中国彰

雑魚ながら太平洋は我が住まい  
節穴がちよっと気になる木のたらい  
吹田市 鮎子田嘉子

泣くくせに又同じ事くり返し

する事を先に言われてへソを曲げ

和歌山県

西村重彦

裏山も先祖はきつと古墳だな

四十になれば女もおばあちゃん

米子市

宮本佳女男

踏ん切れず思案投げ首してる馬鹿

老骨に趣味が血となり肉となり

島根県

喜島ノブ

玄関で今が見頃の鉢の菊

介添えの人もゆっくり歩を合わせ

大阪市

山本焔斉

病院の暮しに馴れて退院し

焔にこもり世間とうとくなるばかり

兵庫県

平和茂一郎

稲刈りへ一家総出の日曜日

言訳をくどくどと言い妻外出

兵庫県

伊沢午郎

言訳を聞く耳持ためて妻ふくれ

言訳に何か良い物買ってくる

大阪市

平井露芳

新札で負けたと早稲田口惜しがり

御堂筋事ある毎に関氏ほめ

和歌山市

三谷周三

次男にはすぐピツタリになると着せ

一枚のタオルで娘みなかくす

もみじ葉の色にまかせて秋の山

留守に行き合鍵何時も餌の中

兵庫県

市橋茂樹

散歩道おち葉ざくざくふみしめる

はじめからけじめ守れば円満だ

鳥取県

松本みをき

満点がやれぬ雀の知恵袋

失言をフル回転で洗濯し

岡山県

結城太郎

寿司が出てホロ酔いかげんいまま少し

登校兎鍵を持たせてアルバイト

富田林市

松本今日子

八卦見の私の運を信じたい

打ちあげてどうなることでもない話

### ジュニアの部

藤井寺市

赤木奈々

できましたへチマでつくったけしうすい

きもだめしいざとなったらこわいなあ

枚方市

二宮撰子

れいぞうこ中みからっぽみかけだけ

未来では空の上まで家族旅行

枚方市

二宮正彦

金魚ばち金魚用の石を入れ

新聞でべんとうつつんでレッツゴー

—水煙抄—

# 秀句鑑賞

—前月号から—

河内天笑

聞くだけは聞いております母の耳

山川克子

小遣いの値上げだのパソコンだの育ち盛りは欲しいものがいっぱい。どの辺までなら聞いてやろうというメドは持っていて今日のははとも応じられない。肉じゃがを炊きながらハイハイと軽く聞き流すお母ちゃん。さらした生活の句が生き生きとしたのしい。

耐ハイの軽さ女を喋らせる

天崎只士

耐ハイとはご承知の通り焼酎を炭酸で割ったもの。酒、ビールについて消費量はウイスキーを抜いて第三位へ来た。水割りよしお湯割りよし、レモンを浮べると口あたりがよいのでつい彼女はいい気持ちになってきた。「軽さ」にいろいろ含みがある。

猫と犬わたしを知っていてくれる

奥田満女

お隣の主人の顔を知らないでも済む都會ぐらし。ましてや転入転出のはげしい昨今ではなおの事である。煩らわしいお付き合いはなくなったけれど人情は渴く。そんな隙間を埋めてくれるのは私にしばばを振ってくれる近所のポチ。ペーソスに溢れた佳句である。「向う三軒両隣り」も懐かしい言葉になった。

髪型を変えて訣れを言う女

上田佳秋

改まって「話があります」などと言われると寒い予感が走る。まあいつもの調子でその場を切り抜けようなど思っていたらどっこい今日の彼女は違う。髪型も変わりスーツも新調だ。それにどこかよそよそしい。ずるずるとついて来たけれど女はこの男に自分から見切りをつける決心をした。訣れから髪型を変えたのではなく自分の心を決めるためのふんぎりの変身だった。

中流のかん声あげて土びんむし

古川美津枝

アンケートによればなんと日本人の90%が中流意識を持っているそうだ。私も貴方もそのうちのひとりだろう。どこの家にもあるテレビや電話、冷蔵庫などがそういう錯覚をさせているのかも知れない。でも年に一度や二度の松茸にかん声をあげているようでは果して「中流」と言えるかどうか。この句からはたのしい団樂の雰囲気伝わってくるが、

裏返せば哀しいことだ。中流のかん声にいろいろな事を教えられる。

スーパーでこっそり掛けてみる眼鏡

西本保夫

ジョーカーを持っているのはいつも母

清水康恵

売った家解体されてかわいそう

高野宵草

未来像見ている様な母と座す

福士トキ

埋れ火を抱いて男に妥協せず

野村京子

「あなたには着てほしくない」と毛皮言う

藤井高子

音痴でもおぼえた歌に自負を持ち

堀江純子

平凡に暮れて秋力魚が二匹焼け

淡路ゆり子

ベレー帽一寸あみだで酔いました

山本玉恵

退院するそうな見舞いに行つときまひよ

麻野幽玄

留守番も楽しき哉と玉露入れ

板東倫子

すこし疲れた量に母の手内職

木本如州

# 愛染帖

## 橘高薫風選

孤児帰國向日葵派手に世は暗し

富田林市 岩田美代

ようやくと嫁さん見つけた長い傘  
お見舞いにすばらし火種置いて行く

大阪府 朝倉利義

妻病んでいても正月おめでとう  
入院に白髪を染める女の血

奈良川市 岸野あやめ

惚けた頭に得意の過去が詰ってる  
明日が来てまた明日が来て六十歳

和歌山県 西山幸

着ぶくれて影もわたしも重くなる  
影がゆくとほとほと冬がゆく

大阪府 小出智子

他人ばかりの街で香奠ことづかる  
仙人にしばらく私をあずけます

川西市 野村静雄

生き抜いて笑って坐る場所に居る  
ひそやかな出会いらしくて影法師

今治市 月原宵明

老残のふたりに腹が減ってこず  
蛸干した漁師町から冬の風

東大阪市 市場没食子

目薬か泪か目尻に出た結晶  
箸置いて旅は尚さら正露丸

大阪市 西森花村

人生双六また振出しの喜寿祝う  
形見分け済ませて師匠元気が出

兵庫県 野々口悠也

ちぐはぐな夫婦茶碗がもつ絆  
許される余生の一日を美しく

藤井寺市 赤木奈々

吹田市 井上照子

母の背の老いる姿よ時とまれ  
つまずいた道の遠くに好きな花

豊中市 奥田満女

表には花を咲かせた裏口よ  
角柴の裏の力はまだ続く

唐津市 浜本義美

寄り添って温め合ってる一円貨  
点滴も連れてトイレのドア開ける

岡山県 土居耕花

天皇の風邪には効かぬ卵酒  
食堂があり手洗いが付いている

大阪市 松尾柳右子

天高く水の都で水不足  
爪切ってから新年が動き出す

宝塚市 丸山よし津

札幌インフレ進む匂いする  
白日にさらす古代の夢の跡

岡山市 川端柳子

引きつづき岡山に住む祭りずし  
木枯しや叫びたいこと伏せ難く

奈良市 堀江光子

石つまむ豆棋士の目のたじろがず  
三人三様の言い訳聞かされる

米子市 小西雄々

渡り鳥友の訃報は届かない  
倒産を助けられない肖像画

尼崎市 春城武庫坊

雪うさぎ眠れぬ恋をしましたか

藤井寺市 赤木奈々

我・廿年生れ

青森市 工藤甲吉

八甲田嵐を聞いて牛も寝る

津軽焼雪のふる日の手を温し

豊中市 上田登志美

参籠の御堂が雪に埋りそう  
研ぎ澄んだ冬の月見る一人旅

笠岡市 木山遠二

病よし筆は持てねど箸は持ち  
枕への猫に欠伸をもらいもし

米子市 林瑞枝

指人形子の風穴がふさげるか  
結び目を解いて貴方の謎を解く

高槻市 笠嶋惠美子

裸婦の絵に我を重ねる白昼夢  
通りゃんせ大人になれる丸木橋

島根県 堀江正朗

闇 話の種が見つからぬ  
独り言それで気のすむ寒さかな

西宮市 草刈墮駄

赤ん坊突然笑つ気分かな



げんきかなアメリカにいろおとうさん

吹田市 西川 景子

置物によい流木をみつけたり

島根県 小砂 白汀

花舗の花生き生きとして人が死ぬ

愛媛県 八塚 三五島

再婚の見合いは酒の席でする

米子市 八木 千代

一日に一度溺れる水中花

和泉市 岡井 やすお

新札を待ってましたと新財布

和泉市 西岡 洛醉

異端者の今日は空しいままで暮れ

和歌山市 浦野 和子

起き上り小法師はボーカーフェースだな

羽曳野市 中村 優

見えすぎる老眼鏡に出る小言

米子市 政岡 日枝子

旅帰りの風はいとしいことをいう

米子市 菅井 とも子

バスツアーそれから続く同じ趣味

守口市 結城 君子

林から今年の冬は始まりぬ

高槻市 河瀬 芳子

鳳仙花視線が合ってボンと跳ね

米子市 田中 亜弥

負けてから心安らく日が続く

唐津市 久保 正敏

白紙に戻れず色を塗り重ね

和歌山市 桜井 千秀

豪快な笑い小心覗かせる

鳥根県 堀江 芳子  
太鼓判押ししてくれるは夫ひとり

唐津市 木塚 素石  
負けいくさなくさめくれる鱈雲

羽曳野市 天崎 只士  
背中にも目のある父の笑い声

鳥取県 新家 まさる  
化かされてみたいが尻尾長すぎる

米子市 青戸 田鶴  
風船よ天の広さにいつ気づく

近江八幡市 前川 千賀子  
嗚一声蒼天に去る者は去れ

守口市 長谷川 司  
不器用も使い道あり年の暮

吹田市 栗谷 春子  
語り合うひとりが空いて秋となり

吹田市 西岡 豊  
水玉が虹を描いて須磨離宮

羽曳野市 麻野 幽玄  
うたた寝の炬燵へ切り込むすきま風

豊中市 田中正坊  
「烈士の碑」に友を合祀

今治市 月原 つくし  
封印をした真実が洩れて出る

鳥取市 武田 帆雀  
正純な気分よ風よV S O P

愛媛県 石手 武  
恍惚の哀れ何やら独り言

広島県 望月 晴彦  
逃げて行く僕を放さぬ影法師

仙台市 川村 映輝  
子育てに妻が三分で母七分

高知県 赤川 菊野  
淋しさを真赤な花びんに活けてみる

浜田市 佐々木 裕  
柿一葉老母の笑顔を想い出す

大阪市 大塚 節子  
あの顔がまかり通って世のゆがみ

今治市 矢野 佳雲  
ジャン拳で片付く一時的平和

笠岡市 松本 忠三  
悼 高木桃里会長

西宮市 伊藤 春子  
訃報聞き我と我が身を疑いぬ

米子市 茂理 高代  
汚されてもうはずまない毯一つ

美しい白髪も耐えた光りです  
名古屋 藤井 高子

高知市 小澤 幸泉  
人の良い顔へ湯豆腐喰われけり

岡山県 池田 半仙  
つれづれが多くなります年金者

鳥取県 淡路 ゆり子  
盆栽の紅葉も小さい秋の貌

長岡京市 木本 如州  
落武者の笛が聞える菊人形

鳥取県 松本 みをき  
雑草がヒントを呉れた土払う

鳥取県 松本 みをき  
御先祖に残り時間をきいてみた

竹原市 信本 博子  
愛という字の無い文の大きな字

木枯しに後歩きや前歩き  
高槻市 梁川 吉子

法師蟬ブルドーザーへ鳴く怒り  
今治市 越智 一水

落葉降る中で一人を意識する  
高知市 北川 竹萌

回り舞台小さな未練一つずつ  
岡山県 清水 悠貴女

嫁きし子の部屋の雨戸は閉めたまま  
富田林市 藤田 泰子

肉ジャガの醤油電話で聞いくる  
唐津市 仁部 四郎

翔びたつても籠のぬくもり忘れぬ  
糸子市 光井 玲子

紫が好きでその人が好き  
富田林市 松本 今日子

今更に関白風も吹かされず  
大阪市 坂本 仙吉郎

鉄格子母のぬくもりなら解ける  
岡山県 千原 理恵

セーターを着たりぬいだり菊日和  
大阪市 北 勝美

挨拶も活字になると良く流れ  
唐津市 田口 虹汀

輪踊りの足の軽さよ鳥になる  
唐津市 山口 高明

読書の秋たんのうせぬに冬とたり  
唐津市 浜本 ちよ

老夫婦に一年前の我を見る  
唐津市 相葉 あき

羽曳野市

吉川 寿美

自己満足の形でゴムの樹が伸びる  
今治市 野村 京子

マネキンを脱がせて試着して見た差  
糸子市 野坂 なみ

飛鳥仏しみじみ拝む秋の旅  
岸和田市 古野 ひで

醒めた目で組閣のニュース見えます  
鳥取県 福田 あや子

凍り豆腐月の雫を抱いて寝る  
島取県 福田 あや子

よく来たといふの音が聞えそう  
八戸市 島田 昭治

僕よりも不幸な人が並ぶ列  
弘前市 田中 叶

権力が吹く笛なぜか尖ってる  
弘前市 波多野 五楽庵

ネプタ笛いつも多感な父だった  
堺市 高橋 千万里

信心の母の言葉は生きていた  
寝屋川市 野田 実

芸達者いま窓際にかこち顔  
倉吉市 田中 八太朗

スナックのボトル社長と書いてある  
岡山市 井上 柳五郎

札状の筆勢に見る回復期  
大阪市 大野 武太

ラジオきくてんのじ村のひとくたり  
西宮市 松本 一郎

脱サラに賭けた男の明と暗  
吹田市 茂見 よ志子

ものぐさで種無し柿が好きと言つ

冬の月愛語るには冷たすぎ  
岡山県 松本 元江

コスモスに少女心を聞いてみる  
西宮市 朝山 千世子

街角のガラスで丸い背を伸ばす  
岡山県 白岩 文衛

孫叱るのも一息入れてからにする  
芦屋市 竹中 綾珠

バッタとび秋の日射しが動きたり  
姫路市 大原 信好

何喰わぬ顔に吞んだと書いてある  
岡山県 小林 妻子

お座敷を総なめにして日が沈む  
和歌山市 坂部 紀久子

投句先 千560豊中市中桜塚三丁目13-15  
橋高薫風宛(ハガキに3句)

### NHK川柳募集

課題 「開く」 選者 橋高薫風

締切 1月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43 NHK  
大阪放送局。さわやか広場。係

発表

1月27日(日)ラジオ第一放送  
午前11時5分から

11月21日俳人で最後の私小説作家といわれた滝井孝作氏が亡くなられた。享年90。芸術院会員・文化功労者で、昭和2年の「無限抱擁」は日本における恋愛小説の最高峰といわれた。作品13篇。芥川賞選衡委員を46年間続けた。小説の師は志賀直哉と芥川竜之介。

また15歳の折、河東碧梧桐の門に入り新傾向俳句に傾倒。大正3年上京、碧師の「海紅」創刊とともに編集を担当。俳号折柴で「折柴句集」(昭6)等随筆俳文三篇があり、自伝的長篇「俳人仲間」(昭48)が最後となった。

私と先生の交友(といえば大きさだが…)は昭和30年頃、岐阜日日新聞記者として郷土出身の著名文化人連載の企画のため、写真班を伴い、川合玉堂などの画家、作家、文化人を歴訪した。飛騨高山出身の先生宅を八王子在にインタビュースたのが初対面。

晩秋の爽やかな陽が八畳あまりの閑寂な書斎いっぱいひのなかで半日間も愉しく過した。朴訥村夫子然たる初老の先生との対話の写真がいまも一枚、私の手許に残っている。

この半日間の話題の中で、私を「愉しく」させたのは、麻生路郎先生が川上日車とともに大正4年創刊した「雪」(路郎経営蔡書店刊)

をめぐる思い出だった。この「雪」とは、路郎の川柳上における試行錯誤と指摘されている新短歌運動の機関誌である。

「碧師の経済的パトロンだった岐阜市の塩屋。鶴平が、特高に追われていた同志の宮林董哉を梨畑の人足でかくまっただが、この董哉が大坂でひよんなことから麻生路郎氏と懇意になり、実はここから「雪」が生れた。俳人遊魚その他が大いに支援したが、金は鶴平

## 滝井孝作(折柴)先生を偲ぶ

東野 大 八

のポケットマネーから出ていた。どうも私は川柳を「新短歌」というのが気に入らず、川柳は川柳でいいじゃあないかといったんだ。鶴平は川柳が好きで狂句まがいの奴を毎日作っていた。太つ肚な彼は、路郎の思い通りにやらせろ、金ならいくらでも出す」

何分、鶴平宅は近在切つての大地主で、家が酒や女や株の道楽より、俳句道楽の方が家が安泰だからと大いに俳句や川柳を奨励し

てたんだから面白い家だったよ、と先生はあたたかく笑う。

いろいろと路郎先生をめぐる話も出たが、大半世間話で流してしまつたのは惜しいが、なんでも先生は、路郎という人物と一度だけあつて由。新傾向俳句をやんなさいと大いに誘つたそうだが、その気になりそうではない川柳から離れるのはイヤだ、といった貌で大分頑固な人物だったなあ、という言葉だけがハッキリ頭に残っている。

私のインタビュは「小説は面白がらせる作品は白々しい。文学に嘘は必要ない」というのが骨子で出来上り、俳句も川柳も同じだよーというのだけを最後につけ加えておいた。

このあと「ぎふ文学」例会でリーダーの島秋夫が「芥川賞の選衡に滝井孝作なんて入れているのは時代錯誤も甚だしい」と揚言したので、なぐり合ひのケンカになつた思い出は今も懐しい。若い頃は面白かつた。

十年前に先生と高山で再会したが、「俳人仲間」が出たとき、いち早く贈呈して頂いたことは忘れ難く、ヘドロまみれのその本を濁水から拾い上げ、今も書棚に黄色い裸で洗ひざらした姿をみせている。何度か頂いた大切な書信はすべて流失したが、あの八王子の先生との半日は今も懐しく私の心にある。



## 続 斐伊川暮色

### 小 砂 白 汀

その頃松江に村穂珍馬あり、この人の指導で「頼杖」という柳誌が刊行されていた。井上剣花坊の助言でこの誌名が成ったと記録されているが、大正十一年六月号(三号)に木次の難波何冀(後の句味、本名力)の次の句が掲出されている。

色々の素顔を見せる湯屋の前

そして翌十二年二月、何冀宅に於て第一回の句会を開き、出席者は、げげ馬、吉外、蛙冀、抜作、竹馬、何冀の六名であったが、五月九日の例会には会員も八名となつてゐる。

同窓へ不義理がかさむ失意の日 難波改め一路飾り窓へ投げる瞳の燃えるよう

鮮人に宿を聞かれて困るなり

病院の窓へ工場の煙が舞ひ

色々な説が話す宿の夜

木賃宿娘より古い客が来る

同窓会歎気満々で終るなり

一人旅宿で道連れ出し

寝たままの添乳はアグで指図をし  
 続いて同年六月三日に開かれた第二回山陰

川柳大会(頼杖創刊一周年記念)には全出席者四九名の内、木次町からは句味、吉外、一路、辛気楼、竹馬、枯雷楼、余四一の六名が参加している。なお何冀会は十二年末には衰退を見せはじめ十三年二月には木次の川柳土壤は休眠状態となつたとある。なお「頼杖」で活躍した作家の作品を拾つて見ると。

日記帳ラブは英字で書いてあり

逆らわず黙つて生きて物足らず

向ふから来る盛装へ伏眼がち

病みより障子に夕陽の沈む色

押黙る中に誠実の色が見え

探し物乱したまんま納れておき

春を知る心に眩し曲線美

口ごもる孫と楽しい秋日和

開放の小鳥ならんで唄つてる

以上の作品は約一年半に渉る「頼杖」の中から抄出したものだが、それぞれ個性を持った人達がその後、柳界に残っていたらと県柳界のために惜しまれる。

難波 苦味

加藤 一路

足立 撫子

井上 吉外

森山 辛気楼

難波 柳子

西村 余四一

舟木 春気坊

鳥 冀

## 西宮北口川柳会

### 創立十周年記念正月句会

日時 1月14日(月)午後1時より

場所 阪急神戸線西宮北口駅下車

西宮球場前踏切を渡りすぐ

西宮中央公民館

兼題 「続く」「コート」「記念」

「自由吟」当日席題一題

各題三句

会費 五百円(軽食粗品呈)

投句のみの方・二百円(切手)

投句先 千62 西宮市広田町8-15

妹尾春江方



# 川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山 内 静 水方

会 副 会  
長 会 長 計 係

山 小 時 山 信 石 佐 岩 古 古 岩 古 三 森

ほ 内 島 広 内 本 原 藤 本 田 田 本 谷 宅 井  
か 静 蘭 一 房 博 淑 令 笑 比 鈍 文 節 不 菁  
一 同 水 幸 路 子 子 子 子 子 子 呂 舟 晴 夫 朽 居

# 頌春 1985

## 川柳わかやま

塔を支える

牛にひかれて底力

橋本・紀水川柳会  
由良・川柳ゆら

岩倉 天彦  
内芝 登志代  
浦野 和子  
牛尾 緑良  
上杉 信秋  
大野 武太  
大越 一千代  
柿花 紀美女  
片岡 茂一  
神平 狂虎

北山 凡太  
岸本 木魚  
桑原 道夫  
黒瀬 登紀夫  
黒田 秀雄  
後藤 正子  
坂口 公子  
坂部 紀久子  
染道 佳明  
垂井 千寿子

田中 悦子  
田井 豊太  
谷口 信子  
田中 輝子  
寺田 裕美  
天満 三千代  
富上 光代  
中鳥 正博  
中根 勇太  
中山 修

中屋 好夫  
中井 栄美子  
長尾 ミチ子  
西山 幸  
西口 忠雄  
野村 きみ  
平井 照子  
福本 英子  
福井 桂香  
堀端 三男

細川 稚代  
松原 寿子  
松本 庄平  
森脇 善太  
森三 枝子  
山路 佐代子  
山川 克子  
山田 久子  
若宮 武雄  
野村 太茂津

外一同

米

時末一灯選

みな達者働く明日の米を研ぐ  
日本の心育てて米のめし  
一日の幸せ暮れる米をとぐ  
粟田にもぐる泥鰌はコメ議員  
米二合炊いて独りの城守る  
余るのも足らぬも米に罪はない  
残飯ですてる米にも汗を積む  
お茶漬けがこんなな美味日本人  
米作るほこりが祖父を生かして  
米処で育ち飯場で冬を越し  
米櫃を満たして安堵の戦中派  
物持が良すぎて古々米食へてます  
米はなれした若者の長い脚  
米の字を八十八と聞き育ち  
一握の米の主張が掌を抜ける  
米作る気概そがれてから狂い  
無意識に米粒拾う手に育ち  
米粒をつけて絵になる子の笑顔  
大家族標準米も美味く炊け  
あかきる手で米研いだ亡母憶う  
米作る馬鹿を重ねて父老いの  
空襲を憶い米研ぐ日の平和  
鉢巻きの声が米の価少し上げ

期待薄それでも米を研いで寝る  
米三升家宝が消えた終戦後  
退院をしてから米がうまくなり  
もう無理はきかない配給米育ち  
力こぶ私も米を食へてます  
献血をして噛みしめる米の飯  
米もつとお食べなさいという平和  
農家にも米の嫌いな子が育ち  
シベリヤで米のご飯の夢を見た  
銀めしに焦れた時代忘れ去り  
米を磨ぐ宵のリズムは母のもの  
一粒の米の履歴を言い聞かす  
豊作の米価があつさり高くなり  
米倉をみだし天地へ掌を合わせ  
米俵にあぐらをかいて転げ落ち  
逢つて来た余韻断ち切る米を研ぐ  
米に字を書いて仏に生かされる  
米袋昔俵とよびました  
こたわりは水に流して米を研ぐ  
米に泣き米に笑つて来た農夫  
米一粒捨てると大地に音がして  
一食はパンでも日本人の米  
ほんとうはパンが好きです米娘  
頑固さは米の無かつた頃育ち  
米をとぐ指から漏れる年月や  
米ですか輸入してます捨てます  
サチコ 千秀 博友 素身郎 重人 里風 本蔭棒 義朗 美朗 サワ子 代仕男 度 与呂志 みどり 枯梢 規不風 カズエ 多賀子 七面山 ゆう也 柳子 忠三 克枝 たず子 正敏

けじめ

垂井千寿子選

人生のけじめ還暦の祝い膳  
ひと区切りつけて灯を消す町工場  
入口は別々だった露天風呂  
アメリカへけじめをソ聯に揺さぶられ  
昼と夜のけじめに迷うエアライン  
ロボットと人間分野にあるけじめ  
一応のけじめネクタイ締めて出る  
我が儘と自由主義とにあるけじめ  
親子でも社長と呼んでいるけじめ  
親子のけじめをつける言葉選る  
先生も友達もない流行語  
けじめついたら血圧上つてた  
置き手紙にけじめが有つた娘の決意  
教壇に立つとけじめが好きになる  
出す出さぬ招待状にあるけじめ  
建前と本音けじめの線探す  
チユイナム噛んでけじめに遠くいる  
交際のけじめけじめの熨斗袋  
よっしゃよっしゃ公私のけじめつかぬまま  
白足袋を履くとけじめがつかぬ  
白黒のけじめへ金が顔を出し  
出すものは出せとけじめ匂わせる  
けじめなく年中穫れる夏野菜

簡単にはじめめをつけぬのが政治  
 子ばなれにけじめがつかぬ宅急便  
 境界をほかしちぎり絵美しい  
 目ざましえつけぬ男がラッパ吹く  
 けじめささえつけぬ男がラッパ吹く  
 女にはうっかりけじめつけられぬ  
 主催者の席で酔えない酒を飲み  
 生一本さげ話はなかつた事にする  
 領海のけじめに赤い線がない  
 退職金ボンと二人で割るけじめ  
 けじめ丈はつけなはれや貸して呉れ  
 茶柱にけじめをつけた腰を上げ  
 はつきりとけじめをつけた丸判  
 処方箋通りにけじめが解けはじめ  
 酔いまわる順にけじめのつかぬ日々  
 電照の菊にけじめのつかぬ日々  
 大風呂敷ひろげてけじめなど知らぬ  
 それぞれのけじめ自然の世界にも赤木和子

世の中はけじめと情のヤジロペー  
 人がらのよしあしけじめは人が決め  
 長続きする友情にあるけじめ  
 いい汐にけじめつけいと言う他人  
 証文はいらぬと友の目を信じ

人 宵明 規不風  
 地 八太朗  
 天 神々のけじめに背く試験管 正敏  
 軸

言 い 訳

内 海 幸 生 選

脱線はしても阿弥陀の掌の中で  
 言い訳の舌が樹海を深くする  
 言い訳をするよりご免と丸く生き  
 言い訳をコンピュータに言うてみる  
 言い訳の矛盾を刑事衝いてくる  
 一応は言い訳せんともませておき  
 ご無沙汰の言い訳うそもませておき  
 言い訳は聴くまい受験生の絵馬  
 言い訳も聞かずガミガミまくしたて  
 言い訳に身内の一人を死なすなり  
 言い訳をすれば無い肚探られる  
 言い訳はせずすみませんすみません  
 言い訳を聞いているのは母一人  
 言い訳は伏せて相手の出方待ち  
 言い訳に親類次々殺される  
 言い訳とわかる土産を買ってくる  
 言い訳を母は素直に聞き流し  
 言い訳も聞かずうらんだ過去を悔い  
 言い訳はやめて頭を下げておく  
 言い訳にきれいな彩が塗ってある  
 言い訳に花束が泣く海馬島  
 言い訳は利かない枯れていた植木  
 言い訳は認めてくれぬ棒グラフ  
 三度目の言い訳一升提げてくる  
 言い訳の嘘を背中にきく蛇口

文平 千恵子 公一 凡太 兼治郎 優 春日 覚然坊 佳雲 枯梢 弘朗 綾珠 はつ風 里近 満津子 高子 正義 道子 雄々 三吉

言い訳も添えて疎遠の年賀状  
 言い訳は切れた蜥蜴の尾にも似て  
 怒られる犬も言い訳はしない顔  
 正誤表つけても言い訳とはならぬ  
 言い訳を見抜いても女さからわず  
 気の利かぬ嫁言い訳をさうまく言  
 言い訳がくどいと思う妻の勘  
 言い訳をすんなり聞かれている不安  
 言い訳はせず土砂降りの雨に濡れ  
 言い訳は無用路傍の丸い石  
 言い訳にまでも勿体つける人  
 言い訳の理路整然が気に入らぬ  
 言い訳がうまくて大将にはなれぬ  
 追いつめて言い訳聞いてやるゆとり  
 不養生言い訳させぬレントゲン  
 言い訳がとてもし嫌いな作業服  
 言い訳へ妻はニヤツと笑うだけ

佳 人 章

言い訳をすると戦さは負になる  
 言い訳もせずに俯く子へ折れる  
 裁判官後で言い訳出来ませぬ  
 欠席と書いて言い訳考える  
 焼けすぎたパンに言い訳そえてだす

みつる どんたく 墮駄 静歩 婦美子

言い訳を握り拳に間に合わず  
 言い訳が握り拳に間に合わず  
 言い訳を先人親が聞いている

天 耕花  
 地 秀峰  
 代筆で言い訳らしいハガキ来る



# 初歩教室

題 — スタート —

本田恵二郎

- 敗戦でやっとスタートわが青春 周 三  
 (敗戦のおかげでスタートした青春)  
 スタートにみんな並んで幼稚園 同  
 (スタートライン目白のように幼稚園)  
 スタートに並ぶ我が子へ握りこぶ 明 吉  
 (スタートに並ぶわが子へ汗握る)  
 人生の再スタートに白髪がふえ過ぎた 同  
 (再スタートするに白髪がふえ過ぎた)  
 (再スタートのおつむいささか白過ぎる)  
 スタートが早くつまずく敵の罠 里 子  
 (スタートが早過ぎ罠にひっかかり)  
 スタートが早過ぎ罠にひっかかり 同  
 (口達者のスタートへ手足ついて来ず)  
 スタートを切った迷路甘くない つや子  
 (スタートは切ったが甘くない迷路)  
 産声がスタート切って譜に乗せる 同  
 (スタートした産声美事な譜を奏で)  
 スタートには夢一杯こぼれてる 昇  
 (夢一杯抱いてスタートしたもの)

- スタートには七光りコネのある顔も 同  
 (七光り背負ったのもいるスタートライン)  
 高らかに産声聞え走り寄る 輝 月  
 (産声へかけ寄る心しずめねば)  
 脱サラへスタート夫婦で掌を合せ 同  
 (脱サラへスタート夫婦で歩を揃え)  
 脱サラへスタート夫婦の息が合い 同  
 (脱サラから全力疾走走れもよし)  
 スタートのおくれが縁で結ばれる 同  
 (スタートのおくれ同士が結ばれる)  
 新札は悪評の下スタートし サワ子  
 (新札のスタート悪評一としきり)  
 今日からは二人三脚途はるか 同  
 (スタートで張り切り過ぎて失敗す)  
 スタートで張り切り過ぎて息が切れ 千代女  
 (スタートは好調なれど息が切れ)  
 スタートは好調 あとは運まかせ 同  
 (スタートは社訓きびしい新社員)  
 照 子  
 (新入社が社訓きびしくスタートする)  
 スタートの一歩大地の土をはね 同  
 (スタートの一歩土をけり空気切り)  
 ためらいもなくスタートからやり直す よし津  
 (長距離のスタートだから慎重に)  
 同  
 (長距離のスタートだから油断せず)  
 スタートも人生ゴールは一人旅 吉 子  
 (人生のスタートもゴールも一人旅)  
 スタートのよしあし言うより頑張ろう 同  
 (スタートはどうあれひたすら頑張ろう)  
 勝算ありスタート一歩遅らせる あや子

## 川柳塔社常任理事会 (12月1日)

出席者 葉・薫風・紫香・形水・太茂津・柳  
 宏子・鬼遊・天笑・萬的・雀踊子・凡九郎・  
 重人・寿馬・史好

### 議事並びに報告事項

▽来年は川柳塔創刊二十周年に当るので記念  
 事業を計画してはとの提案あり、検討するこ  
 ととする。

▽「初歩教室」の担当を四月号から阿萬萬的  
 氏に依頼、了承。

▽新同人に前川千賀子、二宗吟平両氏推薦の  
 件了承。(史)

### 1月の常任理事会は休会。

- スタートの緊張はぐす逆立ちし 同  
 (スタートの緊張 逆立ちしてはぐす)  
 スタートに努力の二文字抱いて立ち 久 子  
 (努力の二字を抱いてスタートに立ち)  
 スタートに立てば浮世の風も知り 同  
 (スタートに立つて浮世の風を知る)  
 スタートの名馬が読んでる速度 豊 太  
 (さすが名馬速度を読んでる速度)  
 祝い酒受けるスタート照れている 同  
 (祝杯を受けるスタート若く照れ)  
 人生のスタートだった橋の上 歌 子  
 (人生のスタートは里の土橋から)  
 スタートを遅らせている化粧台 同

(化粧台スタート芽出度くおくらせる)

いつまでもスタートラインまだ越えず 幸 泉

(スタートラインまだ越えられず越えられず)

テーブル切るスタートいよいよ盛り上げる 同

(テーブル目指すスタートの意気天を衝く)

つまずいたスタート学歴無だけに 保 夫

(学歴が無くてスタートつんのめり)

スタートは同じのエリート先に行く 同

(同時にスタートしたがエリート差をつける)

還暦にも古稀でもスタートライン敷く 小 愛

人生はオギヤと泣いてスタートす 同

(人生のすたーとオギヤと張り上げる)

心して第二の人生スタートする 千 代

(第二の人生劇 心してスタートする)

結婚に入ったスタート荷が重い 同

(結婚劇のスタートずっしり荷が重い)

### お知らせ

永らくご愛読いただきました

本田恵二郎氏の「初歩教室」は、

三月号を以て終らせていただき、

四月号より阿萬萬的氏にバトンタ

ツチ致します。引き続きご期待下さ

い。

人生のスタート三三九度で切る 兼次郎

スタートの失敗つまり離婚言っ 同

(スタートの失敗 離婚劇の序曲)

人生のスタート二人の彩で染め ちよ

スタートの目の輝きはみな同じ 同

(スタートのどの目も生きてる澄んでいる)

スタートのピリがテーブルにある自信 勝 美

(テーブルへ成算ありピリでスタートする)

スタートは裸一貫屋台店 同

(裸一貫でスタートした屋台店)

スタートへ平和の旗を忘れない みつる

スタートがおそくて出世出来ぬまま 同

(スタートが下手だ出世へ遠くいる)

菊薫るスタートラインへ立つ二人 節子

(カッパルのスタートへ菊が笑みかける)

スタートは同時社会の浮き沈み 同

(スタートは同時に浮くのや沈むのや)

スタートに打算絡んで出遅れる 忠 広

(スタートに打算が絡み出遅れる)

金星でスタート力士の恩返し 同

(スタートで金星拾った恩返し)

マランのスタートピリでも苦にならず 昭 治

スタートは同じいろいろあってピリ 同

(同時スタート其の後あれこれあってピリ)

マラソンのスタート損得考えず やすお

スタートの差はゴールまで保ちたい 同

(スタートの差をゴールまで守らねば)

スタートに立てば心を澄み沈め 芳 水

(スタートの心は明鏡止水です)

スタートのミスが一生足を引き 同

(スタートのミスが生涯つきまとい)

欲のないスタートしたが今は餓鬼 梨 郷

(無欲淡々スタートしたが餓鬼となり)

スタートの幸先き祝う親の声 同

(スタートの幸先き祈る親ごころ)

一年のスタートやはり酒が要り 武 水

再スタート生きて行かねばならぬから 同

(再スタート生きねばならぬ天道)

一瞬のスタート学んだ基礎生きる 實

(スタートの一瞬 学んだ基礎が生きて)

スタートに希望の灯が光り添え 同

(スタートの胸に希望の灯をともし)

復帰へのスタート祝う千羽鶴 章 久

スタートは浮世の義理を弁えて 同

のど自慢スタート如何で評価され 理 恵

人生のスタート甥の目澄んでいる 同

人生のスタート台に君と僕 山 久

スタートのコネのハンデがちぢまらず 同

再起へのスタート妻子の目がうるむ 柳五郎

スタートからトップ息切れ案じられ 同

スタートで何か忘れていませんか 克 子

スタートに戻る勇気も持っている 同

スタートへ初心の二字を抱いて起つ 寿 子

スタートの海青青と風いでいる 同

題一名残り—1月10日締切(3月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一—一九—三四

本田恵二郎

# 柳界展望

集録・板尾岳人

★高橋操子さん(岸和田市)

が大阪府文化功労賞を受賞され、11月28日教育会館で賞状と岸知事の色紙の額を贈られた。おめでとございます。

★第5回津山市民川柳大会日・60年1月13日(日)

所・津山大手町美術教育会館・10時30分

兼題Ⅱ明日・抱く・行く・運ぶ・泡・色・阿呆

・葉・鬼

★函館川柳社(川柳はこたて)が新年号が四〇〇号となりめでたい門出となる。

★唐津虹川柳クラブ主催で唐津市文化会館で昨年11月開催。会場には会員のほか

川柳塔社主幹西尾栗氏ら

の色紙や、関西方面の諸氏の応援出品の友情あふれる作品展となり盛会だった。

★「川柳のたのしみ」林富士馬氏・東京平凡社より定価二二〇〇円

★「川柳の作り方・味わい方」神田忙人氏・東京、社会保険出版社より定価千円

★桂林の中国物産展の展示場で、私は久しぶりに洛陽の三彩馬を、陳列棚の片隅で対面した。薫風さんが

私のこの馬への関心ぶりをみて一個購入されたのはうれしかった。「家内がウマ

蔵なもので……」というお話だったが、その薫風さんの奥様がグラママーの唐三彩

美人俑とウリ二つだとなつておぼろげに思い出した。こ

んな馬より私は手に入れたいと内心強く考えたことだった。

★らい年は私も職を辞めようと考えている。妻も子供たちも反対しないでくれる

のがあるがたい。頂上の見えない坂道を歩く川柳。ますかつと。12月号より(寺尾俊平)

★添削とは欠点を見出してその欠点を補い、よりよいものに矯めることであつて梅を桜に変えることではない。

川柳。柳友。より(藤島茶六)

▽お便り△

■熊日川柳大会総合一位に永田俊子さん(本社誌友)が選ばれる。本人も川柳塔に入会し多士済々の才人達の新感覚の句に刺戟をうけて句作に張合いが出来喜んで

います。(有働芳仙)

■いつも川柳塔誌をご惠送いただき有りがたく御礼申し上げます。拝読後当地で

回覧させていただいており

■亡母のお墓参りかたがた小豆島へ久々行って来ました。秋の島と海が慰めてくれました。

秋晴れて壺井茶の碑を仰ぐ

(朝山千世子)

■鳥取の日満氏追悼句会のあと大社へお詣りして昭和10年1月ハネムーンに来た玉造温泉のなつかしの保性館に泊っています。

■県の芸術文化祭は県民会館で開催され、緑之助・連児・代仕男・明朗・正朗・きみえ各氏が今年度の招待作家で

地球儀に核捨てる場所見当らぬ「銀賞」竹内寿美子

海底の遺骨終戦まだ知らず「銅賞」板垣夢酔が

それぞれ受賞されました。

それ

それ

それ

それ

それ



(堀江芳子)

■中国吟行記は北京・天津を一度旅しましたのでよく分りました。西尾栗主幹の龍神温泉スケッチの旅行記も丁度私も5日に下御殿に宿泊しましたので主幹の生き生きとしたペンの流れに又行った様な気になりました。(松浦輝月)

■寄せ書き拝受

京都塔の会月心寺より・第32回竹原総合文化祭協賛句会より・きやらぼく川柳会より・柿花紀美女氏作家賞受賞記念句会より・京都塔の会興聖寺より。

▽句会案内△

■東大阪川柳同好会

日・1月26日(土)夕6時

所・東大阪市社会教育センター

タ―布施駅北へ5分

兼題||牛・ふるえる・約束

・流転

■南大阪川柳会

日・1月19日(土)夕6時

所・寺田町・高松会館

兼題||約束・痛む・有力・

新同人紹介

前川千賀子  
まえ かわ ちがこ  
| 栗・薫風・紫香・弘生推薦

二 宗吟平  
に しゅう ぞう ぎん へい  
| 照路・柳五郎・博友・たけ志推薦

絵葉書・余興

■南海電鉄川柳例会

日・1月20日(日)夕6時

所・南海会館内南海電鉄本社地下食堂

兼題||初詣・希望・赤飯

■駒つなぎ川柳会

日・1月22日(火)夕6時

所・寺田町・高松会館

兼題||始める・乾杯・銭・

妻

■菜の花句会

日・1月10日(木)夕6時

所・八尾神社内西郷会館

兼題||福引・挨拶・始まる

ジャンプ

■富柳会

日・1月10日(木)13時

所・滝谷不動産前房の家

兼題||社長・石・餅

■卯の花句会

日・1月17日(木)10時

所・高槻市民会館3階

兼題||飾り・正座・自由吟

■もくせい川柳会

日・1月21日(月)1時半

所・豊中市立中央公民館

兼題||新・笑う・自由吟

賀春

むらくも川柳会

藤	細	景	城	母	錦	大	榭	山	木
井	木	山	角	み	織	森	原	根	村
明	和	綾	鶏	ど	文	孝	秀	峰	は
朗	幸	美	生	り	子	華	子	雪	じ



# 本社 十二月句会

なにわ会館

七日・午後六時

なにわ会館最後の句会

阿萬萬的氏のおはなしは会津八一について。

『秋岬道人とも号し、漢字を排し、平仮名のみで歌を詠んだ会津八一の短歌観は私たちの川柳にも通するものがある。歌集『南京新唱』の自序に『探訪散策の時いつとはなく思い浮びしをいく度もくり返し口ずさみて、おのずから詠み据えたるもの、これ吾が歌なり』と記されている。また『歌は約束をもて詠むべからず、もし流行に順いて詠むべし』とならば、吾れまた歌を詠むべからず』とも書いて

いる。川柳の場合も、句は作るものではなく自然に生れるものでなくてはならぬ、人間陶冶の詩であり、自分の心の中から感じとったものを十七音字にしたものであるから、他人の真似て出来るものではない。会津八一の流行に順いて……の言葉はそのまま川柳にもあてはまると思う。』

今月の月間賞は宮口笛生氏が獲得。(史)

(進行) 柳宏子・天笑 (受付) 与呂志・重人 (記録) 射月芳・幸生

主席者 | 与呂志・満津子・道子・水客・紫

香・武庫坊・年代・白漢子・鬼遊・只士・覚然坊・英子・春蘭・柳伸・蕉露・雀踊子・三男・太茂津・幸・隆二・景子・重人・白水・勝美・はつ絵・いわゑ・金太・史好・狸村・三十四・喜風・あいき・泰子・恵美子・正坊・洋敏・勝晴・笛生・古都路・冬葉・英千子・凡九郎・規不風・頂留子・吸江・萬的・岳人・智子・久子・節子・度・楓葉・形水・白兔・美代子・寿子・射月芳・安藤寿美子・みつ子・悦郎・栗・幸生・吐来・天笑・月子・柳宏子・池田寿美子・洋子・寿美・文秋・薫風

## 席題「地下鉄」 河内天笑選

地下鉄を降りると雨が止んでいた  
 一日一善地下鉄の窓見ると  
 地下鉄も師走がすこし怖くなる  
 地下鉄が伸びてもぐらの和が崩れ  
 地下鉄の近くにマンション買いました  
 地下鉄を降りて黙々ただ歩く  
 地下鉄の客地下街を一廻り  
 地下鉄と高架つないで四季の風  
 ドラマ始まる地下鉄の階段で  
 朝の地下でそなない詰め込むの  
 地下鉄のシルバースーツは空いてない  
 地下鉄のライトにクモが這っている

美代子 水客 幸 覚然坊 月子 春蘭 春蘭 勝美 太茂津 勝晴 形水 英子

地下鉄の昼混みだして来た師走  
 栄転の地下鉄揉まれることに慣れ  
 長旅の終り地下鉄混んでいる

地下鉄の階段降りる冬の顔  
 地下鉄でうろろろしてる旅靴  
 地下鉄の路線バズルのように見え  
 地下鉄の階段ジョギングやと思  
 地下鉄の最終メモして飲みあるき  
 地下鉄の中にも夜と昼の顔  
 地下鉄を上って狐につままれる  
 地下鉄の迷路を急ぐ蟻の列  
 地下鉄で電気椅子など考える  
 地下鉄に雨を教える濡れた傘  
 お得意へ地下鉄で行く五十払い  
 上ってもまだ地下だった地下の駅  
 地下鉄を出てビジネスに続く路  
 最終のメトロ流れが軽くなる  
 地下鉄が高架になつて海に着く  
 大阪に住んで地下鉄乗り違え  
 逃げ道が地下鉄にある都会人  
 地下鉄を出て成程方向音痴です  
 御堂筋線だけを知ってる母の足  
 地下鉄で行けるところに墓地を買  
 地下鉄で矢印ばかり探している

白漢子 白漢子 水客 只士 正坊 洋敏 あいき 頂留子 射月芳 泰子 恵美子 白兔 幸生 金太 凡九郎 智子 寿子 安藤寿美子 紫香 水客 栗 洋敏 景子 天笑

## 席題「つつく」 笠原吸江選

ヒロインはまだ殺せない以下次号  
 低い屋根つづく故郷はあたたかし

萬的 はつ絵

負けが続いて亡母に似ている雲さがす  
足袋脱いでからも羨む愚痴つづく  
貧乏のつづきの軍手白く干す  
定年へ続くレールが敷いてある  
ええ加減にせえと言いたい以下次週  
俵せが続いて残す皿のめし  
前編の終りへつづく女下駄  
お隣のつづきの話ツワの花  
鬼瓦続く本家にある悩み  
愛情もつす味だからよく続き  
細々とつづくのれんの彩と艶  
影法師だけが続いて来る落ち目  
グリコ犯森永次はどこ狙う  
まだ続きそつで受話器の小さな嘘  
背伸びして浄土に続く道を選ぶ  
難民に明日へつづく道がない  
幸せがつづいて海へ出たくなり  
この仲がいつまで続く披露宴  
苦勞話がいつまで続く梅のつば  
ご先祖へ続くこころの灯を点す  
こんな僕の続編を待っている妻  
誰も見ぬバントマイムがまだ続く  
放たれる夢見続ける千羽鶴  
お互いの過去には触れず歩をつづけ  
ラーメンを食べて続ける長ばなし  
今日があしたに続いているとは限らない  
いつかきつと翔ぶ日のあたま垂れつづけ  
継ぎはぎのままでつづく夫婦独楽  
計がつづく諸行無常の風の中

年 代  
白 溪 子  
栗 生  
柳 宏 子  
英 子  
岳 人  
喜 風  
文 秋  
美 代 子  
三 男  
三 十 四  
景 子  
与 呂 志  
金 太  
道 子  
重 人  
幸  
鬼 遊  
白 兔  
太 茂 津  
三 男  
悦 郎  
只 士  
智 子  
は つ 絵  
節 子  
寿 美

夢とロマン男はドラマ追いつづけ  
続くまいと賭けをしたのが続いている  
毎朝の鏡に気合かけつづけ  
まだつづく話に欠伸かみころし  
だからの祝辞へビールの泡も消え  
フィクションでしたつづきは考える  
スラングが続き焼肉食べてくる  
むらさきの深さへ続く愛の詩  
減量が続け怒りっぽくなる  
続編は着いロマンで締めくくる  
レオタード続けて妻のブローション  
喜びがつづいてすこし莫迦になる  
雑談が続いて本筋はかどらず

兼題「銀河」

江 口

度 選

隆 二  
い わ ゑ  
満 津 子  
満 津 子  
柳 宏 子  
三 十 四  
月 子  
寿 子  
洋 敏  
寿 子  
恵 美 子  
は つ 絵  
吸 江

月冴えて銀河へ祈る水不足  
星くずを掬う銀河の渡し舟  
いらだちも涙も吸い込む冬銀河  
大根を漬けてあしたの銀河追う  
若い亡母銀河の一つになった筈  
銀河降りかかるとしゃべる冬木立  
星はソロ銀河は奏でるシンフォニー  
織姫の孫は銀河に橋かける  
ねんねこの温みの中にある銀河  
宝くじ当たる予感のする銀河  
人の世も銀河も破れない掟  
来年も逢う約束のある銀河  
饒舌の銀河嬉しい恋実る  
ふるさとの鉄橋長く銀河冴え  
織姫が銀河へ渡す帯を織る  
ラクダのこぶに夢がつめてある銀河

勝 美  
洋 子  
景 子  
岳 人  
美 代 子  
景 子  
楓 楽  
規 不 風  
岳 人  
久 子  
幸  
英 子  
吐 来  
み つ 子  
英 子  
白 兔

59年 月間賞杯 永久保持者

正本水客氏が連続獲得

59年本社旬会月間賞は

1月||英子、2月||栗、3月||はつ絵、  
4月||みつ子、5月||度、6月||狸村、  
7月||水客、8月||登志代、9月||隆二  
10月||規不風、11月||天笑、12月||笛生  
12名各1回となり、規定により兼席題天  
位獲得数の最も多い正本水客氏(6回)が  
59年永久保持者と決りました。



母の忌を憶えてくれていた銀河  
銀河系に危険な星あり地球とか  
冬の夜の銀河がぬくい灯をともし  
わらべ唄母の背中にある銀河  
木枯らしの夜は銀河もさんざめく

兼題「ふらふら」 神谷凡九郎選

相手みてふらふら腰が強くなる  
釣橋を初めて渡る足が揺れ  
ふらふらとゆれても達磨倒れない安藤寿美子  
下り坂ふらふら足が冷えてくる  
ふらふらと出れば達者な人はかり  
ふらふらと余生の虹を追っている  
ふらふらの父にふらふら従いてゆく  
ふらふらになると悟りが出来ますか  
ふらふらつと夜を出たがる裸ゼニ  
赤提灯ふらふらばくを呼んでいる  
ふらふらと行けば会えそなネオン街  
ふらふらに酔った彼女をどうしよう  
野良犬になれずふらふら軒伝う  
ふらふらと怖がる事をして逃げる  
ふらふらと風のにれない奴唄  
ふらふらとユタもさまようクリスマス  
ふらふらにされて相手が憎めない  
ふらふらと花の赤さに負けた罪  
ふらふらの打球が逆転のきっかけて  
ふらふらの靴で小さな円を画く

吐来  
洋敏  
笛生  
岳人  
度

墮駄  
晴彦  
幸  
久子  
吸江  
太茂津  
柳伸  
雀踊子  
美代子  
鬼遊  
頂留子  
天笑  
紫香  
悦郎  
規不風  
寿美  
幸  
規不風  
滋雀  
武庫坊  
美幸

生酔いの方がふらふらして歩き  
ふらふらした態度見ている女の眼  
ふらふらになっても走るノルマ表  
ふらふらに酔った男になだめられ  
ふらふらとその日の風に逆らわす安藤寿美子  
ふらふらと馬鹿になること知ってます  
ふらふらの男やさかいよう捨てん  
ふらふらになった私に気づかない  
ふらふらのゴールはやっぱり美談なの  
ふらふらと妻をめとったわけでない  
ふらふらにならねば友が罪になる  
ふらふらやからみん拍手をしてくれる弘生  
ふらふらと小便小僧に逢いに行く  
一本気ふらふらと人生観変えぬ  
連帯感ふらふらとして立ち上る  
ふらふらになたらアンタらしゅうなる

紫香  
水客  
道子  
天笑  
弘生  
美代子  
蕉露  
柳伸  
幸生  
太茂津  
規不風  
岳人  
水客  
凡九郎

兼題「松」 児島与呂志選

門松となつて芽出度き初春に立つ  
氏神の松も枯れたと同窓会  
さんなんも松葉にさして祝膳  
冬仕度松の添え木を確かめる  
風が出て松がお話しています  
童話読む松はつくりの落ちる音  
松毬を集めて子等と花むしろ  
雪つりの松のところで縛る繩  
それなりのいわれがあつて松切れず  
松の枝切つて人間思案する

病人の様に五葉松いたわれ  
大家さんの松が高塀から覗く  
松飾り付けて今年を締めくくる  
松活けて部屋真四角にひきしまり  
松喰虫人間の知恵笑うよう  
松の木が一ばん好きなおじいちゃん  
松伸びたままで屋敷が売りに出る  
我を張つて名松赤く枯れている  
老松が迎えてくれた小学校  
曲げられて鉢の小松に生くる意地  
しょうもない松も一緒に引越  
ベテランの庭師に任ず松の青  
若松は一直線に天を指す  
幸せが門松くぐるお正月  
借景の松も栄枯の風あたり

59年本社句会全出席者

福本英子・飯田悦郎・北勝美・桑原喜風  
山本規不風・笠原吸江・橋高薫風・玉置  
重人・黒川紫香・松下蕉露・岩本雀踊子  
長谷川春蘭・正本水客・板尾岳人・天崎  
只士・野村太茂津・河内天笑・藤田頂留  
子・稲葉冬葉・春城年代・小出智子・松  
原寿子・西出楓楽・神谷凡九郎・堀端三  
男・奥田みつ子・春城武庫坊・児島与呂  
志・津守柳伸・西田柳宏子・芳地狸村・  
江口度 (32名)

覚然坊  
春蘭  
春美  
楓楽  
文秋  
はつ絵  
天笑  
太茂津  
年代  
喜風  
月子  
笛生  
幸生  
狸村  
滋雀

決心も三日坊主の松の内

平和佳し初日に輝く城の松

松ぼっくり少年の詩がつまってる

植木師の齢には無理な松が延び

いつの世も松はめでたいことに触れ

松飾り取れば売場は雛の壇

街の子は松木腹で遊べない

射月芳

寿美

正坊

只士

道子

吸江

与呂志

兼題「平行」

野村太茂津選

平行に進むと男は戻れない

平行に逆らうすべはとうに捨て

駆引きにも平行線は崩れない

無言劇夫婦が平行線たどる

与呂志

与呂志

文秋

雀踊子

まほろばの柳宴へこそぞってお越しを

第9回 全日本川柳奈良大会

とき 昭和60年6月9日(日) 10時開場

ところ 奈良史跡文化センター

奈良市三条大路1丁目5-37

TEL 0742 (34) 9021

会費 2,000円(昼食・記念品つき)

各題二句・締切り正午

席題なし、欠席投句は辞退

★前日観光

6月8日(土)13時 近鉄奈良駅前集合

(行基噴水広場)

西大寺の大茶盛・薬師寺など

平行をゆくライバルと頼り合っ

平行の意見が真理衝いてくる

平行に行くから素顔のままにいる

平行線メンツ絡んでいるらしい

ブライドを保ち続ける平行線

おとことおんな平行棒の上にいる

素うどんが延びてもつづく平行論

愛知らぬ平行線が錆びている

触れ合うとシヨートしそうな平行線

平行を破る一喝まだ出ない

十字架を背負い平行線辿り

平行の中で絆が燃えてくる

平行線崩したつけを知っている

年代

重人

武庫坊

史好

柳伸

水客

狸村

幸

泰子

三十四

月子

只士

柳伸

★前夜祭

6月8日(土)18時-20時

奈良ホテル 奈良市高畑町一〇九六

TEL 0742 (26) 3300

会費 10,000円

宿泊 奈良ホテル

12,000円(一泊 朝食、税・

サービス料込み)

☆前夜祭・宿泊希望の方は、3月30日までに

申し込み用紙により、なるべく早く申し込

んで下さい。

〒631 奈良市学園南2丁目4の6

片岡つとむ

TEL 0742 (46) 9082

テレビシー平行線が乱れだす

暗睡にもならぬふたりは平行線

平行線交差するからもめている

平行線つづく二人へ気もめめる

平凡な平行線ですぐ飽きる

平行線を行くのはきつとライバルだ

平行の儘で女に逃げられる

平行のいらだち灰皿にたまる

家裁出てまだまだ続く平行線

お互いを見守りながら平行線

平行できて戸迷った曲り角

平行に辿れば渦が深くなる

平行線解ききつかけを見失い

平行を嫌う女が夜叉になる

平行線の真ん中辺にあるテーマ

人前では平行たもって居る二人

スタートは平行だった花の種

平行線にふんざりつけるのは女

平行線辿って深い闇に着く

平行線上で鳴り合う鈴ふたつ

平行を破ると傷を深くする

平行線の交わる地図を持つ二人

ライバルが平行線を消してくる

おだやかな口調で平行線たどる

英子

三男

柳宏子

満津子

滋雀

柳宏子

洋子

笛生

雀踊子

吸江

泰子

英子

寿子

吐来

只士

智子

あいき

いわゑ

天笑

金太

幸

洋子

幸

笛生

太茂津

(清記・楓染)

(訂正) 12月号76P「潮時を知って引退考える」の作者を勝美と訂正。





締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。  
作品は雅号も含めて20字まで。

整理・板尾岳人

わかあゆ川柳会

小砂 白汀報

シヤボン玉舞いたくなくて飛び上り  
梅雨入りを宣言したら雨が止み  
茶柱の立った東に雲がない  
動かぬと見せて雲あし貌をかえ  
黄金の穂波動かぬいわし雲  
折角の空へ落書き雲の馬鹿  
稲架にいる夫へ投げけるタイミン  
ロボットも人恋しくてネオン街  
シヤボン玉ロマンなトンボと戯れる  
以心伝心グッドタイミン  
天国へ昇る雲なら乗りたいと  
白旗を老いの依固地がまだ見せず  
ミサイルに酔った雲の千鳥足  
押し売りへタイミンかよいベルが鳴り  
祭笛聞こえてくるよ翳雲  
故郷の雲は茶漬けの味がする  
広島雲が薄れて怖くなる  
雲の私語ケルンはみんな知っている  
川柳ささやま 河原みの報  
静子

八方の囲みもとける愛の花  
大げさに囲い記念の木を植える  
寄せ鍋を囲んで飯囲すれて来る  
燃え尽きた焚火囲んでつづく愚痴  
木せい陰から和尚顔を出し  
応援のおっさん鉢巻締め直し  
蔭ながら応援すると女文字  
喜寿八十路主役が変る夫婦坂  
敗戦の坂繁栄へつづく道  
ボケる余地まだ見付からず喜寿の坂  
噛み合ぬ夫婦の地図は坂ばかり  
孤独には負けずモクセイ花盛り  
坂道に秋を拾って子が帰る  
いずも川柳会 板垣 草丘報  
散りながら花は未練の唄こぼす  
岐路いくつ越して年期の底光り  
日盛りをひと寝して待つ屋台ひき  
ストレスがたまり入歯が落ちつかず  
お盛んに遊んで認知のつけがくる  
荒行に堪えた年期の無精髭  
銅剣の緑青盛りをしのばせる  
夫婦酒ムードに六十路の唄がある  
ストレスに茶碗の割れる派手な音  
石うすを回しておぼえた母の唄  
道化師の想いがつのる飾り窓  
口笛に窓のカーテンちらりゆれ  
ストレスのはけ口好きな服を買い  
年期来る恩師の励み胸に抱く  
先ず窓を閉めて二人の別世界  
旅の連れ車窓に飽きぬ郷里なまり

きしゑ 久乃 文平 ゆう也 ひか平 和子 テル 越山 米朝 宗珠 素水 胡次郎 靖子 可住 文子 芳枝 代仕男 河南 夢醉 鐘堂 ちかし 多賀子 正江 きみえ 芙佐子 知恵子 満江 房子 清子 よし子  
閉ざされた心の窓に月あかり  
八頭身女盛りがはちきれる  
高原にストレスの種捨てに行く  
三重丸が飛んで帰った習字塾  
朱に染めた激戦の跡夢遠し  
灯がつくとどれも幸せそうな窓  
不発弾抱えストレス溜めている  
窓の灯へ一声高いやきいも屋  
庭木師の年期容赦のない鉄  
鋭さも年期重ねてきたまるみ  
黙々とうろくろは年期誇らない  
窓の虫初夜の睦言聞いている  
父となり初めて唄った子守唄  
童唄赤いトンボを連れて来る  
祝い唄漁夫はやはり海の唄  
東大の灯りが続く窓あかり  
ストレスが女の化粧派手にする  
浪人の窓の明りがまだ消えず  
愛枯れた花の盛りをふり返る  
墮ちてゆく女盛りの迷い道  
朱を入れる筆は個性を傷つけず  
お月さん窓から見る二人仲  
二度の職窓辺の固い椅子にかけ  
寝たきりの窓にはいつも空ばかり  
満月の窓に芒も活けられる  
還暦という人生の真盛り  
朱を少し足して気分が若返り  
長持ち唄嬉しい日なのに泣かされる  
スキヤンダル流して女盛りなり  
日曜日ひとり暮しの窓が開く  
窓口が固くてままにならぬコネ

律子 禎子 真紅 朱雲 孤呂二 町紅 明郎 正朗 芳子 独仙 桜水 昭二 孝湖 孝子 秀一 幸一郎 美磯 ファミ子 与根一 登美也 瓶底 はじめ 秀子 早苗 佐吉 裕

悲しいが訣れの窓は覗くまづ  
朱に染まる夕陽の夫婦播き終る  
還暦の朱塗りの盃は高く上げ  
花よ蝶よと貢ぎ盛りを嫁にやり  
影ぼっしお前もあつた花盛り

川柳わかやま

堀端

文化発祥語り継がれていく心  
楽園かも知れぬ文化果つる国  
飢えと闇知らぬ文化に酔うている  
文化煎茶も足腰がやつとです  
能面を取ればこんな深い疵  
王様も深いいたみを持つている  
本当の自分が見える深い闇  
きつちりとしすぎて溝が深くなる  
抜け出せぬ深みで良心取り戻す  
深追いはしない女の意地がある  
深刻な話となれば逃げる癖  
天辺の柿が冷気を深くする  
せめて余生は妻と仲良くしておこ  
肩書の一つ残しておく余生  
嫌われる余生一言多すぎる  
今の苦労は余生のためにしておこ  
身辺整理余生を少し軽くする  
嬰鏢とゲートボールに行く余生  
どん欲に生きて余生を謳歌する  
現実をしかと受けとめ余生行く  
神様に任せた余生に欲が出る  
何が余生だ大切な日々なんだ  
バイブルにすべてを任せきる余生  
夢のない男の軒高すぎる  
残り布小ぢやな夢が生まれます

三男報

秋峰 功美 好美 三女 三代 正子 栄美子 信秋 和子 芳朗 狂虎 弘生 紀久子 稚代 凡太 裕美 幸 輝子 正博 照子 年代 天彦 公子 紀美女 千寿子 凡九郎 白光子 武雄 信子

夢のない男の話に欠伸出る  
カラカラと笑える様な夢を抱く  
男一匹妻にも言えぬ夢がある  
サヨナラの夢は本当かも知れぬ  
夢かけた子に背かれる土嫌い  
ちっけな夫婦の夢を聞くみかん  
一粒の種から夢を生む  
笑うまいこぼれる夢の砂粒を  
嘘吐かぬ花に余生を導かれ  
夢消されけに余女耐えて行く  
親と子の夢が微妙に食い違つ  
川柳塔米子きゃら木 石垣  
弥次郎兵衛天下の秋へ揺れ動き  
フラフラと天女について行つたまま  
脅迫へ天使のえくぼ凍りつき  
天までも離さぬ風の糸にきる  
迷い道五官に響く天の鈴  
スリッパで朝の病院動き出す  
突然の事態に動く母のカン  
今日迄を生きて飽かない秋の天  
天にだけ忠誠誓う葱坊主  
動く目に人の心がすきとおり  
ここからは天に委せて渡る川  
草むらに天馬の羽根が落ちている  
一周りレー肥満の足よひるむなよ  
天の恵み静かに熟れる果実有り  
月は天樹はことごとく懺悔する  
若者の掃郷で村が動き出す  
天の声聞いて伸び出す豆の蔓

京都塔の会

松川

克子 雀踊子 忠雄 英子 豊太 緑良 光代 康勝 桂香 三男 花子報 八重子 日枝子 時子 伊都 寿美子 花子 千春 富枝 みどり 田鶴 晶子 玲子 瑞枝 なみ 朗子 千代 純子 とも子

杜的報

涙壺一人になって溢れだし  
子も孫も墓前に集う彼岸花  
橋渡るとこまでは来た赤とんぼ  
秋の雲と一緒に旅がしてみたい  
タイムミングの悪いお世辞を二回言う  
まつり笛少女の髪と秋の風  
大仏は入口だけしか知らぬ鹿  
飛火野の鹿に心を撫でられる  
ホス鹿も角を伐られてしよげかえる  
みやしろの鹿は静かに威厳もつ  
観光の鹿に哀しい角である  
思春期の少女劣わるコスモスよ  
コスモスの揺れから優しさを貰う  
コスモスの背丈でゆれる幼い日  
捕われてなお群れに居る小安心  
安心が見えて群れがぬけられぬ  
鳥葬を欲するけもの群れも飢え  
愛の矢を射てば当りそう人の群れ  
先頭が曲れば曲る蟻の列  
旗振りが好きて群衆に押し出され

花代子 紫香 春江 求芽 冬葉 白溪子 紅葉 三求 笛珠 はつ絵 冬子 水客 葉子 弘生 年代 和村 花村 杜的 武庫坊



老い一人ベンチで気兼ねのない欠伸  
川柳藤井寺  
赤木 和子報 芳子

終着駅雪崩のように客を吐き  
いい人は噂を捨てて術を知る  
わが老後流れる雲に聞うてみる  
秋の味宅配便で送られる  
皇室の冗談聞いてみたくなる  
境界の隣柿が気にかかり  
愛に溺れ愛に渴いたりトマス紙  
実らない人生ながら積木積む  
一期一会無限の中のひと駒に  
ふるりの香が匂う柿届く  
ベルバラも散るときあるさ秋だもの  
姑の愚痴いつも仏間にきめている  
コスモスの揺れるに合わせ首振る子  
冗談を言い合う仲にやつとなり  
中ノ海恋しと蛭チユチュと泣く  
親バカのサンプル並ぶ運動会  
答まで教えぬロボット言いきかせ  
実り過ぎ早や減反の声を聞く  
中流の妻はバイトで世間並み  
おかしくもないのに笑わねばならず  
ふところも実り農協旅に出る  
犬の日や愛の実りの祝い帯  
冗談を真に受けるほど愛して  
見殺しにして一輪の花手向け  
冗談の通じぬ相手座がしらせ  
会者定離せめて実りの多い日々  
川柳はびきの  
塩満  
秋祭り宿の女中も浮かれてる  
中年はサンドイッチのハムの役

喜代志  
与呂志  
つや  
律子  
美恵子  
清心  
美代子  
治子  
吸江  
作秀  
みのも  
繁男  
伴雄  
麻美  
雅美  
正人  
末一  
たかし  
秋園  
本蔭棒  
昭子  
ふさ  
和美  
一屯  
志津  
和子  
繁敏  
敏報  
司男

気がつけば地球の外に遊泳す  
草の根が反戦デーを盛り上げる  
松茸の寝言人間ケチだなあ  
コスモスをいたわり乍ら風が吹く  
たらし舟漕いで人生潮かぶる  
風船に便りをつめて飛ばしたい  
彼岸花ヌード姿で咲き競う  
紅の緒を少しゆるめるそれも愛  
鯛雲夫婦でのぞく市場籠  
終電に傷かばい合うふたり連れ  
黄に赤に染まる山中バス走り  
丁寧な妻を悪友持て余し  
午前様天の岩戸をたたく音  
三千院なる程静かな京の雨  
その言葉あれは誤解をせず済み  
言い足りぬ程でよかった流れ星  
知らんまに値引きされた男たち  
美人に見とれたかドアにぶつかり  
誤解とけ妻の明るい笑顔見る  
バーゲンで赤の他人とベアールック  
へそくりを貸した事から誤解され  
誤解だともう別れた薄情者  
美しき誤解のままに卒業す  
蹴破つて入るドアは只ならず  
八つ当たりしてはるドアのえらい音  
メロドラマ回転ドアはすれ違い  
値引した目玉商品だけ売れる  
この人がハートのドアをあけたのね  
電車賃だけでも値引き食い下がり  
チームの和日本一の鯉になり

末一  
みつる  
み谷義一  
伴子  
忠宏  
律子  
昇美  
胡村隆  
喜代子  
只士  
美代子  
白水  
隆二  
吐来  
与呂志  
千代子  
清二  
泰子  
葉子  
多和子  
弘子  
蛙声  
一屯  
重樹  
石橋義一  
淑子  
昭子  
敏報

白昼夢さめてむない秋日和白  
白無垢に女の夢を秘めて嫁く  
エリートに育てて親の夢破れ  
神棚に夢を願うたくじの札  
曼珠沙華実りの秋の簪めき  
シャボン玉の消えるさだめの夢を追う  
だんだんに万年床で窄む夢  
夢にみた亡夫の笑顔は金釘  
川柳高知  
川竹  
松風報  
紅葉  
絹子  
翠記  
節子  
よし津  
房たす子

Y・F・C 句会  
人見 翠記報  
敏報

白昼夢さめてむない秋日和白  
白無垢に女の夢を秘めて嫁く  
エリートに育てて親の夢破れ  
神棚に夢を願うたくじの札  
曼珠沙華実りの秋の簪めき  
シャボン玉の消えるさだめの夢を追う  
だんだんに万年床で窄む夢  
夢にみた亡夫の笑顔は金釘  
川柳高知  
川竹  
松風報  
紅葉  
絹子  
翠記  
節子  
よし津  
房たす子

回りに鹿下を鬼が回って眠れない  
遅刻した足を廊下にとがめられ  
廊下ない部屋の狭さが身にしみる  
拭き込んだ廊下旧家の重み知る  
廊下から秋の陽もろう神無月  
愛の終曲長い廊下を振りかえる  
廊下まで煩い姑の声しきり

恒松 叮紅報  
雄々  
愚童  
春梢  
秀子  
ちかし  
早苗  
翠星

磨かれた廊下をひそと白い足袋  
しすしす廊下を渡る仏たち  
退職し光った廊下ほめる母

先生の足跡があるこの廊下  
相部屋と調子が合わぬ下戸の旅  
初夢や万里の長城一人旅

旅の宿ハツと振りむく過去の人  
六十路越え旅の楽しさやと知り  
鈍行の旅にドラマが落ちていく

くつろいで我が家の風呂へ旅を脱ぎ  
ほころびの衣が悲しい旅の僧  
昨日の絵から旅立ちたい秋の風

山頭火時雨に果てぬ旅の笠  
宇宙への旅も女が舞い上る  
旅らしく妻のベースに乗っている

回転の速さ噂をまく女  
回転をして得意げな孫の顔  
祈る子の手かくらびたつ千羽鶴

「祈りの火」北方領土は霧深し  
握り寿司かくれたワサビにしてやられ  
寿司一つつまんで話題かえてみる

艶やかな小唄が洩れる京の路地  
ご返盃ほんのり艶のある仕草

満江

昭二

静江

荒介

壮樹

鶴丸

みどり

みつこ

通児

孝華

渡

寿美子

多賀子

友子

孤呂二

芳枝

正江

鳳人

代仕男

千代

きみえ

由郎

芳子

正朗

瑞枝

与根一

巡歩

艶聞が好きなおんなのぬき衣紋  
ほつれ毛をあげる指にも艶こぼれ  
艶っぽい話に耳が動き出す

艶の艶まだそれ程に枯れない  
妻ある日艶やかに見え恐くない  
ゲートボール互いに顔の艶をほめ

花よ花艶のあるうち恋をせよ  
茶單筥に母の苦勞が艶をまし  
潮時を見て席はずすお仲人

触れあつた胸に満ちくる潮がある  
古里はよし潮鳴りの子守唄  
人生の折り返し点潮が引く

宿に來て心決まらず潮の音  
勸忍袋破る潮時待っている  
赤潮も遊覧船で見て帰る

潮待ちの男へ間遠うな津輕三味  
黒潮にロマンをのせて海の唄  
フィナーレは座唄線出の花吹雪

花屋さん半端な花を添えてくれ  
満開は嫌よ散るのを待つなんて  
雑草と呼ぶにはおしい花をつけ

訪れる人なき日々を花と住む  
花の泣く声を知つてる花ばさみ  
忌が巡る母が仏の花を買つ

坪庭に咲かせ仏へ花が足り  
四季の花色紙に残し秋を逝く  
いつまでも心にひそと咲かず花

人柄の透む師匠の句集読む  
終演を盛り上げさせて舞つ師匠  
叱られた師匠を偲ぶ舞扇

舞の手を口三味線で師匠見せ

年代

はつ絵

武庫坊

静江

冬葉

いさむ

秀男

鬼遊

鏝太郎

メ女

正朗

和友

志三郎

と おる

水客

求芽

梅風

花村

凡九郎

一 郎

もも子

柳影

雀踊子

白漢子

堀江芳子

河瀬芳子

あき子

裏芸も教えてくれるいい師匠  
酔う程に師匠は故郷の唄が好き  
正座して師匠破門を言いわたす

隅つこの弟子にも師匠氣を配り  
舞扇持てば井上八千代かな  
花活けて花の師匠が安らぐ日

尼崎いくしま川柳会 角野かず子報

金貨した方が集金させられる  
親を恋う小犬に一晚中泣かれ  
軽い紙重みに耐えて今日生きる

よくできた兄の机に座らされ  
お願いはたつた一つの千羽鶴  
今書いて捨てた紙屑かきまわし

和紙の里はなれて遊ぶ紙人形

杜的

鼓城

笑雪

みつる

惠美子

紫香

歌子

定人

静江

玉子

弘生

誠一郎

かすみ

佳句地10選 (前月号から)

植村客遊子選

夏ばての奥目をさらにおし込ませ 柳五郎

池に鯉入れて孫待つ夏休み 芳子

サインペン女は妻になり切れぬ 可住

松茸の誇りが四季へ妥協せぬ 英子

長続き夫婦どちらも耐えている 智子

敵のないお人で内緒が通じない 求芽

愛すべし上手にさんま焼くおんな 鬼遊

当り前の事しただけと取り合わず 白漢子

やる事がいっぱい妻も子も達者 静水

止り木を一つ譲つて打ち解ける 紫香



筆跡は右肩上り父の文

ごみ袋町の噂もつめてある

みかん箱を机に書いた私小説

年寄りに合わすわが家の水加減

孫娘ボンセット肩に拗ぬている

幸せの水が寄せてる新所帯

来年はうまく書こうと筆にいう

あるときは命紙より軽くなる

カラフルな花も見あきてすすきほめ

ある日ふと冷凍庫が怖くなる

定年の顔を机は知っている

ゴザ敷いて小菊でご馳走おままこと

西日差す机で暗示かけられる

文机は女ごころを知っている

北向きの机本音を書きたがる

水枯れた花はむかしを秘めたまま

陽のあたる地蔵が好きな赤とんぼ

娘似の孫が一番かしこそつ

瀬戸の海眠ったように生きている

父と子の体操いきが合っている

名講義メモ取り続け眠気なし

目録を書くしあわせな筆を持つ

この婆と寝たがる孫が四人いる

悪筆は悪筆らしい走り書き

座りだこ女の勘をみくびるな

ある決意机の上を拭いている

日々好日嫁がふと筆を干している

舗装したモータープールに虫すだく

虎でさえた火の輪くぐるもエサの為

巨木には巨木に堪える風が吹く

一郎

良征

牧郎

はじ芽

伊三郎

君子

かず子

美智子

貞子

年代

ときお

すえ

幸子

春子

礼子

佳秋

正一

墮駄

すむ

常子

幸次郎

玲

みち子

伊升

晴子

栄一

水声

美代子

保蔵

紫香

小春日を浴びて友情温める

お言葉があつてそれから負けを知り

花言葉集じて少女夢を抱き

賞めことは裏に潜んだ含み針

パイプにことばは神と言う教え

表情と違う本音を信じよう

よだけける表情手話の手がはずむ

友情の仮面表にした悪魔

も言わぬ背中大きく見える父

秋深く妻に内緒で読むポルノ

ほろほろの辞書は私の知恵袋

雑踏を抜けると知らない風に逢い

七五三父母の果たせぬ夢を込め

惜別は太子が消えた小さい札

新旧が仲よく入っているサイフ

十二月誰も助けに来てくれぬ

親離れ何の未練もないつばさ

南大阪川柳会

トリックとわかつていても迫るもの

迫力が無言の父の背にある

迫力があると正論らしくなり

迫力がほしくてペーとペンを聞く

迫力に心の隙を覗かれる

不発弾の迫力抵抗はもうしない

菊りよし友がいてよく秋の酒

菊生けて独りの刻を寒くかり

独りの朝へ雨傘の柄の曲がり

桔梗一輪一人の部屋を独りにす

奉加帳だすと独りにしてくれる

ひとりごと言つて独りでよく遊び

寿美子

楽天

ひで

甘平

白光子

狸村

こう

幸代

武助

礼子

勝晴

さよ子

笑痴

希久志

ゆづる

富志子

射月芳

操子

文秋

浩一郎

公一

智子

久子

眉水

楓楽

真砂

白兎

洋子

庸度

庸佑

ひとりならきつと明日は来ぬだろう

一人走りだすと群集が走る

ひとりふたり忽ち都会の朝となる

独り者しめつた煎餅たべている

風船の中はやさしい母の息

国境の空風船の知らぬこと

風船の道づれになる白い雲

アーケード風船一つ迷うてる

上るだけ上った風船どうなるの

紙風船貰つて昔と遊んでる

風船も女の夢も破れ易き

風船にふくらむ夢を掛け過ぎて

賑やかな話が好きな紙風船

減らず口笑つて許そう母だから

形振りな構わぬ女の減らず口

減らず口なきが判る河内弁

一本気意地でも通す減らず口

減らず口叩いてこっそり席を抜け

叩かれて叩いて子等の減らず口

へらず口漫画の中で寝てしまい

老いて尚花も実もある減らず口

減らず口言わねば彼もよい男

本番の視線の中に敵がいる

本番に強い男が持つドラマ

消火器ですむ本番を信じよう

本番に成程という幅がある

本番はみんなの顔も見えぬまま

もくみん川柳会

散る前にもえるだけもえ山紅葉

散つた子の七つ鈕が隅に寝る

妙子

綾珠

雅風

只士

恒明

頂留子

慶三

春蘭

凡子

寿美

喜美子

柳伸

芙佐女

悦郎

重人

晴風

覚然坊

善信

千代三

円女

章久

雀踊子

柳宏子

滋雀

凡九郎

勝美

正坊報

英子

明隆

あくせくと生きた娘は散り急ぎ  
 気が散ってあかんとこへ出てしまっ  
 あくせくと築いた暖簾を子は継がず  
 あくせくと一人でしゃべり電話切る  
 あくせくとしない夫婦で肥えている  
 あくせくの果ての音なる除夜の鐘  
 十円をボイと家族の無事息災  
 極楽の入園願書は未だ早い  
 欲深い願いに神様呆れはて  
 一願の地藏の前に立ち迷い  
 子の嫁と三人で行く嫁の里  
 気がつけば僕もどうやら粗大ゴミ  
 山茶花が咲くとあなたの誕生日  
 そうだろそうそうですわねと仲がよい  
 太子様やっぱり貴方がたのもしい  
 手を振った人は味方の数にする

翠洋会

中西兼治郎報

富子 寿美子 慶子 賀代 美幸 蕪風 房子 武庫坊 正坊 美祢子 よし子 博史 きく子 登志美 しず 紫香 いつを 綾子 光子 照子 宏子 良江 為子 風童 登志実 みつ子 兼治郎 鬼遊 福子 明報

許されて晴れて出て来た死刑囚  
 共稼ぎ皿も洗って注ぐ愛  
 裁ち切れぬ絆に引かれ許す親  
 再会におにぎり寿司を皿に盛り  
 許されぬ罪の数々白き画布  
 睦まじい仲は母の大きな温い  
 子を許す父母の大きな涙つば  
 知らん顔すれば向うも知らん顔  
 泣きやまぬ孫を笑わす百面相  
 こんがりと焼いてすねてる夫婦仲  
 保育園鈴を鳴らして笑いこけ  
 育つ子の皿まで食べると思う程  
 月の宵若い昔の物思い  
 満月も欠けねばならぬさだめ持ち  
 辛くとも笑顔を見せて母強し  
 久し振り立場が違ふ知らん顔  
 値段だけ聞いて松茸見て帰り  
 招かれて松茸狩りに親子連れ  
 被災地を冷たく照らすお月さん  
 招かれて松茸飯に舌つづみ  
 残業を終えて月夜のベダル踏む  
 月世界ロマンを科学が傷つける  
 おみこしをかつぐ子鉢巻威勢よし  
 阿波踊り真上の月は忘れられぬ  
 皿割った嫁とわかつて知らん顔  
 赤ちゃんの笑顔がすごく美しい  
 考古学こわれた皿を大事がり  
 食欲のおしゃべり急ぐ皿の湯気  
 皿二つから生きぬいて孫ひ孫  
 平凡に生きて仲よい共白髪  
 母の目はもう許してのお茶を注ぐ

峰雪 是る代 吉野 マサコ はじめ 秀子 みどり 千里 ふみ女 孝華 なつえ 百代 蚊声 ゆき子 よし美 武衛 克子 幸子 巡歩 章子 三喜子 清祥 さち子 登美也 竹乃 雪路 林蔵 喜代美 芳子 鶏生 正朗

昭和59年度大阪文化祭

川柳大会川柳賞受賞句

席題「皿」 小出 智子選  
 大きな皿ですお父さんは不在です  
 北川アキラ

席題「踏む」 山本 翠公選  
 本塁のベースは踏めぬ冬の陣 島崎 信子

宿題「時事雑詠」 柏原幻四郎選  
 神々よ地球はひどく病んでます  
 神前 朋義

宿題「或る日」 久保田元紀選  
 後継者ある日布団の中で決め 中島 正次

宿題「亀裂」 神前 阿字選  
 亀裂は亀裂として風呂の湯を沸かす  
 岩井 三窓

宿題「美」 定金 冬二選  
 夕鶴をさがす二人は旅に在る 鍋島 十歩

宿題「ころ」 岩井 三窓選  
 食べたらず死ぬと書いた心は何だろう  
 中尾 漢介

宿題「顔」 野村太茂津選  
 死ぬときの顔は大事にとつてある  
 有友 童子



知らん顔してその次を聞いておく  
川柳ねやがわ 高田 博泉報

明 朗  
サヨ子

ゆっくりとしなはれ時間未だおます  
棚ぼたの財産鼠よつてくる  
憂さ晴らす手段女の衝動買  
喧嘩してあとでゆっくり考える  
いつ咲いていつ散る花か無人駅  
腹に一もつゆつくりと帯を締め

覚然坊  
亜也子  
英壬子  
亜純  
鼓城  
小路

因縁と割り切った顔にホッとする  
因縁の話がこわい絵巻物  
会合に遅刻せぬので役がつき  
花の種データ通りの花咲かず  
隣から朝のデータがノックする  
逃げ腰で何でも反対する男  
因縁を説いて事なかれ主義の寺  
石橋を渡るデータが多すぎる  
浮足を見せる駆引だつてある  
美女つくるデータだけど字が拙い  
袋小路古い人情生きてる  
極楽の指定席今から予約する  
因縁か何とはなしに金婚式  
浮足の背中をライバル刺しにくる  
浮足の歩幅を悪魔攻めたがる  
浮足が愛想に負けて腰据える  
ゆつくりは出来ぬ三人姉妹です  
頂上にまだまだ高い空があり  
募金箱抱いて苦勞を知りました  
データに追いつけられ靴の紐  
気短な男がゆつくり話しかけ  
へソクリが花びんの中で独り言  
叱られた娘のプランクが揺れている  
靴の底今日のデータ一刻み込む  
ゆつくりと寝さしてもらう日曜日  
データを信じてサイは投げられる  
同じ傷持ったときから血が通う

明 朗  
サヨ子  
創 吾  
君 子  
春 子  
まさお

おみくじを結び見上げる青い空  
母さんが結んでくれる蝶結び  
結んで開いて舌つたらずの声が行く  
結ばれたはずの縁がほどけそう  
結ばれぬ恋など一つしてみたくし  
ネクタイを結んであげた日もかすみ  
愛のかたち帯を結んでいる少女  
苦勞など言わぬ形見のつづれ帯

勝 子  
奏 月  
ふ み  
いく子  
妙 子  
好 子  
節 子

二兎を追いぬらい外れた狐を悔い  
蝶々をねらう子猫の目が丸い  
実弾をこめてぬらいは外さない  
国立をねらう子の夢親のエゴ  
一か八かねらうて火中の栗ひろう  
金的をねらう吹き矢を手入れする  
的狙う弦に雑念等は無  
ねらいうちさされても座つてみたい椅子  
金メダルねらう期待が重すぎる  
まかされた幹事が先に酔つて  
まかされて責任感を強くする  
ピンチ切り抜けるたんびに強くなる  
北浜でもうピンチですわと投げる株  
食卓の淋しさピンチのはねかえり  
家計簿のピンチへ子供食べ盛り  
台所嫁にまかしてフルムーン  
能力は言わず東大狙わせる

川柳ペン皿  
鈴木 節子報

明 朗  
麗 水  
美 子  
弘 生  
眉 水  
勝 美  
よしひろ  
求 芽  
鉦 平  
晴 風  
シマ子  
まさお

美容院隣の頭盗み見る  
良く切れる頭で欲しい人情味  
髪型を変えて頭で返さえり  
てる坊主頭を下げて詫びている  
へそくりを詐欺に取られた主婦の欲  
口頭でよい報告に落し穴  
愛おしみどは漬主婦の味をもち  
主婦の座を捨ててはステアに徹しきり  
主婦やめてたまには蒸発してみたい  
モテル嬢市場で主婦の顔でいる  
消防車留守の我が家に胸さわぎ  
冷奴 手抜きにあらず妻は留守

吉 川 寿美報  
文 子  
昭 子  
恭 子  
美代子  
白 水  
弘 子  
シメ子  
敏 子  
和 子  
淑 子  
道 子  
寿 美  
右 近  
勝 美

老花防止投句に心はせて居る  
炉にこもり世間にくとくなる計り  
朝早く妻の耕作座して見る  
欠席と書いて言訳考える

東大阪川柳同好会 齊藤三十四報

明 朗  
麗 水  
美 子  
弘 生  
眉 水  
勝 美  
よしひろ  
求 芽  
鉦 平  
晴 風  
シマ子  
まさお

城北川柳会 神夏磯道子報

明 朗  
麗 水  
美 子  
弘 生  
眉 水  
勝 美  
よしひろ  
求 芽  
鉦 平  
晴 風  
シマ子  
まさお

柳 影  
慶 三  
千代子  
柳宏子  
覚然坊  
良 京  
孤 舟  
綾 珠  
柳宏子

城北川柳会 神夏磯道子報

明 朗  
麗 水  
美 子  
弘 生  
眉 水  
勝 美  
よしひろ  
求 芽  
鉦 平  
晴 風  
シマ子  
まさお

喜 風  
美 子  
三十四  
春 蘭  
頂留子  
右 近  
公 一

柳 影  
慶 三  
千代子  
柳宏子  
覚然坊  
良 京  
孤 舟  
綾 珠  
柳宏子

帯止めのヒスイの色に母想う

心には言訳もあり涙あり

親子だが金のけじめはつて置く

我が道を生きて受賞の幸二つ

飽きの来ぬ日々の暮しの砂時計

百獣の王は王者の躰する

良い事があって日暮の早いこと

死で償う言訳悲しい記事を見る

言訳に親類次々殺される

路地裏に照る満月は慈悲の色

言訳が通り仰いだ青い空

言訳を妻の勤は的中

川下の人橋の人手を振りぬ

言訳をすればする程疑われ

ジャンケンでけじめの勝負昔から

言訳に行つて茶葉子をすすめられ

姑のけじめに学ぶ事多し

いずれ地に還る炎えてる紅葉の朱

昔程けじめを知らぬ子の暮し

此の辺でけじめ番茶が冷えて来る

新婚の嫁に家風のけじめつけ

どちらのパンツでも良いと老夫婦

敵一人増して靴紐締め直す

定年にけじめをつけて折返し

もらわれた仔犬を思う冬の月

主婦業の五時には趣味のベンを置く

言訳をしない男がたのもし

言訳に嘘と本当がからみ合う

父権天権親しい仲に持つけじめ

門迄も送つて呉れる人が出来

けじめつけ過ぎて冷たい人にされ

八重

重彦

公一

繁子

ただし

登志代

婦美子

静子

綾珠

達子

倫子

悟郎

節郎

麻黄

午郎

悦子

ふみ

右近

茂一郎

答風

正之

新一郎

山久

星斗

道子

千賀子

達一郎

テルミ

満津子

仙吉郎

弘生

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

故郷の海に余生の船を止め

傍目には他人の余生甘く見え

のはほんど年金ぐらしにボケがくる

すばらしい余生が妻と送れそつ

余生にも一花咲かす意地があり

限りある余生小さな善を積む

ぼけたのもほけぬも余生長すぎる

健康と趣味が余生の杖となる

戦犯の余生仏間に灯を点す

好きなこととして暮せよと子がはなれ

好きように成ると余生気にかげず

残照の輝く余生送りたし

生き甲斐をくれた余生に趣味があり

五十年不作同土が添い遂げる

生き甲斐が余生を満たす村の守り

農一途働くだけの余生もち

若き日の罪を背負うて余生の灯

舞扇余生は好みの色に染め

川柳たけはら 森井 蒼居報

おつきさまちえのあとからつてくる

まほうがつかえたらいいな

うんどうかいおはなおつけておどたよ

あきみといっしょにはしてはるみが二ばん

きりんさんおくびがながくてやくにたつ

運動会おにぎりいっぱい食べました

指切りをして約束が重くなる

この道は明日への道と信じよう

廃品の回収六時に起こされる

弟の走る姿がマンガめき

繁代

八太郎

道子

弘朗

一心

亮二

吉朗

柳風

文子

弘生

康子

佳女

梅朗

高代

ミヤ子

川楽

孝美

ゆり子

節子

三歳千枝

四歳昌之

小一あきみ

小一はるみ

小二裕子

小四純平

小三方昭

中一仁昭

小五亜貴子

中一恵子

アップシューズ私のファイトを知っている 中三 紀

注文が相次ぐ写真の出来ぐあい 高三 愛

監督が宙に舞つてる紙吹雪

蟠螂よこれからどつてる秋の風

運動に逆らひサイコロ振り直す

華展への夢ふくらんでくる紅葉

償いを未だに抱いた男紋

本物のキリン見て来たキリンの絵

疑問符を一つ捨てると一つ古い

鳥暮し忍の一字を教えられ

吹き溜り落葉は恋を語り合ひ

ちっけな私に二人の子の重み

ときめきが大きくなりぬ駅にたつ

ご苦労さん妻よ宝をありがとつ

子の部屋に貼紙ホッホやる気だな

俄雨真赤な傘を借りて来る

つまずいた小石の重さをふと思ひ

田の貌の一つ一つに秋の彩

待ちぼうけものの哀れを受け止める

引越しの荷物をはどく旅の果

何気ないこと喜ばれ喜ばれ

サークル檸檬 田形 美緒報

暇があるに見えて役員押しつける

暇があるようなないよな昨日今日

もの言わぬぬにまぎれてひまつぶす

浪人期余暇を満たすに本の虫

ライバルに手の内見せた日の不覚

暇ひまのモチーフつなぐこたつ掛け

念願の暇のある身をもてあまし

亡母の手の温もり沁みるちゃんちゃんこ

子等を打つ手より心に痛みあり

静水

房水

こうじ

敬子

洋之祐

蘭幸

菁居

節夫

笑子

比呂子

鈍舟

狐

淑子

貞子

美佐雄

一路

令子

博子

シゲコ

雅子

千代女

千代

知恵子

久子

泰子

美子

三四子

美緒



憎んでた人の手術に手を合わす  
膝に手を置いて負けは明白だ

川柳泉尾

吉川

磯の月芝居の台詞もっている  
夕立て月もやっぱり涼しそう

ロケットに月の裏までのぞかれる  
敬老日夫婦茶碗が増えてゆく

敬老会おれには早い六十歳  
年輪の深さを包む敬老会

彼岸花地獄極楽知った顔  
彼岸会に友から写経が届きます

彼岸にも逢いに来るわと墓を撫で  
彼岸花善人浄土へ手をかざす

仏壇のちらしが入る彼岸前  
あの人の名前も経木に書いて秋

敬老の日の補聴器がよくきこえ  
おーエスケー川柳会

お菓子の時間秘書のスケジュール  
中将湯母の匂いでほろ苦い

凡骨に今更書くこと何もない  
週刊誌に飽き田園未だ続く

会長室富山の袋がぶら下り  
悪筆を言訳にする筆無精

電話では言えず手紙で書いてくる  
週刊誌きわどい線で売れている

ストレスの捌け口として書く日記  
川柳泉尾

色あせたハッピでよし祭好き  
祭から祭で稼ぐ屋台店

みちのくの祭も組んで周遊券  
町内のふれ合い結ぶ山車を引く

惠 薫風  
シメ子

カツ子

多和子

恭子

葉子

淑子

律子

文子

美代子

昭子

景子

寿美

形水

有一

聖地

聖地

聖地

隣村のみこしもかつぐ青春譜  
残り福あとの祭にありました

祭笛月の雫もみてしまひ  
頭痛薬もお供している旅かばん

悪女との出会い求めて旅に出る  
旅終えて暗き部屋を開け放つ

長旅の帰りはバスも重くなり  
生中継会議員の生あくび

酸欠のあくびではない倦怠期  
菜の花句会

トーストが焼けるとドラマの幕があく  
天と地をロマンチックにしたモデル

百までは生きているつもり竹を踏み  
明日の日を信じて越える水たまり

約束を本気で聞かぬ妻という  
茶碗一つ投げて我が家の劇終る

どん底で明日を信じた詩をもつ  
大臣の素顔が好きな花鏡

馬鹿になる薬をのんで生きている  
日銭追う手のひらにある明日

デザインはモデルと同じ筈なのに  
PTAの役員の子が劇に出る

たえて来た母に明日があたたかい  
約束を守れなかった玉手箱

熱いコーヒで生きている思いが湧いてくる  
赤いリングひとつ持っているモデル

まっすぐに生きている小さな碑を残す  
約束はないが一本つけてある

花の頃花のお山で逢う事に  
悪いこと考えながら生きている

つた紅葉むかしむかしを話そうか  
菜の花句会

高杉 鬼遊報

白水

淑子

美代子

シメ子

敏

弘子

カツ子

多和子

寿美

武庫坊

悦郎

一

美与子

みつる

昭子

柳宏子

章

禁煙の約束五日目の漫画  
しんみりと別れ話を紅葉聞く

大臣の椅子は派閥の弥次郎兵衛  
尾浜川柳会

長男が灰までおれのものと言う  
爪切りにお伽斬をのせてやり

漬物の味その腕をもちろてる  
ガンジは灰になるまで公表し

山車曳く子夜店の方が気にかかり  
示唆してはならぬ社長の昼下り

補聴器を外せば風がやわらかい  
飾り気がなくて気さくなお人柄

外陣にじつと我慢のわき仏  
松茸が買うてみろよと香りまく

ルンルンがマネキンの服買ってゆき  
塀の外へちま逃げ出し拗ねている

塀のある家には住めぬ葱坊主  
着飾るとまことしやかに嘘をつく

サロンのパスの匂いの残る蒲団干す  
気の弱い与作の爪を妻が切る

素人ばいところがもてる仲居さん  
塀にそい幼き喪主に歩を合わす

鳩の群れ逢うて雀がよく食べる  
灰になる日まで女を想うだろう

駒つなぎ川柳会

里 小路報

ポイントの切り換え出さぬ父の貨車  
刺刀と言われた人で参謀で

沿線のもみじは亡母の影連れて  
年長をたてて世話役かなし

付き合いが悪く世話が早い  
ポイントの金の話はまだ出せず

栗 蕉露

射月芳

よしつぐ

弘治

夢之助

貞吉

昌子

歌子

礼子

すみ

光重

弘

保

いわお

佳秋

武庫坊

貞男

良征

剃刀と内緒話をしています  
 沿線に住んで電車に乗らずに  
 一歳の差とは思えぬ面倒見  
 交際費ゼロ付き合いは避けている  
 ポイントをはずしたところにある答  
 剃刀と言われ憎まれ怖れられ  
 沿線にコスモスの私語落ちている  
 年上の女は派手な柄を着る  
 立小便までも付き合うお付き合い  
 ポイントを消す晩秋の陽が沈む  
 死ぬときの剃刀一本とっておく  
 沿線の地理に詳しいホシがいる  
 年長の人には広い海がある  
 ポイントが外れ直行する若さ  
 剃刀の仇名で少し憎まれる  
 私鉄沿線山がだんだん低くなる  
 年長の知恵をときどき借りられる  
 付き合いは悪いが太陽抱いている  
 口下手の不満剃刀ときつづけ  
 沿線の貧富の屋根を見て通る  
 喋るだけ喋って年長座を外し  
 ポイントをちよつとずらして朝寝する  
 カミソリよ殺意を持った事がある  
 沿線のここら辺りが河内弁  
 年長の園児いささか自負を持ち  
 気に食わぬ人ほど付き合いがいがある  
 二ポイントほど夫には負けておく  
 挨拶も年長らしく行き届き  
 剃刀を研ぐ正面に男の絵  
 沿線の奥に霊園また出来る  
 年長の口がだんだん重くなり

康 恵  
 柳 右 子  
 美 津 枝  
 千 代 三  
 凡 九 郎  
 文 秋  
 あ お い  
 東 雲  
 善 信  
 白 兎  
 冬 葉  
 重 人  
 悦 郎  
 真 砂  
 翠 公  
 律 子  
 雀 踊 子  
 美 幸  
 頂 留 子  
 柳 影  
 萬 的  
 風 的  
 恒 明  
 邦 晴  
 射 月 芳  
 度  
 楓 楽  
 柳 宏 子  
 健 司  
 天 笑  
 潔

ポイントを忘れた愛がつっぱしる  
 とつきの悪さ付き合うまでのこと  
**むらくも川柳会**  
 筆の字にゆれる心をのぞかれる  
 秋祭り孫の可愛い顔を持つ  
 広告が招く見事なおとし穴  
 おみこしを待ってた孫を泣かす獅子  
 身内ほど招いて喜寿の祝い酒  
 招待の上座へあいさつもつてくる  
 月末にヘソクリはぼつ顔を出す  
 月給日招くネオンに負けそうて  
 招き猫覗きたくなる縄のれん  
 招かれてはずむ心の帯をしめ  
 なんとなく月に願いをかけて見る  
 月末のあとひと息の資金繰り  
 月末も静かに暮す老いの幸  
 友招く甚盤へ目の色変って来  
 秋祭り氏子の轍客招く  
 月末のお金せわしく逃げていく  
 招かれて着物をうつす三面鏡  
 さらけはトントン話に花が咲く  
 たぬ時きをして雨の音心地よし  
 筆まめな母の便りの定期便  
 返信に心決まらぬ筆不精  
 筆跡の変化に友の病い知る  
 ご詠歌の鈴 山寺に人うごく  
 子の電話はずむ心の音がする  
 月末になって家計簿あわてだす  
 お早くと母の笑顔で朝がくる  
 泣きやまぬ孫を笑わす百面相  
 秋夜長笑いが洩れて明るい灯

柳 伸  
 小 路  
 明 朗  
 明 朗  
 正 朗  
 は じ め  
 芳 子  
 吉 野  
 竹 乃  
 ヤ ス 子  
 よ し 子  
 は る 代  
 富 子  
 百 代  
 マ サ 子  
 静 子  
 林 蔵  
 藤 子  
 千 里  
 さ つ き  
 保 子  
 武 衛  
 ふ さ こ  
 さ くら  
 八 重 子  
 節 子  
 茂 美  
 三 喜 子  
 ふ み 女  
 清 祥

鉢巻をしめれば力倍になる  
 お神輿をかつぐ子鉢巻威勢よし  
 赤ちゃんの笑顔がすく美しい  
 保育園鈴の音合わず笑ひこけ  
 鉢巻をとりやり直す老いの意地  
 つらくとも笑顔を見せて母強し  
 パチンコで勝つたと父の苦笑  
 つかまらぬグリコ犯人あざ笑ひ  
**三幸川柳教室**  
 好きな道選り好みして台風過ぐ  
 台風日船旅した子を寝ずに待つ  
 台風の中へ先祖を送り出し  
 台風の中へ先で聞く平和論  
 マイホーム持って台風こわくなり  
 開発の跡台風が掻きむしり  
 集金へ台風などと言つとれず  
 癌のない明るい未来信じたい  
 窓きわにいても未来はもっている  
 あの世へはどちらが先とふと今宵  
 未来凶へもう一線を引き洗る  
 ロケットに乗ってサンタがやってくる  
 未来図は平行線となっていた  
 幸せは待っててくれる人がいる  
 待って待って孫の喧嘩に割って入り  
 角隠し微かに揺れて待つ挙式  
 息殺しセールスマンの去るを待つ  
 溜息も添えて家計簿見せに来る  
 息抜きに来て母親は使われる  
 大物の息がかかって孤立する  
 二次会へ早くも息合う顔が寄り

ゆき子  
 さち子  
 雪路  
 なつえ  
 克子  
 よし美  
 蚊声  
 峰雪  
 千秀報  
 静  
 三千子  
 千香子  
 桂香  
 重次  
 静子  
 ふく代  
 美子  
 愛子  
 千枝子  
 千秀  
 定子  
 敏子  
 幸子  
 つゆ子  
 孝子  
 みね  
 忠昭  
 靖子  
 文子  
 智水庵  
 弘朗報



昇格と言つて過疎地へ追いやられ  
先端の尺取り虫は宙を這い  
昇格へ背なの罵倒は耳にせめ  
ハネムーン昇る朝日が縁起見せ  
控え目の中流意識だけ昇る  
昇る運しかつかんではなさない  
昇連飾夫婦岩から陽が昇る  
昇天の煙もつれ秋の雲  
東天が輝き強歩気が晴れる  
昇給の当てが外れた勤労者  
イエスマンぐんぐん昇り管理職  
昇進に妻が珍し飲みますか  
次々と昇る物価になやまされ  
昇格に組合抜けて管理職  
陽の昇る家庭のこまはよく廻り  
小錦の人氣どこまで昇るやら  
年齢が昇る坂道妥協せず  
収穫は予定を遙か上積みし  
昇るのに試験地獄の小役人

川柳化粧槽

植村客遊子報

佳女 紫映 早苗 高代 雄々 寿満湖 舎人 康子 梅朗 志づ子 亮二 八太朗 幸枝 ミヤ子 節子 豊 みをき 孝美 弘朗 実男 岳詩 大鷹 越山 拍秋 奮水 悲石 葉香 紅月 とし

母似だと後姿を人が言う  
味噌汁が美味しくなつて秋まとも  
来客のプザーでだれかもうわかり  
二人いる私が自問自答する  
そっくり反つて大仏様を拝んで来  
豊作へ満足顔で案山子立つ  
娘の破談夕餉無口に夫は立つ  
コスモスの花青春の夢を呼ぶ  
竹トボ孫はなかなか作れない  
川柳後楽  
井上柳五郎報  
楽な方へ向く習性の哀しさよ  
のれん越しどんぶり持つて事故覗き  
事故をして遠く左遷に寂しい身  
事故もなくカーブミラーも茜雲  
勇退か燃える苦節の三十年  
青雲の志が燃える夜学の灯  
燃えつきた男女は風となつている  
反撃に燃えねば容赦のない臍首  
親と子のメリットいつも食い違い  
広告のメリット打算の上でする  
メリットを前面に出し打算する  
老い呆けを防ぐメリット日銭追い  
メリットで動けば越せぬ坂がある  
妙案にぎわめきこえる会議室  
妙案がトイレの中でふと浮かび  
恍惚の父への妙案見付からぬ  
金がるの妙案女むづかぬ  
明智殿妙案たのむ警視庁  
母を恋つ息子あわれや鬼の父  
川柳しんぐう  
川上 溪水報  
大輪

みつ子 川上 孝信 はつ子 まさ子 輝月 永楽 客遊子 健一 照路 博友 秋月 幸好 哲郎 桃風 草風 紫峰 番茶 柳五郎 たけ志 哲治 佐加恵 恒洋 敏昭 玉水

外交員ハンコの重さ知っている  
外交員の目にやるせななき棒グラフ  
地方選妻の外交左右する  
外交員ベラベラ口はよくはずみ  
阿呆でない阿呆寛美に酔わされる  
銭勘定の不足は知つていて阿呆  
出る杭にならず阿呆になつて  
阿呆らしいアイデアからも財の種  
阿呆らしいと論じてくれる温い人  
あれこれと思えどしんとい事はかり  
定年のかけりへしんとい朝の靴  
逢いに行く距離はしんといと言わぬ  
しんといと思えどローンという鎖  
年寄りもしんといビルに繋がる  
割当て少し自腹も切る覚悟  
割当て分だけ飲んだ二日酔  
割当てがめらじがらめの靴のこと  
割当てでもめてるやはりの金のこと  
割当てはとうに済ませた高イビキ  
倉吉川柳会  
渡辺 善句報  
薬でも湯でも治らぬ恋病い  
時刻む音は命を削る音  
バーのドア踏んで出会つた父の顔  
汲み交す一期一会の出湯の客  
一枚のテストで命運分けられる  
色と色の出会い主題を鮮明に  
命の綱かけた年金先細り  
人生は出会い楽しみ旅路ゆく  
飲む薬時に甘さが欲しくなり  
はちばちと本音言わぬことにする  
蛇口から今日の命がほとばしる

昌子 十郎 惠美子 小六ひろし 白光子 武雄 弘生 公治 輝子 国彰 雀踊子 まさ子 富子 豊太 八千代 山久 英子 緑良 溪水 碧江 柳風 律子 民子 車楽 千枝子 康子 秋人 みなと 松女

少年を狂わす雑誌の多色刷

出合い茶屋ぼとり椿が落ちました

草木染めの魅力万葉からもちらう

大切な命へ四季が早すぎる

じんわりと漢方薬が効いてくる

出会いから罪なトビラが開かれる

読みすての雑誌のようなおつきあい

ある出合い一つの戯曲はじまりぬ

細胞のひとつが命食いに来る

病名を知らぬ薬が胃に沈む

損得を言わない人の掌ににぎる

棚の毒薬がぶこやしつ消える

二次元へ遊ぶ雑誌なら読もつ

宗教雑誌に悪の華を見ず

川柳大阪

井上

二枚目は時計見るにもカッコつけ

一日を時計見ないで暮せたら

物干場下着お見事レインボー

動物園パンダのあとはエリマキだ

物腰も板についてる歳となり

満ち足りた物が無くなる日の恐怖

牛小屋のドンが俺だと耕耘機

草原の牛へ酪農今日も暮れ

ちち牛の仔牛哺乳瓶で育てられ

ねずみから引き継ぐ牛は準備中

人生も牛歩のごとく我が夫婦

発想は悪くないかと没にされ

発想を変えたら世間住みやすい

発想と英知宇宙を征服し

難病の子に新薬が待ち遠し

水虫に効く新薬なんか信じない

ゆり子

千秋

あや子

雄々

御前

文子

まさる

秋女

石花菜

瑞枝

荒介

千代

独歩

苦句

喜醉報

虎醉吟

卓

喜楽

寿鳳

天舟

司

醉玉

伸子

与呂志

敏

天平

しげお

一介

洛醉

末坊

比呂志

新薬はスターが飲んで売れ始め  
新薬のニューエス北浜動き出し  
カン治る新薬へ積む全資産

川柳塔唐津支部

久保

総裁へポストねだりの話し合い

子の無心断り夜を眠られず

衣食住足りて平和をもてあます

椎の実が本音囁く池の端

白秋を育てた川の身掬とる

日曜の行事多彩に疲れ果て

ドラマなら並んでみたい俄雨

花火師のからくり酔う夏の夜

月給日妻が酌する一本目

秋の訃へトランプは赤い喪服着る

母さんのメモを鍵つ子疑わす

西宮北口川柳会

妹尾

秋の空少女に金の落葉する

ペットの死少女の胸に穴をあけ

父さんのような恋人持つ少女

恋ごころこの頃部屋にこもりがち

ブランコがゆれて少女の胸もゆれ

少女趣味苦勞を知らぬ育ち出て

青りんご噛んで少女の味がする

少女のまま死にたい等と遠い日よ

シンデレラの靴を捜している少女

マッチ売りの少女の行方知らないか

花柘榴少女に乳房二つ有り

子に残す林夢見て植える苗

散る時も粧う林の美しき

叡山の林をたどり朱に染まる

松林抜けると風の音が消え

喜醉

重人

本蔭樺

素石

義美

ちよ

高明

虹汀

あき

四郎

彩女

弘行

久仁於

正敏

花村

かすみ

武庫坊

春子

春蘭

勝紀

好江

てる

英子

婦美子

右近

春江

隆子

いわゑ

落日の林は無口になるばかり  
松林かくれんぼした人と会う  
ふるさとの雑木林に恩がある  
絵心を誘う旅路の茜雲

間違った絵解きもたまにある夫婦  
スケッチをのぞいて通る花の寺  
車窓から墨絵のような冬海

自販機の愛想笑いもあって欲し  
絵の具箱ひっくり返して秋が去り  
母子授賞ロマンの生涯美人画家

残る日は自分にあつた構図描く  
危な絵の私が少し見えてくる  
一つの絵描いて自由を縛られる

キリストの絵がかけてある目をそらす  
少年の絵から芽を出す柿の種  
えんぴつで余白に描いた絵が和む

踊らないピエロへ閉じる古鏡  
ガラス戸の露で似顔を描いてみる  
二浪から抜けるに空は青すぎる

指しやぶる此の娘も恋をするだろう  
風通しよすぎる家であたりきり  
腹立ちの朝梅干しの種を噛む

故郷の新聞も入れ宅急便  
ふたつ三つ小鳥へ残す庭の柿  
めざらしく日記書いてる秋の雨

社長室機のそばまでよりつけず  
本心をいつわり職場に敵が出来  
血圧のない口ポットが狂い出す

白菊と背較べする七五三  
コーヒーは任す夫のままごとにお  
お寿司でも食うかとさり気ない夫

礼子

しげを

幸

園幸

求芽

静子

冬子

婦美子

紀雄

千世子

よし津

伊三郎

弘生

墮駄

幸

はつ絵

文平

まさお

半歩

良征

春子

眉水

笑子

きよ子

笑女

メ女

保蔵

白溪子

郁栄

みつ子

幽香



# 本社1月句会

日時 一月七日(月) 午後六時  
会場 メンズファッションセンター3階

東区内本町一 電06・941・1918  
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

★短冊交換会(一人3点以内)

★59年度月間賞杯授与と全出席者表彰

おはなし

兼題

「立場」

「フランス」

「願い」

「港」

席題 二題 当日発表  
会費 五百円

榎 宮 榎 榎 榎 榎  
谷 口 谷 谷 谷 谷  
寿 笛 生 生 生 生  
馬 選 選 選 選 選 選  
阿 金 西 西 西 西  
萬 井 尾 尾 尾 尾  
萬 文 萬 萬 萬 萬  
的 秋 的 的 的 的  
選 選 選 選 選 選  
榎 選 榎 榎 榎 榎

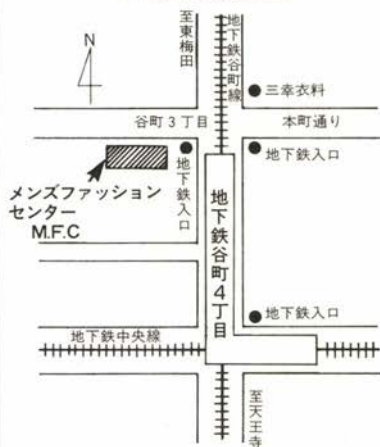
★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

2月の兼題 「俗」 「綺麗」  
「耐える」 「定食」

新しい会場です。ご注意

## 本社句会場略図



# ● 募 集 ●

## 三月号発表表(1月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 葉 選  
水煙抄(10句) 黒川 紫 香 選  
愛染帖(3句) 橘高 薫 風 選  
課題吟(各題5句以内)

「公園」 横田 英 詩 選  
「大胆」 園山 多賀子 選  
「艶(つや)」 堀端 三 男 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

## 四月号発表表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 葉 選  
水煙抄(10句) 黒川 紫 香 選  
愛染帖(3句) 橘高 薫 風 選  
課題吟(各題5句以内)

「骨」 安平次 弘 道 選  
「知恵」 藤井 春 日 選  
「半分」 松高 秀 峰 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。  
★用紙は川柳塔社柳箋をご利用ください。

## 1月の常任理事会は休会

定価 五百円(送料55円)  
半年分 三千二百円(送料共)  
一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十九年十二月二十五日印刷  
昭和六十年一月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎  
発行人 藤原 童心社  
印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三丁目二一〇一六  
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社  
電話 (06) 261-1691 四番  
振替口座大阪 8133368番

## 編集後記

☆明けましておめでとうございませう。

☆昭和四十年十月、川柳塔改題の第一号が出て、今年は二十年の記念すべき年になる。以来、幾多の混乱や試行錯誤の時期を経たものの、昨今は組織の上でも、雑誌発行に關しても、軌道に乗って順調な足跡を示していることは、まことにありがたいことである。

☆直原玉青画伯の表紙絵や東野大八氏のエッセイ、その他、古川柳研究の執筆も息の長い充実した成果を挙げて、川柳塔の力強い推進力となっている。

☆九月下旬には西尾琴主幹の喜寿・金婚・句碑建立五周年の祝賀川柳大会が盛大に開催される予定なので、川柳塔の総力を挙げることは勿論、遠近他社のご支援をお願いする次第です。

☆他に、二十年の自祝の意味で、揮毫作品展や作家須崎豆秋の句集「ふるさと」の復刻版の刊行など意義のある企画を計画している。

☆一月十五日、成人の日の「おめでとう会」には、その手をはじめとして、同人・誌友の皆様の賑々しいご来会をお願いいたします。

☆東野大八氏から頂いた玉稿は、先頃亡くなられた作家、滝井孝作氏を偲ぶ時宜を得たもので、路郎先生とのつながりでも興味深い。

☆川柳群像も新年号を岸本水府で飾られたのも、昨年の七月号が麻生路郎であったのと同じに、筆者のお心遣いが思われて、編集部一同感銘を深くしている。いよいよわれわれの親しく接した川柳人が続々と登場するので、大いに期待して頂きたい。

☆同人、誌友諸氏の評論・随想なども極力掲載したいので、ご寄稿をお願いする。☆年賀広告のご協賛ありがとうございませう。

☆本社句会の会場が変更になった。傘の要らない会場です。

☆今年の川柳塔の合言葉は「九月二十九日、新阪急ホ

テル紫の間でお会いしましょう」です。

(薫)

▼「皆様のおかげで、こんな素晴らしい油掛大黒天の殿堂が立派に出来上がりました。心からありがたく厚く御礼申し上げます」こんな挨拶状と一緒に、老舗のすし折と干した野菜（南蛮・蓮根、人参）の入った小さなビニール袋を提げて、菩提寺から妻が帰って来た。お墓も気になっていたので大黒天堂落慶の日にお寺へ行った。軽い気持ちで参ったところが、壇家總代をはじめ盛装で大変な人出の法要だめたらしい。「そもそも大黒さんは、除難、獲福の神として昔から親しまれ、そのふくよかなお顔と、大きな袋を背負ったお姿は、とても我々になじみ深い仏様です」確かにそうだ、あの袋の中に最低のわが家の当山の大黒さん、油掛大黒天と申し、他にあまり例を見ない珍しい大黒さんです。いつでも我々の願

をよく聞き届けて下さいませが、特に昔から、子の年の日には「ん」が重なってつく、海、山、里のものを御供えして願いをすれば、たちどころに願いがかなうと云い伝えられています。干物のナンキン、レンコン、ニンジンの謎が解けると称すロケットの蓋をあけると朱印を押しお札が入っている。お札の裏に願いの事を書けば成就する由、新年を機に、今年こそは快心の一句が生まれるよう祈らねばならない。

(き)

☆「国産ずりめ入荷」こんな貼紙が焼とり屋の店先に出ていた。本社句会の二次会などで鶏肉の焼とりを食うことはあっても、本物の焼とりはとんとご無沙汰の昨今である。だから事情はよく分らないけれど、わざわざ「国産」と謳っているからには、焼とりの世界も今は輸入品が幅をきかせているのであろう。

☆消息通に聞いたところで、つぐみは中国から大量

に輸入しているようだ。その他の小鳥類も日本の業者が海外で買ひ漁るので、国際野鳥連盟が非難しているという話である。

☆世の中にすずめほど愛らしい鳥はない、と思うことがある。パン屑を撒いてやるとまず一羽、偵察がやってくる。やがて仲間が一斉に舞いおりて、餌をついばみながら、おしゃべりしたり、喧嘩したり、じゃれ合ったり、啼き声もチュンチュン一様ではない。そんな風景を仔細に観察していると見飽きることがない。

☆自然を潰して宅地化が進み、野鳥が姿を消している、すずめだけは残っている。人家の軒や屋根瓦の隙間などに巣を営む習性のためだが、この人懐っこいところが健気にも、いとおしくも思われるのである。

☆路路師に「その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ」の句がある。

すずめ頭張れ路路師一茶がついている

# 謹賀新年

電波新聞社

東京本社

東京都品川区五反田一丁目二一五

大阪本社

大阪市北区中之島三二二四

(朝日新聞ビル内)

## 投稿欄案内

川柳 選者 橘 高薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者 小 寺 正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者 佐々木 信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

※優秀句には掲載紙をお送り致します。

〈投稿規定〉

はがき一枚に三句(首)以内。投稿随時・自由課題

〈投稿先〉

〒530 大阪市北区中之島三二二四

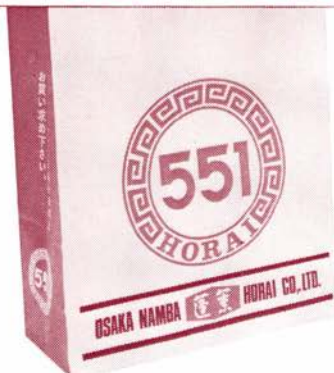
(朝日新聞ビル内)

電波新聞大阪本社学芸部あて。

(川柳・俳句・短歌を明示)

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

# 豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店  
その他有名百貨店でどうぞ



ほうらい



TEL641-0551